

346

12

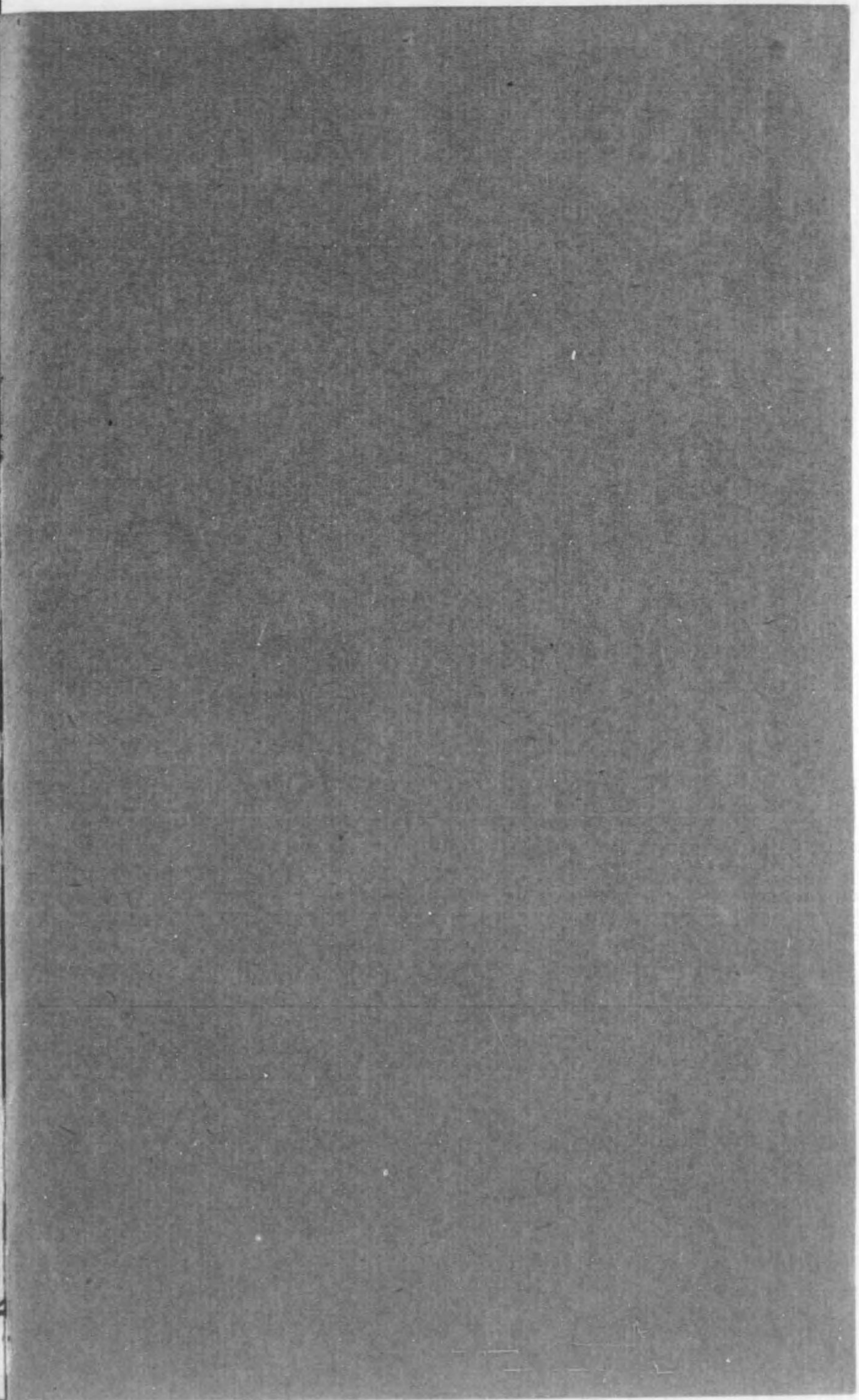


始





諸葛亮



346-12

偉人傳叢書



諸葛亮

杉浦重剛
猪狩又藏
共著

東京博文館藏版

大正
2.11.13
内交

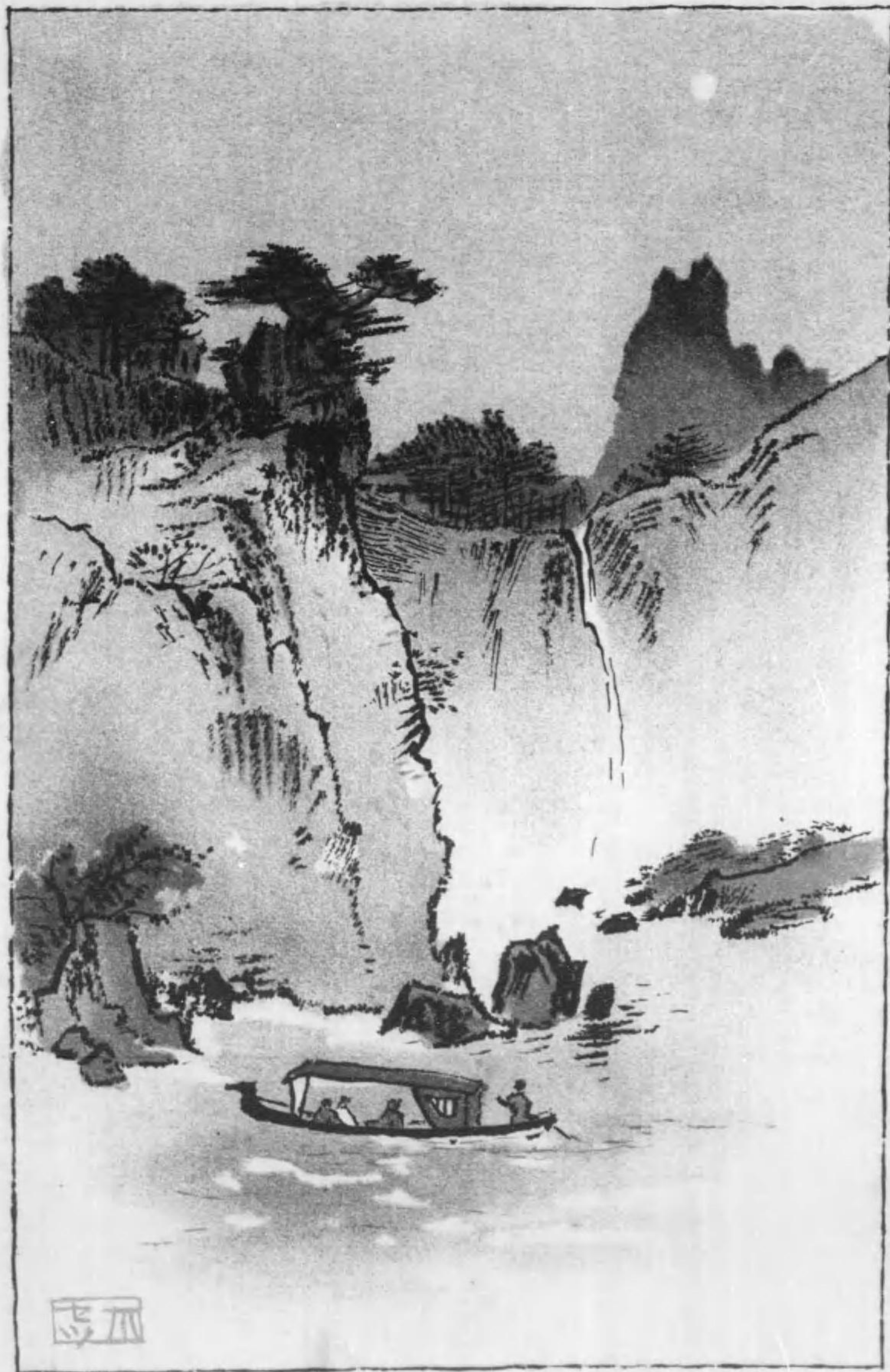


明 孔 亮 葛 諸

永
樂
寫
印

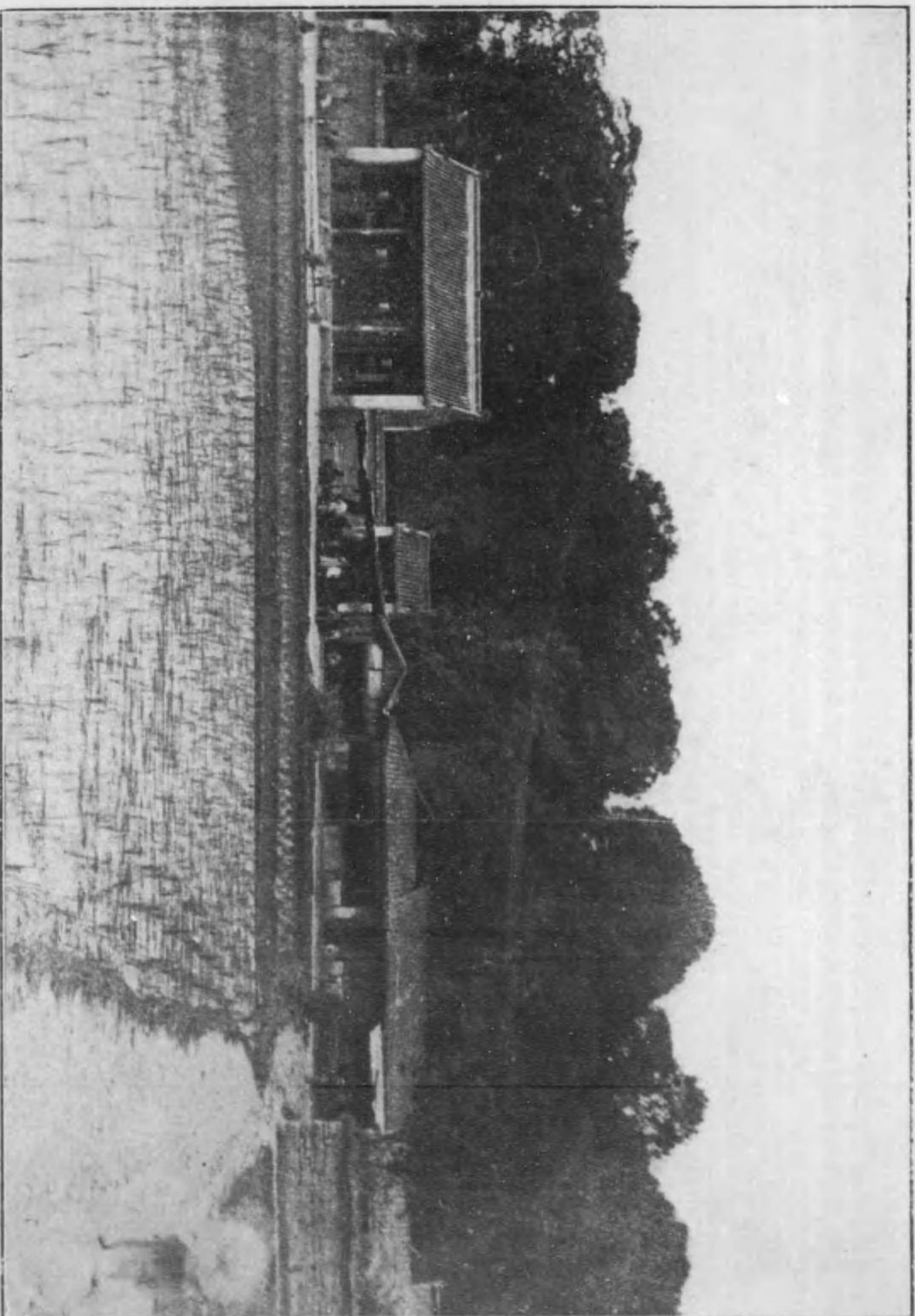


草廬三顧



馬本

壁 赤



(十 祀 合 々 帝 烈 昭) 祠 倭 武

序

友人千頭日新有偉人叢書編輯之舉。余亦與其議。且見囑一部之作成。余雖非無其意。塵務蝟集。不能期之實行也。乃謀之同好猪狩史山。史山採筆數句已脫稿。此篇則是也。先師巖垣月洲先生。曾有雪中三顧圖之詩。曰。銅雀臺上賀雪日。臥龍岡下停車時。黃雲慘澹郊山暗。風叫林外凋旌旗。魚水契合立談際。一見新知如舊知。草廬潛定三分策。阿瞞空圖一統期。君不見西伯渭陽獵。所獲非龍亦非螭。何似南陽三顧聘。臥龍感恩許驅馳。今人空慕古人蹤。畫出劉葛交情濃。悠悠多是葉公輩。不好真龍好畫龍。今茲追慕古人。

畫出臥龍。或雖不免爲葉公輩。亦聊有微意存也。內外經世家。苟以臥龍之心爲心。則其庶幾無大過乎。因一言以換序。

大正二年穀雨節

天台道士識

例言

- 本書は三國の偉人たる諸葛亮を傳して、稍々詳細に互り、間々評論を加へたり。
- 三分割據は諸葛亮の策に出でたるものなれば、其の傳を立つるに當りても、勢ひ三國相關の事實を説かざるべからず。故に本書は一面よりして之を見れば諸葛亮を中心としたる三國史なり。
- 本書はもと青年諸子の爲に編したるものなれども、而かも大人諸士の一讀を得るは著者の快とする所なり。
- 天台道士は我が師なり。本書は道士の旨を受けて執筆したるものなれども、淺學菲才、識固より足らずして筆も亦至らず。爲めに累を道士に及ぼさんことを畏るゝや深し。叙述の整頓せざる、文辭の蕪雜なる、皆我が罪なり。讀者

願はくは之を諒せられよ。

□本書挿畫のうち肖像に關するものは歴代君臣圖像、晚咲堂畫傳等より之を得、風景に關するものは多く『巴蜀』の著者山川早水君の好意によりて之を得たり。茲に之を同君に謝す。

大正二年四月中旬礪川の僑居に於て

史山生誌

目次

第一章 漢末略記

- (一) 外戚宦官は虎狼なり……………一
- (二) 東漢は名節の士多し……………五
- (三) 天變地異は人事と相感應す……………七
- (四) 群雄蜂の如くに起る……………一七
- (五) 治世の能臣亂世の奸雄……………一七
- (六) 孫策雄武にして江東を攻略す……………一八
- (七) 玄徳と關羽張飛……………一九

第二章 南陽躬耕

- (一) 山東は天下の勝區なり……………二五
- (二) 梁父の吟……………二六

目次

(三) 自ら管仲樂毅に比す……………二九

第三章 草廬三顧

(一) 此間自ら伏龍鳳雛あり……………三三
(二) 草廬の對策……………三四
(三) 草廬對策の内容如何……………三九
(四) 美談を嘲るものあり……………四二

第四章 赤壁の戰(上)

(一) 曹操荊州に下る……………四五
(二) 孔明吳に使す……………四九
(三) 周郎大計を決す……………五八
(四) 曹孟德槊を横へて歌ふ……………六二

第五章 赤壁の戰(下)

(一) 天下の大事は此の如くに決せられたり……………七〇
(二) 玄德荊州の四郡を徇ふ……………七二
(三) 周瑜死して魯肅代る……………七五

第六章 天下三分

(一) 蜀の張松法正が玄德に心を寄す……………八〇
(二) 玄德蜀に入る……………八五
(三) 二劉相争ふに至る……………九〇
(四) 孔明蜀に入る……………九二
(五) 蜀土玄德の手中に歸す……………九五

第七章 荊州と漢中

unby

- (一) 孫と劉と相嫉視す……………一〇一
- (二) 曹と劉と漢中を争ふ……………一〇六
- (三) 玄徳漢中を取る……………一〇九

第八章 美髯公の末後

- (一) 呂蒙謀主として荊州を謀る……………一二三
- (二) 關羽大に兵を中原に出す……………一二四
- (三) 吳人關羽の背後を襲ふ……………一二六
- (四) 荊州を貸したりといふは非なり……………一二九
- (五) 荊州を失ふの罪何くに歸するか……………一三六

第九章 正閏論

- (一) 曹丕漢室を篡ふ……………一二八
- (二) 玄徳漢帝の位に登る……………一三〇

- (三) 正閏論の概要……………一三二

第十章 秭歸の敗軍

- (一) 玄徳大に吳を征す……………一三九
- (二) 吳の陸遜玄徳を破る……………一四二

第十一章 白帝城

- (一) 魏吳の關係如何……………一五〇
- (二) 玄徳國を擧げて孔明に託す……………一五二

第十二章 施政

- (一) 施政の用意如何……………一五七
- (二) 施政の態度如何……………一五九
- (三) 施政の方針如何……………一六一

目次

第十三章 南蠻征伐

- (一) 先づ吳と連和す……………一六六
- (二) 大に南蠻を征して心戦を試む……………一七一
- (三) 南征雑事……………一七六

第十四章 北征

- (一) 前出師表……………一七九
- (二) 街亭の役利あらず……………一八五
- (三) 後出師表……………一九二
- (四) 孔明大に仲達を破る……………二〇〇

第十五章 五丈原

- (一) 孔明渭濱に屯田す……………二〇四

- (二) 魏吳の勝敗……………二〇六
- (三) 秋風大星落つ……………二〇九
- (四) 孔明子孫ありといふべし……………二一〇

第十六章 雑事

- (一) 孔明の著作……………二二三
- (二) 八陣……………二二六
- (三) 木牛流馬……………二二九
- (四) 遺事の雑記……………二三一
- (五) 蔣琬……………二三七
- (六) 費禕……………二三九
- (七) 姜維……………二四〇

第十七章 諸家の評論……………二四二

第十八章 碑文……………二五一

第十九章 年表……………二五五

附 錄 三國諸豪の面目……………二五六

目次終

諸葛亮

杉浦重剛 猪狩又藏 共著

第一章 漢末略記

(一) 外戚宦官は虎狼なり

光武皇帝が王莽末年の亂世に崛起し漢室中興の大業を遂げてより、明帝章帝相承けて天下平安なりしが、章帝の末年竇憲外戚を以つて政權を私してより、東漢弊政の端を發し和帝以後に至りては、外戚の專恣愈々甚だしく、殤帝安帝順帝沖帝桓帝五代の間に、鄧騭あり閻顯あり、梁冀あり、相次で政治を毒したり。殊に所謂跋扈將軍梁冀が如きは、一族繁榮を極めて、七侯三皇后六貴人二大將軍を出

し、公主に尙するもの三人、卿相尹校五十七人、朝廷に蟠屈して梁氏にあらざるものは人に非ず。專擅兇恣、殆ど極る所を知らざるなり。主聽を蔽ひ、士口を钳して專政二十年。其の間質帝を毒殺し、忠臣季固、杜喬を獄に死せしめ、積惡數ふるに堪へず。桓帝深く之を憤り、遂に宦官單超、徐璜等の五人と相謀り、冀を誅して禍を去れり。(二年)

梁冀を除きてより後は、外戚の權稍衰へたりと雖も、宦官の之に代りて横恣を極むるあり。前門の虎は倒れて、後門の狼は進み來れり。漢室の政治を濁亂せしむること更に甚だしきものあり。夫れ宦官は本刑餘の徒にして、士流に伍すべきものにあらざるも、常に禁密に居りて主君の側に侍し、讒笑を窺つて讒諛を售るを事とす。人主たるもの深く之を察せざれば、忽ち彼等が掌中に翻弄せらるゝを免れざるなり。

支那の歴代を通じて、宦官の横暴を極めたるは、東漢、唐明の三代を以て最も甚しと爲す。東漢に於ては、和帝の外戚竇憲を除かんとするや、宦官鄭衆の力を借り、桓帝の梁冀を除かんとする亦宦官の力を借れり。是れ卑しむべき宦官の勢力の實は外戚にして且つ大臣大將たるものよりも強大なりしを證すべき事實なり。殊に梁冀の倒れてより後は、彼等の兇惡一層の甚だしきを加へたり。試に其の所行の一斑を見よ。

(一) 彼等は權威を借りて良家の婦女を奪ひ、之を閉ぢ込めて白首に至るまで配(左雄の)偶無からしむ。(上書)

(二) 侯覽が如きは人の妻を奪ひ、婦女を掠めたり。(侯覽の傳)

(三) 明珠南金の寶を以て其の室を満たせり。(黃瓊の傳)

(四) 競つて第宅を起し、壯麗を極め、金銀屬眠犬馬に施し、僕從皆牛車に乗り、從ふに列騎を以てせり。(單超等の傳)

(五) 其の曠は以て帝王を葬るべく、其の宅は以て帝王を居らしむべく、別宅亦以て牧伯を居らしむべし。壯麗知るべきなり。(張讓の傳)

(六) 民田を強奪せり。(劉瑜の)

(七) 侯覽が前後、人の宅を奪ふこと三百八十一所、田は一百十八頃なり。第宅を起すこと十六區、皆高樓池苑あり。制度宏深にして、僭に官省に類す。(侯覽の傳)

(八)張讓靈帝にすゝめて宮室を修め、太原河東狄道諸郡の材木文石を徵發す。每州郡部送りて京師に至れば、輒ち用に中たらざるを譴責し、賤價を以て之を折き十に一を酬むす。又材木を收めずして遂に腐爛せしむるに至ることあり。(張讓の傳)

以上は僅に數箇の事例を擧げたるに過ぎざるも、亦以て彼等が良民を害し、天下を毒したるの状を見るべきなり。

今、水を以て之を譬へんか。廟堂は上流なり、社會は下流なり。上流に立ちて政權を掌握するもの先づ濁らんか、下流は必らず其の汚濁を被るべし。若し濁れるを激せんとせば、海潮の差し來るが如くに逆流せざるべからず。而して其の結果は、清濁の衝突となり、國家の争亂となるを免れざるなり。東漢の末世は上流既に甚だしく濁れり。之に激して起つものなきか。所謂清節の士あり。世の濁流と逆行し衝突して、一大波瀾を捲き起したり。然れども彼等が手には政權を有するとなし。かるが故に終に宦官輩の毒物を一掃すること能はざりしを遺憾とす。

(二) 東漢は名節の士多し

其の初め光武帝の起るや、嚴光周黨等の如き處士を敬重して、名節を獎勵する所ありしかば、遂に東漢一代の風尚を爲し、節義の士彬彬として輩出せり。漢末の濁政に當りては、李膺杜密陳寔范滂等の諸士超然として時流に抗し、宦官の兇暴を憎みて之を攻撃すること已まず。清濁二流の衝突は免れ難き勢となれり。桓帝の延熹九年宦官先づ發して、李膺杜密以下所謂清節の士二百餘人を黨人と稱し、一網に打盡したりしが、賈彪之れが救解に盡力し、竇武上書して帝を極諫せしかば、膺等一旦赦されて田里に歸ることとなりぬ。所謂黨錮の禍ひ是なり。此の事ありてより清節の士は名望益重きを加へ、三君八俊、八顧、八及、八厨等の名目を以て傳稱せられたり。當時苟も名節を標榜して立つものは、名の黨人中に加へられざるを以て耻辱とす。彼の西川の豪傑を以つて自ら任じたる皇甫規が、上書して己れも亦黨人なりと訴へたるが如きものは是なり。然れども黨人の名聲益高きは宦官の憎惡をして愈深からしむる所以なり。靈帝の建寧二年

再び黨人の獄起りて李膺等百餘人、一時に殺されたり。
思ふに清節の士なるものは、好んで苟難を爲し、卓特の行を以て流俗以外に絶
出せんことを務め、以て自ら高しとせり、かるが故に名の得べきあれば、全力之に
赴き、殊更に濁流を激して以て身を滅ぼし、國を弱めたるの感なきに非ず。清田
儋叟が、其の通鑑評語に於て『妖怪輩出』の四字を以て彼等を罵倒したる所以、亦茲
にあるか。然れども世を舉げて濁流に投じ去らんとする時、屹然として名節を
持し、一死を輕んじて邁往直進し正義を絶叫して世を警醒せんとするもの、又大
に稱すべきに非ずや。たとひ世運は日進月歩すといふも、道義節操の念は強ち
進歩したりといふべからず。今日の所謂黨人なるものを見るに、多くは一定の
主義なく、識見なく、唯時と共に抑揚するのみ知りて、彼岸此岸に浮沈する、萍の
如く三十年の名節を一脚の椅子、一封の黄金に賣り、恬として自ら慚づるなき者
比々皆然り。之を東漢名節の士に比すれば如何。少くとも彼は政權と金權と
に屈せざるものなり。此の如き人物の存在する間は、必ずや濁らんとする人心
の一部を支へて清からしむるを得べし。惜むべき哉漢末の世は、正人悉く擗撃

せられて奸惡の徒、獨り時を得たり。國家の事亦知るべきのみ。

(三) 天變地異は人事と相感應す

清節の士を殺してより、宦官王甫曹節等の兇暴殆んど譬ふるに物なし。忠良
の士は絶えず貶竄せられ、奸惡の小人、益々時を得て、萬民を毒すること已まず。
而して靈帝の暗愚なる、良藥の口に苦きを悟らず。讒者の舌の甘きを知らず。
彼の渤海王悝を殺し、宋皇后を幽殺したるが如き、皆王甫の甘言に惑はされたる
ものなり。加之、邸舎を西園に開きて官を賣り、二千石は價二千萬、四百石は價四
百萬、公たらんとするものは千萬、卿たらんとするものは五百萬なり。然れば冀
州の名士として聞えたる崔烈の如き、猶ほ五百萬金を納れて以て司徒の榮官を
買ふに至れり。他は推して知るべきのみ。此の如く國民の道徳を犠牲として
集め得たる金銀絹帛は、園中の萬金堂に蓄積せられて帝が遊蕩の資となりぬ。
嗚呼地上の國家は既に濁亂汚穢を極めたり。天上の星辰風雨亦異變なかるべ
けんや。試に左表を見よ。

靈帝建寧二年冬十月。清節の士百餘人を殺す。
 同 同 三年春三月。日蝕あり。
 同 同 四年二月。地震あり海溢る。
 同 同 同三月。日蝕あり大疫あり。
 同 熹平元年夏六月。大水あり。
 同 同 二年春正月。大疫あり。
 同 同 同夏六月。地震あり海溢る。
 同 同 同冬十月。日蝕あり。
 同 同 四年夏四月。大水あり。
 同 同 同六月。螟あり。
 同 同 六年夏四月。大旱。蝗あり。
 同 同 同冬十月。日蝕あり。地震あり。
 同 光和元年春二月。日蝕あり。地震あり。
 同 同 同夏四月。地震あり。侍中寺の雌雞化して雄となる。

同 同 同秋七月。青虹玉堂殿中に見ゆ。
 同 同 同八月。星隕つ。
 同 同 二年春。大疫あり。地震あり。
 同 同 同夏四月。日蝕あり。
 同 同 三年秋。地震あり。
 同 同 四年夏六月。雹を降らす。
 同 同 五年二月。大疫あり。
 同 同 同夏四月。旱あり。
 同 同 六年夏。大旱あり。
 同 同 同秋金城河溢る。五原山岸崩る。
 是れ靈帝の即位より黃巾の賊の起るまで十有六年間に於ける天變地異を列記したるものなり。亦甚しといふべきなり。
 自然界の現象を以て人事に關係なしとせんか。天暖かにして地は霞み人は和らぐ。天地人の三者亦感應なしといふべからず。支那は古來天象を以て人

事を卜するの風あり。強ち非理なりとすべからず。癡鈍なる靈帝も天變の餘りに頻繁なるに恐れてや、光和元年秋七月詔して消復の術を問はせ給へり。光祿大夫楊賜對へて曰く「今、妾媵閹尹共に國朝を専らにし、鴻都の群小並に各々拔擢せられ、而して縉紳の徒をして吠吠に委伏せしめ、口に堯舜の言を誦し、身に絕俗の行を踏むもの、溝壑に委捐せられ、冠履倒易し、陵谷代處す。幸に皇天象を垂れて讒告せらる。周書に曰く、天子怪を見れば則ち徳を修むと。唯陛下佞巧を斥遠し、禁遊を抑止し給へ云々」

蔡邕も亦對へて曰く「臣伏して思ふに、諸異皆亡國の怪なり。天大漢に於いて慙懃已ます。故に屢々妖變を出して以て譴責に當て、人君をして感悟して危きを改め、安きに即かしめんとするなり云々。蜺墮ち鶏化するは皆婦人政に干するの致す所なり（中略）。復程大人（宦官）といふものあり。將に國患を爲さんとす。宜しく明らかに禁令を設け、深く趙霍を惟ひ以て至戒と爲すべし云々」

楊蔡二氏は天象を假りて、時弊を痛言し、主上を極諫したり。惜しい哉、靈帝其の忠言を用ふるに能はず、却て宦官曹節の讒を信じて、蔡邕を洛陽の獄に下し、

大不敬を以て之を罪するに至れり。

閹寺中の妖魔王甫は、官の財物七千餘萬を掠めたるの罪科を摘發せられて、光和二年洛陽の獄裏に死したり。然れども趙忠張讓等の之に次ぎて又横暴を恣にするあり。嗚呼天下の民は何時までか此の宦官政治の害毒を忍ぶべきか。漢人の血管中には、幾千年來流れて盡きざる革命の血あり。惡政に熱せられて而して爆發するを常とす。災異の頻々たりしは地氣と人心と天意との感應したる表象にあらずとせんや。果然靈帝の中平元年には、黃巾賊張角の亂を唱へて起るあり。火藥に似たる亂民は、既に天下に充ち満ちたり。此の妖賊の一點火によりて忽ち四方に爆裂し、騷亂又騷亂終に收拾すべからざるに至りぬ。而して宦官政府は今更に驚けるもの、如く先づ黨人に大赦を與へて民心を收めんとせしも、事既に晚し。人民は爾かく愚弄せらるべきものにあらざるなり。

(四) 群雄蜂の如くに起る

會て清節の士百有餘人の一時に害せらるゝや、四方の豪俊は一旦其の口を緘

したり。然れども人の口を緘するは河を塞ぐよりも危し。決潰せざれば已まざるなり。黄巾賊は則ち三十六萬の兵を以て惡政の堤防を決したるもの。而して天下の英雄は之に乗じて起れり。嘗て宦官の專横を極むるや、大才あり大抱負あるものは、自ら退きて其の根據を定め、徐ろに時の至るを待てり。されば黄巾の賊起るに及びて、袁紹、董卓、孫堅、曹操、劉備等の諸豪、一時に其の頭角を現はし來れり。今や帝權全く地に墜ちて、天下は優者の手に放棄せられたり。治世の能臣も此の如き亂世に在りては自ら奸雄たるべし。大望あるもの、血管は熱して沸くが如く、才能を競ひ、武略を闘はして四方に角逐する亦自然の勢といふべきなり。三國時代の偉觀は此の如くにして來れるものなり。

黄巾の賊は皇甫嵩之を討ちて、賊魁張角兄弟を斬りたるも（中平元年八月餘賊猶ほ未だ平定に歸せざるに、宦官張讓等十三人は新たに列侯に封せられて權貴極りなし。而して靈帝の暗愚なる、常に張讓を呼びて『我公』といひ、趙忠をば『我母』といへり。天下此の如き奇怪事あらんや。故に後世の史家は曰く『宦官は樹中の蟲なり、蟲を焼きて樹も亦枯ると。漢室が彼等と滅亡を共にせざるを得ざ

るに至りたるは悲しむべきに非ずや。

靈帝は年三十四にして崩せられ、帝辯位を承く。僅に十四歳なり。何太后政を聽き、太后の兄何進大將軍たり。時に中軍校尉袁紹、何進に勸めて悉く宦官を誅除せんとす。進之れを太后に白して其の裁許を請ひたるも太后聽さず。遷延して大事露顯するの恐れあり。袁紹また何進に説き、四方の猛將を召して、計を決行せんとす。董卓、橋瑁等の諸將皆召され



卓 董

て上洛す。兵未だ至らざるに宦官先んじて何進を宮中に斬る。是に於て袁紹は最後の手段を執るの他なきに至れり。遂に兵を勸して諸宦官を捕へ、少長となく皆之を殺すと、凡そ二千餘人なり。百數十年の間横暴を極めたる宦官は遂

に餘類なきに至れり。蘇軾曰く「國の小人あるは猶ほ人の瘦あるが如し。瘦は必ず頸に生じて咽に附く。是を以て去るべからざるなり。賤丈夫あり。其の患に勝へずして之を決去す。是を以て瘦去りて死を得たり」と。宦官の漢室に於けるは恰も頸の瘦の如し。之を去りて身亦亡ぶ。誠に已むとを得ざるの勢といふべし。

董卓が兵を率ゐて都に入りたる時は袁紹が既に宦官を廢殺したる後なりき。卓は帝辯を以て愚なりとし之を廢して陳留王協を立てんとするの意あり。袁紹聽かず。兩雄争ふて紹は遂に冀州に走れり。是れより卓獨り權を弄して横恣極りなし。先づ帝辯を廢して陳留王協(即ち獻帝)を立て何太后を弑し、自ら相國となり劍を帯びて殿に上れり。

されば關東の豪傑相共に兵を擧げ袁紹を推して盟主となし以て董卓を討つ。後將軍袁術、冀州牧韓馥、豫州刺史孔伧、兗州刺史劉岱、陳留太守張邈、廣陵太守張超、河内太守王匡、東郡太守橋瑁等各々萬餘の兵を提げて相會せり。曹操劉備も亦軍中に在り。長沙太守孫堅は稍々後れて兵を擧げ同盟に加はりぬ。

董卓は同盟軍の勢ひ盛んなるを見て洛陽の宮廟を燒き諸帝の陵を發き其の珍寶を收めて都を長安に遷したり。是より戦争相次ぐと雖も同盟軍は遂に卓を倒すの力なくして次第に解散し、各自州郡に還りて自強の計を爲し、卓は益々横暴にして車服を天子に擬するに至れり。然れども驕れるもの亦久しからず。三年にして卓は其の臣呂布の爲に弑せられたり。



魏 大 祖 (操 曹)

(初平三年)

呂布は膂力人に過ぎ、武勇絶倫なるも、性剛偏にして大事を爲すべきものにあらず。董卓に代りて政柄を握らんことは思ひも寄らざる所なり。幾程もなくして李傕郭汜等兵を擧げて關中に亂入す。呂布戦ひ敗れて

走る。是より關中大に亂れて王命聊かも行はれず。群雄四方に割據して相互に吞噬し兼併す。戰國の世は再び現はれたり。今試に其の重なるものを列記せん。

袁紹 冀、青、幽并、四州。

(西暦二〇二年死す。其の地曹操に歸す。)

袁術 淮南。

(破られて死す。曹操に)

陶謙 徐州。

(同一九四年卒す。其子琰は曹操に降る。其)

劉表 荊州。

(同一九四年卒す。璋代り立ちて劉備に滅さる。璋代り)

劉焉 益州。

(同二〇二年卒す。劉璋に破られ超は劉備に歸したり。破られ)

韓遂、馬超 涼州。

(同一九九年袁紹に滅ぼさる。)

公孫瓚 幽州。

(傳へて孫淵に)

公孫度 遼東。

(同二五年曹操に降る。)

張魯 漢中。

(同二〇〇年死す。魏國を成す。)

曹操 兗州、豫州。

(同二〇〇年死す。弟權之に代る。)

孫策 江南一帶。

(同二〇〇年死す。弟權之に代る。)

劉備 無領地。

(同二五年成都に入る。)

以上諸豪のうち最も注目を要すべきものは曹操、孫策兄弟及び劉備なり。

(五) 治世の能臣亂世の奸雄

曹操字は孟德。沛の人なり。前漢の宰相曹參の末裔なり。少にして機警權數あり。任俠放蕩にして行業を治めざるを以て世人未だ之を知るものなし。唯梁國の橋玄、南陽の何顛のみ之を奇とす。玄曹操に語りて曰く「天下將に亂れんとす。命世の才に非れば濟ふこと能はざるなり。能く之を安んずるものは、其れ君に在るか」と。年二十にして孝廉に擧げられ、爾來仕官して數年を経たるも、徹々たる官職は此の雄才を容るゝに足らず。辭し去つて郷里に歸る。既にして關東の諸豪の兵を擧げて董卓を討つや、操も亦家財を散じて義兵を募り、袁紹等と共に轉戰奇功を奏すること數々なり。之に依りて東郡の太守に任せられ、漸くにして天下に其の名を知られたり。董卓の亡びて天下の擾亂益々甚だしきに至るや、曹操は兗州の刺史となり、袁

術陶謙呂布等の諸豪と戦つて之に勝ち次第に地を擴め勢力を加へたる折から、獻帝難を避けて長安を出奔せらるゝあり。曹操之を迎へて許に居り(建安元年)自ら大將軍となり司空となり天子を戴きて四方に號令し勢ひ益々振ふ。荀彧荀攸郭嘉程昱等の諸名士之が謀主たり。當時操が最大強敵たるものは袁紹なり。紹は冀青幽并四州を領して土地廣大士馬精強なり。建安五年官渡の戦に於て曹操大に袁紹の軍を破る。是より紹の勢ひ衰へて建安七年に死去したりしかば曹操遂に北方を定めて江北の地を領するに至りぬ。

今や曹操が勢力は以て天下を呑むに足れり。大軍八十萬を擧げて南荊州に下り劉琮及び劉備を攻む。琮は忽ち降り備は走りて援を吳の孫權に求む。權之を諾し周瑜に兵三萬を與へ操が軍を赤壁に迎へ戦つて大に之を破れり。操が統一の大事は此の一戦に敗れて三國對立の形勢こゝに成れり(建安十年)

(六) 孫策雄武にして江東を攻略す

長沙太守孫堅曾て董卓を撃つて武名を世に知られたり。後袁術に屬せしが、

荊州の劉表と戦つて死せり。堅四子あり策權翊匡といふ。策は當時年僅に十七なりしが父の兵を領し江を渡りて轉鬪す。向ふ所皆破れ敢て其の鋒に當るものなし。百姓孫郎の至るを聞けば皆魂魄を失したりといふ。

策は年少にして英氣溢るゝ如く猛銳世に冠たるのみならず容顏秀美にして性潤達好んで笑語し善く人を用ふ。故に士民の策に見ゆるものは心を盡して之に仕へざるなく各々策の爲に死せんことを樂みたりといふ。而して其の兵を治むるは則ち軍令整肅秋毫も犯す所なし。僅に數年にして江東を征定するを得たるは單に其の武力の大なりしが故にのみあらざるなり。

曹操が袁紹と官渡に相持するや策は陰かに許を襲ひて獻帝を迎へんとするの志あり。兵を集め諸將を部署して未だ發せず。偶々吳郡太守許貢の客に傷けられ創重くして死せり(建安五年)年僅に二十有六なり。弟權亦膽略あり。兄の後をつぎて江東を保ち赤壁の戦に大勝して吳國の獨立を確實ならしめたり。

(七) 立德と關羽張飛

劉備字は玄徳涿郡の人なり。漢の景帝の子中山靖王の末裔なり。家貧困なるを以て、備は母と共に履を賣り、蓆を織りて業となせり。少時其の同族たる劉徳然、公孫瓚と共に廬植に就きて學ぶ。徳然の父元起といふもの、常に備の學資を供給したり。元起の妻の曰く「人各家を爲す、如何でか常に資を給すべき」と。元起は「吾が一族此の兒あり。常人に非ず」とて、深く之を重んじたり。公孫瓚の如きは備より年長なるも、却て兄として之に事へたりといふ。備は年少にして讀書を喜ばず。音樂を好み、衣服を美にす。身長七尺五寸、手を垂れて膝に下り、顧みて己れの耳を見る。言語少なくて能く人に下り、喜怒色に現はれず、好んで人と交る。是を以て豪俠の年少争つて備のもとに集れり。就中關羽張飛の二人と交ること最も深くして密なりき。靈帝の末、黃巾の賊起るや、備も亦兵を擧げて功あり。初めて安喜尉に叙せらる。久しからずして官を棄て、又幾許もなく軍に加はりて董卓を討つ。然れども未だ大に志を得るに至らず。或は公孫瓚に依り、或は陶謙に歸す。後、徐州を領して袁術と戦ひ、呂布と争ふ。遂に呂布の爲に破られ、走りて曹操に依る。操は之を遇すること極め



蜀先主(玄徳)

て厚く、表して左將軍となし、出づれば輿を同じうし、坐すれば蓆を同じうしたり。操の謀臣程昱曰く「劉備を見るに、雄才ありて甚だ衆の心を得たり。終に人の下に居るものに非ず。願はくば早く之を圖り給へ」操曰く「方今英雄を收むるに當り、一人を殺して天下の心を失ふは不可なり」と。優遇せす。

當時曹操頗る專横にして、第二の董卓たらんとす。獻帝の舅にして車騎將軍董承といふものあり。深く操を惡み、備と相謀りて之を除かんとす。一日、曹操と共に食す。突如と

して曰く「今天下の英雄は唯君と我とのみ。本初(袁紹)の徒は數ふるに足らざ

るなり」と。偶々雷名あり。備箸を落して恐るゝ色あり。夫れ曹操は一代の奸雄なり。失意不遇の食客を目して天下の英雄となす。眼識固より非凡なるものあり。備が箸を落して以て怯弱を示し、操が猜忌の念を此の機微の間に避け得たるは、又た是れ非凡の辣腕といふべし。備は單純なる好々翁にあらざるなり。

曹操を除かんとせる密計は露顯して、董承等は殺されたり。備は小沛に在りて兵を集むること數萬、遙に袁紹と相應ず。曹操自ら將として備を討たんとす。諸將皆曰く「公と天下を争ふものは袁紹なり。今紹方に來りたるに、之を棄て、東す。紹人後に乘するあらば若何」曹操曰く「劉備は人傑なり。今撃たざれば必ず後患を爲さん。袁紹は大志ありと雖も、而かも事を見ること遅し。必ず動かざるべし」と。謀臣郭嘉また操に勸めて疾く備を討たしむ。操終に兵を進めて備を撃ち、其の妻子を擒にし、關羽を降したり。備は倉皇として北に走り、袁紹に依ることゝなりぬ。既にして官渡の大戦あり、袁紹も亦破れしかば、備は更に荆州に走りて劉表に歸す。表は上賓の禮を以て備を遇し、兵を與へて新野に屯せ

しむ。幾許ならずして荆州の豪傑之に歸するもの多かりしかば、表も亦漸く備を忌むに至れり。

備、荆州に在ること數年、一日表と共に坐し、起つて厠に至り、髀裏に肉の生ずるを見慨然として流涕し、坐に還る。表、怪しみて之を問ふ。備曰く「吾身常に鞍を離れず、髀肉皆消す。今や久しく騎ることなし。髀裏に肉生ず。日月馳するが如し。將に老いんとして功業建たず。是を以て悲しむのみ」と。嗚呼、備は年既に四十を踰えたり。名聲天下に鳴ると雖も、尺寸の地をだも有せず。四方に流寓して一大食客たり。つらく人生の老い易きを觀すれば、髀裡肉生の歎、亦想ふに堪へたり。

建安十二年、備諸葛亮を得て、翌十三年には赤壁の戦あり。次で荆州を略し、蜀に入り、成都を取りて三分割據の形勢成れり。其の詳細は之を本傳に於て語らん。

按ずるに、支那四千年の史上、人材の輩出雲の如く鬱々乎として偉觀を極めた

るは、之を前にしては戰國、之を後にしては三國の世なり。秦漢唐宋は遙に及ばざるものといふべし。東漢の末、帝權上に衰へて、豪俊下に起り、天下は優勝者の之を取るに任せられたり。智あるものは奮ひ、勇あるものは起つ。是れ正に英雄角逐の好舞臺なり。而して曹操は權術を以て人を馭し、孫氏兄弟は意氣を以て相投じ、劉備は性情を以て相契る。各々能く人を用ゐて、一藝一能の士も、之を野に遣すことなし。見よ曹操を擁して中原に立てるものには、荀彧、荀攸、郭嘉、程昱、司馬懿、張遼、許褚、徐晃、張郃の諸士あり。孫權を佐けて江東に據れるものには、周瑜、魯肅、呂蒙、陸遜、程普、甘寧の諸士あり。劉玄徳は地を得ること最も遅く、人を得ること亦最も少しと雖も、猶ほ關羽、張飛、趙雲、馬超あり、殊に諸葛亮を得るに至りては、眞に是れ天下第一流。諸豪のうちに立ち、巖然として高峯の雲に聳ゆるが如し。曹操、孫權ともに之を得ること能はずして、玄徳獨り能く之を得たり。是れ誠を以て人を待つゝの致す所なり。

第二章 南陽躬耕

(一) 山東は天下の勝區なり

諸葛亮字は孔明、山東瑯琊の人なり。東漢靈帝の光和四年(西暦一八一年)を以て生る。父を珪といふ。漢の司隸校尉諸葛豐が後なり。珪に三男一女あり。長は瑾、次は亮、季は均なり。女兒は後龐徳公に嫁せり。昔し漢楚の際に葛嬰といふものありて、陳涉が部將たり。後、其の子孫諸縣に封せられしかば、諸葛を以て氏となすに至れり。是れ風俗通に傳ふる所なり。或は曰く、葛氏は本瑯琊諸縣の人、後陽都に徙る。時に陽都また葛姓の人ありしかば、時人之を區別せんため、諸葛と呼び爲したりと(吳書)。其の孰れか是なるを知らずと雖も、諸葛の姓は葛氏と諸縣との連稱より來りたるは疑ひなきものゝ如し。

山東は天下の勝區、古へ齊魯の境域たり。黃河の水は天上より來り、洋々とし

て流れて海に入り、泰山は峨々として空に聳えたり。高さ四十餘里、凡て十八盤南天門よりして、東西二大門を歴て絶頂に至る。秦觀峯上に立てば西長安を望むべく、越觀峯上は南會稽を望むべし。峪に石經、桃花あり。洞に白雲、水簾あり。池に王女、王母、白龍あり。封禪臺五大夫の松、秦の泰山碑の如きは、山中の名蹟として世に知らるゝものなり。山水秀で、靈氣あり。されば此の地古へより俊傑を生むこと頗る多し。

孔夫子及び其の門人顔回、子路、曹參、稍々後れては孟子、皆山東の人なり。將相には孫武、田單、丙吉、魏相の諸士あり。既に其の人に乏しからずと雖も、天は更に諸葛孔明を下して、儒家の心術と將相の才識とを賦與したり。山に泰山あり。人に諸葛公あり。山東また以て天下に誇るべきなり。

(二) 梁父の吟

孔明は幼にして父母を喪ひ、從父玄に養はる。玄嘗て豫章の太守たり。久しからずして官を捨て、荊州に入りて劉表に依る。而して玄の卒するや、孔明は敢

て故郷に歸るの意なく、荊州に留まりて南陽に家居し、自ら隴畝に耕して、好んで梁父吟を爲す。其の詩傳はるもの僅に一あり。曰く

- 步出齊城門
- 遙望蕩陰里
- 里中有三墳
- 業々正相似
- 問是誰家塚
- 田疆古冶氏
- 力能排南山
- 文能絶地紀
- 一朝被讒言
- 二桃殺三士
- 誰能爲此謀
- 相國齊晏子

詩の意は明らかならざれども、昔し齊國に陳開疆、顧冶子、公孫捷といへる三勇士あり。晏嬰之を景公に讒して曰く、大王三桃を摘み取りて自ら其一箇を食し、残る所を以て功の高きものに與へ給へと。景公、二桃を陳、顧二氏に與ふ。公孫捷は之を聞きて自刎したり。されば陳、顧の二氏亦慚づる所あり。自殺して果てたり。詩は則ち之を詠じたるものなりといふ。孔明は齊の人にして年少の頃より他郷に流寓したりしかば、梁父吟を以て自ら望郷の念を慰めたるものならん。

襄陽府の西二十里ばかりにして丘あり、隆中といふ。孔明の家する所なり。襄陽記を按ずるに「襄陽郡に孔明の故宅あり。井あり。深さ五丈、廣さ五尺、堂前三間屋あり。地は基趾極めて高し。是れ避暑臺なりといふ。宅は西山に面し、水に臨む。孔明常に之に登り、瑟を鼓して以て梁父吟を爲す。因て之を名づけて樂山と爲す云々」又襄陽府志に「臥龍岡の記事あり。曰く「臥龍岡は府城の西南七里に在り。嵩山の南より起りて、綿亙數百里、此に至りて截然として住まり、回旋すること巢の如くにして、草廬其の内に在り。井有り、青石を牀となす云々」兩書の

記事異同ありと雖も、隆中臥龍岡の地勢、略々之を想見するに足れり。

三 自ら管仲樂毅に比す

孔明は身の丈け八尺、常に自ら管仲樂毅に比せり。人之を許すなし。唯、崔州平、徐庶、眞に之を然りといふのみ。建安の初年、孔明は石廣、元、徐庶、孟建等と共に遊學せしに、三人常に精讀を務む。而して孔明は獨り其の大略を見るのみなりき。時に從容として膝を抱きて長嘯し、三人に語りて曰く「公等仕官せば刺史郡守に至るべし」と。三人更に孔明の期する所を問へば、笑つて答へざりきといふ。徐庶はもと單家の子にして、名を福といへり。少にして任俠を好み、能く劍撃つ。嘗て人の爲に讎を報む、白堊突面、髪を被りて走る。吏之を捕へて其の姓名を問ひしも、庶口を閉ぢて語らず。吏は車上に柱を立て、之を繋ぎて磔殺せんとし、鼓を鳴らして市中の人々を集めたるも、遂に知る者なかりき。既にして庶の黨與、共に謀りて之を救ふを得たり。庶是に於て感激し、其の刀戟を棄て、疎巾單衣、節を折りて學問したりといふ。亦是れ一代の傑士なり。孔明は崔徐、二氏

と交ること最も親しく、他は殆ど交遊する所なかりき。唯龐徳公を以て先進の君子となし、敬意を表したるのみ。

夫れ荆州は長江帯の如く東に流れ、漢水斜に州の中央を貫きて江に會す。北は關洛を控へて天下の中樞を爲し、巴蜀の咽喉を扼するものなり。名士の出づる亦少からず。龐徳公、司馬徽、馬良、龐統皆こゝに出でて、三國時代の俊傑たり。

孔明も此の地に成長して學を修め、才を練り、除るに天下の大勢を達觀して廟算胸に在るも深く之を藏し、自ら管樂に比するも敢て售ることを求めず。悠悠として山河の靈氣を呼吸し、吟じて且耕やす。正に是れ一個の高士なり。

孔明年漸く長じて、私かに良妻を得んことを望み、未だ其の人を得ず。時に沔南の名士にして黃承彦といふものあり。孔明に語りて曰く「吾れ君の婦を擇ぶを聞けり。我家に一醜女あり。黃頭にして黒色、容貌まことに見るべからざるも其の才に至りては、君と相配するに足れり。願はくば君之を娶れ」と。孔明之を諾せしかば、承彦は此の醜女を以て、遂に孔明に妻はせたり。一郷の人、見て笑はざるなし。口さかなき童兒等之が爲に諺を爲して曰く、

莫作孔明擇婦 (孔明さん女好みはせまいもの)

止得阿承醜女 (とうく阿承彦のおかめを背負ひこんだ)

高歌して以て笑ふ。然れども此の醜女は孔明五十年の伴侶として内外の功多かりしものなり。

三國の世は人材を求むること渴するが如し。一藝一能の士も之を野に遺すことなし。然るに孔明が深く英器を田畝の間に埋めたるは、固より期する

所高くして且つ大なりしを以てなり。管樂に比しては許されず。妻を娶りては流俗の嘲笑を招きたるも知らざるもの、如くにして悠々たり。然れども天の斯の人を生じたるは、空しく一高士を以て老いしめんとはあらず。既に知己として、崔州平、徐庶の有るあり。君として豈に劉玄徳なからんや。果して魚



公徳龐

水相合し、風雲四海に生ず。二十七歳の孔明は五十に垂んたる玄德の爲に、殆ど師父の禮を以て迎へられ、直に其の雄才を伸ぶることを得るに至れり。

李白詩あり。曰く、

漢道昔云季 群雄方戰爭

霸圖各未立 割據資豪英

赤符起頽運 臥龍得孔明

當其南陽時 隴畝躬自耕

魚水三顧合 風雲四海生

武侯立岷蜀 壯志吞咸京

何人先見許 但有崔州平

後世諸葛亮を評論するもの、或は之を以て管仲、樂毅に勝れりとし、或は之を以て伊尹傳説に比するもあり。夫れ偉人を望むは山を望むが如し。近く之を見れば峻嶺高峯と雖も眼前の一小丘に蔽はれて、其の高きを認むること難し。然れども遠く隔りて之を望む時は、始めて高峯の雲を支へて聳つを見るべし。棺を

蓋ふて後に人物を評論するは、事却て難からずして而かも比較的其精確を得るものあり。但し知己友人の間は然らず。事功を見て之を許すは、世人普通なり。一布衣たる時に於て相許すは眞知己のことなり。死後に於て伊尹傳説に比せらる孔明に取りては何かあらん。南陽躬耕の際に管樂を以て許されたるこそ本懐ならめ。

第三章 草廬三顧

(一) 此間自ら伏龍鳳雛あり

荆州は天下の中央にして、人物自ら此に群がりぬ。而して世人多く之を知ることなし。龐徳公常に孔明を臥龍と稱し、龐統(士元)を鳳雛といひ、司馬徽(徳操)を水鑑と號したりき。徽は清雅にして人を知るの明あり。龐徳公に兄事す。されば孔明、龐統、崔州平、徐庶、龐徳公、司馬徽の一群は互に相知り、相推重したるものなるべし。

劉玄徳が袁紹のもとを辭して荊州に入るや、司馬徽と相遇ふて人物を問ふ。徽曰く「儒生俗士豈に時務を知らんや。時務を知るものは俊傑に在り。此の間自ら伏龍鳳雛あり」と

玄徳曰く「何人ぞや」

徽曰く「諸葛孔明、龐士元なり」

司馬徽の言によりて玄徳は既に臥龍と鳳雛との何人なるかを知れり。然れども未だ大に之を奇とせざるものゝ如くなりき。後、新野に屯するに及びて、徐庶來り仕ふ。庶も亦才略非凡にして、深く玄徳の信頼する所となりぬ。庶曰く「諸葛孔明は臥龍なり。將軍之を見るを願ふや否や」

玄徳曰く「君伴ひ來れ」

庶曰く「此の人往きて見るべし。左なくば招くとも來ることなけん。將軍自ら駕を枉げて之を訪は、可ならん」と。

(二) 草廬の對策

玄徳徐庶の言によりて深く悟る所あり。微行して隆中の寓居を訪ふこと、再度にして未だ其の人を見ることを得ず。遂に三度に及ぶ。孔明初めて其の知遇に感じ、玄徳を迎へ入れ人を斥けて語る。

玄徳曰く「漢室傾頽してより、奸臣命を竊み、主上蒙塵し給ふ。我れ自ら徳と力を量らず、大義を天下に信んと欲す。而かも智術淺短なるを以て、空しく今日に至れり。唯一片の志、今は猶存す。事を成すの計、如何にして可ならんか」
是れ直に天下の大事を決すべき至大至要の策問なり。孔明對へて曰く「董卓より以來、豪傑並び起り、州に跨り郡を連ぬるもの數ふるに堪ふべからず。曹操は袁紹に比すれば、名微にして兵寡し。然れども、操遂に能く紹に克ち、弱を以て強と爲すものは、惟天の時のみにあらずして、抑々また人の謀なり。今操、すでに百萬の衆を擁し、天子を挾んで以て諸侯に令す。此れ誠に鋒を争ふべからざるなり。孫權は江東を據有して、已に三世を経、國險にして民親、附し賢能之が用を爲す。此れ以て己れの援となすべくして、圖るべからざるなり。荊州は北漢沔に據り、利南海を盡くす。東、吳會に連り、西、巴蜀に通ず。此れ武を用ふるの國な

り。而して其の主之を守ること能はず。此れ殆ど天の將軍を資くる所以なり。將軍意あるや如何。益州は險塞にして沃野千里、天府の地なり。高祖之に因りて帝業を成せり。劉璋(益州牧)暗弱にして張魯北に在り。民殷んに國富みて存恤を知らず。智能の士、明君を得んことを思ふ。將軍は既に帝室の胄にして、信義四海に著はれ、英雄を統攬す。賢を思ふこと渴するが如し。若し荆益を跨有して其の巖岨を保ち、西の方諸戎を和らげ、南の方夷越を撫し、外は好を孫權に結び、内は政理を修め、天下變あるときは、則ち一上將に命じ、荆州の軍を率ゐて宛洛に向はしめ、將軍は自ら益州の衆を以て秦州に出づれば、百姓孰れか敢て簞食壺漿して以て將軍を迎へざるものあらんや。誠に此の如んば、則ち霸業成るべく、漢室興すべし」と。

玄德曰く「善し」是より孔明と情好日々密なり。關羽張飛等喜ばず。玄德曰く「我の孔明あるは猶ほ魚の水あるが如し。願はくば諸君復言ふこと勿れ」と。羽飛、また悟る所あり。乃ち止む。一説に曰く、劉備の樊城に屯するや、曹操方に河北を定む。孔明は荆州の次ぎ

て兵を受くべきを知り、北行して備に見ゆ。備は亮と舊交あるに非ず、又其年少なるを以て諸生として、之れを遇せり。坐集既に畢り、衆賓皆去りたるに、亮獨り留まる。備も亦其の言はんとする所を問はず。手づから聃(羽毛飾)を結びてありき。亮乃ち進んで曰く「明將軍、當に遠志あるべし。但聃を結ぶのみならんや」と。備初めて其常人にあらざるを悟り、聃を投じて曰く「是れ何の言ぞや、我れ聊か以て憂を忘るのみ」亮曰く「劉鎮南表は曹操と孰れぞや」備曰く「及ばざるなり」亮曰く「將軍は如何」及ばざるなり「今皆及ばず。而して將軍の兵は數千人に過ぎず。此を以て敵を待つは計にあらざるべし。」我れ亦之を愁ふ。之を如何にして可ならん「今荆州は人少きにあらす。籍に著けるもの、寡きなり。平居發調すれば、則ち人心悦ばず。鎮南に語りて國中に令し、凡そ游戸あらば、皆自ら實ならしめ、錄して以て衆を益さば可ならん」備其の計に従ふ。是よりして亮の英略を知り、上客を以て之を禮せりと。(魏略及九州春秋)是れ妄説の甚だしきものなり。裴松之、三國志の註に於て之を辯斥して曰く、「亮が表に云く、先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事、と

見えたり。然れば亮が先づ備に詣るにあらざること明らかなり」云々。一言にして此の妄説を打破するに足れり。蛇足を加ふるの要なかるべし。劉玄徳は雄才を抱きて而して仁慈に富み、民心を得ること甚だ深し。民心を得るものは直に勢力を得るなり。玄徳既に人を得たり、勢を得たり。然るに未だ地を得ること無し。是れ抑々何の故ぞ。

たとひ玄徳は漢室の裔なりと雖も、民間に零落すること既に久しきを以て門閥を誇ること能はず。よし門閥を誇示することあるも、現に漢室の皇帝が其の威令の行はれざる世に於て、何等の効能も無かるべし。然らば其の實力を以て角逐せらざるべからず。是れ固より當然の事なれども、玄徳は曹操、孫堅父子に對して聊か立後れたり。地を得ること難き所以なり。關羽、張飛の如きは、忠勇餘りありと雖も、斯かる難局に處して、四方を經略するの才あるものにあらず。玄徳の遂に地を得る能はざりしは、如何にして之を求むべきか、何處に之を求むべきかを知らざりしに依る。然るに今孔明を其の草廬に訪ふや、一小對談にして、直に五十年の蒙を啓くを得たり。天下の形勢の趣く所利害の存する所之れ

が的確なる説明は孔明の言によりて始めて玄徳の聽き得たるものなり。沙漠を旅したる人の泉を見たるが如し。五十に垂んたる玄徳が二十七歳の青年を迎ふるに賓師の禮を以てし、魚の水を得たるが如しといはれたる、亦怪しむに足らざるなり。

(三) 草廬對策の内容如何

所謂草廬對策の内容を玩味するに、凡そ三箇の要點あり。一には曹操の勢力強大なるを以て、今俄に之と争ふべからざること。二には孫權の根據亦既に堅固なるを以て暫く之が力を借るべきこと。三には荆益を連ね有して三分割據の勢を爲すべきこと是なり。人或は曰く、孔明が畫策する所は唯天下三分の計に在り、規模小にして雄大の意氣に乏し。是れ玄徳孔明が遂に大事を成すこと能はざりし所以なりと。果して然るや否や。思ふに孔明が出廬第一の方策は、未だ嘗て寸地をも有せざる玄徳をして、何處に其の立脚の地を得せしむべきかを謀るに在り。既に其の根據を得たる後に於て、何事を爲すべきかは、孔明の未

だ言ひ及ばざる所なり。故に草廬の對策を以て直に終局の目的を説明したるものとするは誤れり。試に益州據有の後、孔明が何事を爲したるかを見よ。其の祁山に出で、五丈原に出でたるは何が故ぞ。事實は自ら之を證明すべきなり。草廬三顧のことは支那四千年の史上、稀に見るべき美談なり。玄徳は其の身は漢帝の裔にして、多年兵馬の間に奔走し、奸雄曹操をして猶ほ且つ天下の英雄は君と我なりといはしめ、名聲既に四海に溢れたり。加ふるに其の年齢は五十に近し。たとひ司馬徽、徐庶等の言あるにもせよ、寛厚能く人に下るの大度あるにあらずんば、如何で山中の一布衣を訪ふこと三度に及ばんや。胡致堂曰く君子言あり。劉備は曹操よりも敏なりと。愚謂ふ。英雄豪傑の中土に周旋する人才を以て急務と爲さざるなし。曹操、荊州に下りて得る所のものは、韓嵩、蒯越、王粲の徒のみ而して天下第一流のもの、乃ち玄徳の有する所たり。吳魏の諸臣能く對するなし。備の操よりも敏なりといふは、殆ど是をいふか。曹、劉二氏の敏不敏は我れ之を知らず。唯機警なる曹操は未だ孔明と相得るに足らず。是れ寛厚なる徳量を有する劉玄徳の品性に一步を譲る所以なり。

凡そ世の先進を以て自ら任ずるもの、豪傑を以て自ら許すものを察するに、或は縦横の奇才を奮つて得々たるあり。或は傲然自ら高ふして徒らに世に驕るあり。然れども能く節を折つて士に下るの雅量を有するものあること稀なり。小曹操は多くして、小玄徳を見ることは少し。故に先進は後進を輕侮し、後進は先進に服する所なし。先進後進相互に疎隔せんとするのみ。

三顧のこと、之を孔明に見れば、唯仰いで其の情操の愈々高きを覺ゆるのみ。曾て隆中に耕すや、悠々として世事に預り知らざるもの、如し。人材を求むること渴するが如き世に於て、敢て自ら售ることを求めず。所懐を吟詠に託して、廬中に高臥す。然れども一朝知遇に感じて起つや、其精神を傾けて玄徳に捧げ、大義を唱へて天下を警醒す。『三代以下、出處の正しきこと、いづれか孔明の如きものあらんや』

尹遂良曰く

時未だ遇はざれば、則ち丘園に高踏し、道苟も行ふべくば、則ち志を事業に奮ふ。君臣既に合し、魚水相歡べば、則ち大義を天下に聲へ、衰を興し、絶を繼ぎ、正統を

翼扶するの志、昭として日月の如くならしむ。是れ豈に區々たる一智一能の士の世に随つて功名を就すものと、日を同じうして語るべけんや。是れ能く孔明の心事を言ひ得たるに、ちかし。

(四) 美談を嘲るものあり

凡そ人の世に生まるゝや、各自天賦の才能を有するものなり。或は政治家たるべく、軍人たるべく、學者、美術家たるべし。其の才能を充分に發達せしめて、己れの本分を盡すは人道にも天道にも叶へることなり。故に人々は先づ我に如何なる天分の存するかを考量せざるべからず。古人の既にいへる如く、天何が故に我を生じたるかを省察せざるべからず。斯の如くにして始めて自信あり、自尊心あり、滔々たる俗流のうち立ちて、超然として己れを持するを得べきなり。人物の氣品、節操皆こゝに存す。此の自信、節操、氣品を具して、其の才能を運用してこそ、人をも世をも益すべけれ。諸葛亮が悠悠として草廬に高臥したるの心事、想ひ見るべきに非ずや。世人動もすれば三顧の美談を嘲笑し去りて、之

を狂癡なりとし、生存競争無き往古の世に於てのみ行ふべき事なりといふ。淺見笑ふべきなり、請ふ試に之を言はん。

近代に於ける生存競争は、日を追ふて其の劇甚を加へつゝあること明らかなり。さればにや世の青年は、纔に學校を卒へて、直に權門を叩き、勢家を訪ひ、百媚を献じて一顧を得んとに汲々たり。甚だしきに至つては、結婚を政策として、門閥の人となり、閥閥の人とならんとに焦慮するもあり。此の如くにして以て身を立て、家を成したるものを見ては、則ち才人なりとして之を羨望するもの比々皆然り。高踏の二字は近代の人に解すべからざる熟語となり了りたるか。

權門に阿諛する口は、直に三顧の美談を嘲弄するの口なり。皆言ふ。たとひ孔明の如くに自重するあるも、玄徳なかりせば如何と。是れ亦未だ深く思はざるものなり。

夫れ天の人を生ずるは無意味に非ず。手足を與へて能く動かしめ、心を與へて能く思はしむ。故に一人として其の天分を具せざるものなし。千差萬別なる人物をして、各々其の長所を以て世に立たしむ。由來天道は人を捨つるもの

に非ず。學を修め、才を磨き、徳を積み、以て自重するものあり。而して世に顧みられざるは、未だ曾て有らざるなり。

幽靈を描きて、柳の下に立たしめたるは、畫家應舉の配合なり。平凡なる畫工と雖も、虎を描きて竹を忘るゝことあるべからず。況してや微妙を極めたる天の配劑の一畫工の手腕に及ばざることあるべきか。徐ろに此の理を考ふるに、獨り諸葛亮を生みて、劉玄徳を生まざるの愚あるべからず。龍には既に雲を與へ、虎にも亦風を授けたり。何ぞ獨り魚に與ふるの水を惜まんや。

つら／＼史を按ずるに、張良ありて高祖あり、鄧禹ありて光武あり、房、杜ありて太宗あり、趙普ありて太祖あり、君臣相得て大事を成す。是れ天の已れを證明せる事實なり。

されば奮勵努力して、以て自ら大にし、自ら高くし、己れを信じて、且つ重からしめよ。世に劉玄徳無きを憂へずして可なり。

第四章 赤壁の戰(上)

(一) 曹操荆州に下る

建安十二年の十一月、孔明初めて隆中の草廬を出で、玄徳に仕へて共に將來を畫策せしが、玄徳猶ほ寄寓の身なるを以て、事固より意の如くならず。然るに曹操は烏桓を破り、袁紹の一族を除き、勢に乗じて南荆楚の地を圖らんとす。

荆州は天下の中樞に位するのみならず、殷富にして地廣く人多し。而して其の主劉表は凡庸爲すあるに足らざるものなり。魏の謀臣郭嘉曰く「表は坐談の客のみ」と。甘寧は吳の鬪將なれども、亦孫權に説きて曰く「我れ劉表を見るに、慮り既に遠からず、兒子亦劣能く業を受け、基を傳ふるものに非ず。至尊まさに早く之を圖るべし。操に後るべからず」と。嗚呼、地は形勝を得て、主は庸劣なり。操と權と何ぞ之を知らざらん。たゞ四方多事にして、未だ其の機を得ざりしのみ。

劉表は庸器固より意と爲すに足らざるも、今や此の地に一大食客の有るあり、浪々として未だ寸地を得ざるも、民心の歸すること、水の低きに流るゝが如し。曾て天下の英雄は君と我とのみといひたる曹操は、一日も劉玄徳を忘るゝ能はざるなり。夫れ未だ地を得ずして先づ人を得るもの眞に恐るべし。百里の地にあれば百里の人を得、千里の地にあれば千里の人を得、荆州の輿望遂に玄徳に歸し、此の中樞の地を擧げて、其の手中に委ぬるあらば、是れ操に取りて憂ふべきの極に非ずや。操の機敏にして明察なる、何ぞ這般の消息を解せざらんや。乃ち意を決して兵を擧ぐることに八十萬大河の決するが如き勢を以て荆州に南下し來れり。時は建安の十三年なり。

劉表二子あり、長を琦、次を琮といふ。表は次子を愛して琦を惡みしかば、琦の心中安んぜざる所あり。身を保つ計を孔明に問ひ、遂に出で、江夏の太守たり。建安十三年八月、劉表病みて卒し、次子琮其の後を受けて立ちしかば、琦大に憤りて亂を作さんとせしが、曹操の軍既に荆州に入りぬ。劉琮纔に立ちて大軍既に逼る。琮や之を如何すべき。章陵の太守蒯越等琮

に説きて曰く、「逆順大體あり。強弱定勢あり。人臣を以て人主を拒ぐは逆道なり。新造の楚を以て、中國を禦ぐは必ず危し。劉備を以て曹公に敵するは當らざるなり。三者みな短なり。何を以て敵を待たんとするか。且つ將軍自ら料るに劉備と如何。若し備にして曹公を禦ぐに足らざれば、全楚と雖も、以て自ら存する能はざるなり。若し曹公を禦ぐに足らば、則ち備は將軍の下たらざるなり」と。琮、此の言に従つて降意を決す。九月、曹操の軍新野に至りしかば、琮は州を擧げて降り、節を以て曹操を迎へたり。暗弱彼が如きは降らざるも、操の敵に非ず責むるに足らざるものなり。

時に玄徳は襄陽の東北、漢水のほとりなる樊城に在り。琮は敢て之に通告せざりしを以て、玄徳は其の降れるを知らざりしが、久しうして覺る所あり。人を遣はして琮に問はしむ。琮は依りて宋忠といへるものを使者として、事の顛末を玄徳に告げしめたり。時に操は既に宛に進みて宛に在り。玄徳大に驚きて曰く、「卿等諸人の事を爲す此の如し。早く相語らず、今禍ひ至りて方さに、我に告ぐ。亦甚だしからずや。」更に刀を執つて曰く、「今、卿が頭べを斷つも、以て忿を解くに

足らず。亦丈夫別れに臨み、卿が輩を殺すを耻づ」と宋忠を罷め還して、更に當面の大事を議す。孔明、玄徳に勧め、劉琮を襲ふて荆州を取り、以て曹操を防ぐべきを言ふ。玄徳忍びずして曰く「劉表、曾て我に託するに遺孤を以てす。信に背きて自ら濟ふは我が爲さざる所なり」と。遂に衆を率ゐて南走す。

通鑑には「或勸備攻琮荆州可得」と見えて、孔明が此の策を出したるを明記せず。疑を存するものゝ如し。三國志、蜀の先主傳には諸葛亮の策として記されたれば是れ事實なるべし。東坡の如きは、仁義詐力雜用して以て天下を取るは此れ孔明の失ふ所以なりといひ、劉琮を攻めんとしたること、並に劉璋(蜀)を滅ぼしたることを難じたり。然れども張拭は曰く「亮一たび昭烈(玄徳)を見て、遂に荆益を取るの計を定む。蓋し亮の心は昭烈をして漢室を興復せしめんとするを以て、己れが任と爲す。則ち天下の諸侯、内に他圖を抱くもの、吾れ固より正名を以て之を討つとを得、況んや琮の操に降るや、荆州は固より魏の荆州なり。之を取るを以て、豈に正しからずとせんや。昭烈、不小忍に局して大計を妨ぐ。故に劉琮取るべくして取らず。狼狽して遁るゝに及び、吳の力を藉

りて操を赤壁に敗ると雖も、然れども吳に迫られ、乃ち始て蜀に入り、譎計を以て取る云々」

思ふに孔明の荆州を取らんといひたるは詐術にあらず。寧ろ此の難局に處すべきの義なり。玄徳の忍びざるも亦仁なり。後章に於て更に之れを言はん。

(二) 孔明吳に使う

玄徳、襄陽を過ぎ、馬を駐めて琮を呼ぶ。琮は懼れて起つと能はざりしといふ。斯かる暗弱の主に仕へて何とせん。人々は多く去つて玄徳に歸したり。玄徳は更に劉表が墓に詣で、涕泣して去りぬ。當陽に到る比、衆十餘萬、輜重數千輛の多きに達して、日に行くこと十餘里なり。別に關羽を遣はし、船數百艘に乗じて、江陵に會せしむ。

或人、玄徳に勸めて曰く「宜しく速に行きて江陵を保つべし。今大衆を擁すと雖も、甲を被るもの少し。若し曹公の兵至らば、何を以て之を拒がん」玄徳對へて

曰く「夫れ大事を爲すは、必ず人を以て本と爲す。今、人吾に歸す。吾れ何ぞ棄て去るに忍びん」斯かる危急に際しても、悠々通らず、王者の氣宇を示して餘りありといふべし。

江陵には糧儲器械あり。玄徳之に據らば操に於て憂ふべしと爲す。乃ち輜重を釋き、輕軍襄陽に至れば玄徳既に過ぎたりといふ。曹操驚き、精騎五、率ゐて急に之を追ふ。一日一夜、行くこと三百餘里にして、當陽の長坂に於て及ぶ。玄徳妻子を棄て、孔明、張飛、趙雲等數十騎と共に走る。曹操大に其の人衆と輜重とを得たり。徐庶が母も亦操の爲に捕はれたり。庶依りて玄徳のもとを辭し、其の胸を指して曰く「もと將軍と共に王霸の業を圖らんと欲するものは、此の方寸の地を以てなり。今已に老母を失ひて方寸亂れたり。事に益なし。請ふ此より別れん」と。遂に去つて操の營に至る。

當時玄徳は、鳳凰の未だ翼を成さずして、猛鷲に襲はれたるが如し。天を翔く能はず、地を走る能はず。進退殆ど谷まりて、茲にまた徐庶を失ふ。其の痛心察すべきなり。庶や固より達識の士、孔明と布衣の交を爲して、夙く既に其の才

徳を認め、後玄徳に見ゆるに及びては、之に勸めて能く三顧の美を爲さしむ。されば玄徳に取りては帷幄の一臣、孔明に取りては眞知己たり。今此の危機に於て相別る。又これ一場の悲劇にあらずや。行くもの、胸中亂れて一謀を盡する能はず、留るもの、苦境は更に大なり。曹操の軍早や逼り來りて、玄徳の悲運免るべからざるもの、如し。張飛二十騎を率ゐて殿し、水に據り、橋を斷ち、目を瞋らし、矛を横へて曰く「我は是れ張益徳なり。



張飛

來りて共に死を決すべし」と。虎鬚風に戦ぎて、顔色火の如し。操の兵敢て近づくものなかりき。爲に玄徳は一時の急を免るゝを得たり。

或人、玄徳に告げて曰く「趙雲已に北走せり」と。玄徳手戟を以て之を擲ちて曰

「子龍（趙雲）我を棄て、走るものにあらず」と。雲はもと常山の人にして、身の丈け八尺、武勇絶倫なり。此の日身に玄徳の子禪を抱き、甘夫人（劉母）を保護し、勇戦奪鬪の末、漸くに脱し來れり。たま／＼關羽の船と相合するを得て、玄徳の軍は沔を渡ることを得たり。而して更に劉琦が萬餘の兵を以て來るに遇ひ、與に俱に夏口に到れり。

劉表は死し、劉琮は降り、劉備は走りて、操の軍は江陵に進む。天下の風雲轉々急なり。嘗て吳の臣魯肅、孫權に語りて曰く「荊州は我國と隣接し、江山峻固にして、沃野萬里、士民殷富なり。若し之を據有せば、此れ帝王の資なり。今劉表新たに亡びて、二子協はず。軍中の諸將各々彼此なり。劉備は天下の梟雄にして、操と隙あり。表に寄寓す。表は其の能を悪んで用ふる能はざるなり。若し備にして彼と心を協せ、上下齊同すれば、則ち撫安して共に盟好を結ぶべし。若し離違あらば、宜しく別に之を圖り以て大事を濟すべし。肅請ふ命を奉じて、表が二子を弔し、并に軍中事を用ふる者を慰勞し、且つ備に説きて表が衆を撫せしめ、心を同じうし、意を一にして共に曹操を治せん。備必ず喜んで命に従ふべし。若



赤壁の戦（上）

長阪橋飛矛處

し其れ克く諸は、天下定むべきなり。今速に行かすんば、恐らくは操の爲に先んせらるべし」と。孫權其の言を然りとし、書を遣はして荊州に入らしむ。肅夏口に至りて、操が既に荊州に向へるを聞きしかば、晝夜兼行して南郡に至る頃、劉琮既に降り、玄徳南走す。肅之を迎へて劉玄徳と當陽の長坂に會す。肅は孫權の意を傳へて、懇懃の情を致し、玄徳に問ふて曰く「豫州、今何くに至らんとするか」玄徳曰く「蒼梧太守吳巨と舊情あり。往きて之に投せんとす。肅曰く「孫討虜（權は討虜將軍たり）は聰明にして、仁惠賢を敬ひ士を禮す。されば

江表の英豪皆之に歸附し、已に六郡を據有して、兵精しく糧多し。以て事を立つるに足る。今君の爲に計るに腹心ものを遣はして、自ら東孫權に結び以て世業を濟すに若くなし。然るを吳巨に投せんか、巨は是れ凡人にして遠郡に偏在し行くは人の爲に併せられんとす。豈に託するに足らんや、玄徳甚だ喜びぬ。肅又孔明と語りて曰く「我は子瑜(諸葛瑾なり)が友なり」と遂に共に交を結びたり。

曹操は江陵に入りて、劉琮を青州刺史となし、蒯越等十五人を侯となし、荊州の地を定めて、更に江に沿ひて東下せんとす。是れ一には劉玄徳を追撃し、一には孫權を降伏せしめんが爲めなり。

孔明、玄徳に語りて曰く「事急なり。請ふ命を奉じて救を孫將軍に求めん」と。玄徳之を許す。孔明、魯肅と共に孫權に詣る。當時孫權は柴桑(今の江西九江)に在りて成敗を觀望す。頗る去就に迷へるものゝ如し。孔明、孫權に説きて曰く「海内大に亂れ、將軍は兵を起して江東を據有す。劉豫州も亦衆を漢南に收めて、曹操と並び天下を争ふ。今操大難を憂ひ、夷略々既に平らげり。遂に荊州を

破りて威四海に震ふ。英雄武を用ふるに所なし。故に豫州遁逃して此に至る。將軍力を量りて之を處せよ。若し能く吳越の衆を以て中國と抗衡せんとせば、早く之を絶つに如かず。若し當る能はずんば、何ぞ兵を案じ甲を束ね、北面して之に仕へざるか。今、將軍外は服従の名に託して、内猶豫の計を懐く。事忽にして斷せずんば、禍ひ至ること日なかるべし」と。

孔明曰く「苟も君の言の如くんば、劉豫州何ぞ之に事へざるか」。

孔明曰く「田横は齊の壯士のみ。猶ほ義を守りて辱しめられず。況んや劉豫州は王室の胄なり。英才世を蓋ふ。衆士之を慕ひ仰ぐこと、水の海に歸するが如し。若し事の成らざるあらば、是れ乃ち天なり。如何んぞ之に下ることをせんや」。

權勃然として曰く「吾れ全吳の地、十萬の衆を擧げて、制を人に受くる能はず。吾が計決せり。劉豫州にあらざれば、以て曹操に當るべきものなし。然れども豫州新たに敗れて後、如何で能く此の難に抗せんや」

孔明曰く「豫州の軍、長坂に敗れたりと雖も、今戰士の還るもの、及び關羽が水軍

精甲萬人劉琦が江夏の戦士を合する亦萬人に下らず。曹操が衆遠く來りて疲弊す。聞くならく豫州を追うて輕騎一日一夜に行くこと三百里此れ所謂強弩の末勢ひ魯稿を穿つ能はざるものなり。故に兵法に之を忌みて曰く必ず上將軍を蹶すと。且つ北方の人は水戦に習はず。又荆州の民の操に附するは兵勢に逼らるゝのみ。心服するにあらざるなり。今將軍誠に能く猛將に命じ兵數萬を統べて豫州と規を協せ力を同じうせば操が軍を破ること必せり。操が軍敗るれば必ず北に還らん。此の如くんば則ち荆吳の勢ひ強く鼎足の形成るべし。成敗の機今日に在り」と。

迷霧に鎖されたる孫權は茲に一道の光明を得たり。戰意略々定まりぬ。偶ま曹操の書を贈り來るあり。曰く、

近者辭を奉じて罪を伐つ。旌旄南を指して劉琮手を束ぬ。今水軍八十萬の衆を治して方さに將軍と吳に會獵せん。云々

孫權書を群臣に示して計を問ふ。皆震駭して色を失はざるなし。長史張昭曰く「曹公は豺虎なり。天子を挾んで以て四方を征す。動もすれば朝廷を以て

辭と爲す。今日之を拒むは事更に順ならず。且つ將軍の大勢の以て操を拒ぐべきものは長江なり。今操荆州を得て其の地を奄有し、鬪艦千艘浮びて以て江



吳 太 祖 (孫 權)

を下らんとし兼ねて歩兵を有し、水陸俱に下る。此れ長江の嶮も既に半ば操の有たるなり。而して勢力の衆寡また論すべからず。愚謂ふ之を迎ふるに如かず」と。

權は既に孔明の言に動かされて殆んど戰意を決したり。今張昭の説く所は頗る怯懦なるが如くにして權の意に叶はず。起ちて衣を更へんとす。魯肅其の後を慕ひ行き字下に於て及ぶ。權

其の意を悟り魯肅の手を執りて曰く「卿何をか言はんとする」

魯肅曰く「向きに衆人の議を察するに、専ら將軍を誤らんと欲す。ともに大事を圖るに足らざるなり(中略)。今將軍、操を迎へて何くに歸せんとするか。願はくば早く大計を定め、衆人の議を用ふる勿れ」と。
 權歎息して曰く「諸人の議する所甚だ我が望を失へり。今、卿よく大計を廓開す。正に我が意に同じ」と。

魯肅の言は、聊か權を喜ばしむるを得たり。然れども肅猶ほ年若くして殊に新參なり。老臣の意見を壓服して大事を決するの威望なし。肅自ら之を知る。故に周瑜を招きて其の意見を問はんことを權に勧めたり。

三 周郎大計を決す

時に周瑜は使を受けて番陽に至る。權更に使して之を召還し、問ふに大計を以てす。瑜曰く「操は名を漢相に託すと雖も實は漢賊なり。將軍神武雄才を以てし、兼ねて父兄の烈に仗り、江東に割據して、地方數千里、兵は精しうして用ふるに足り、英雄業を樂む。當に天下を横行し、漢家の爲に、殘を除き穢を去るべし。

況んや操自ら死を送る、而して之を迎ふべきや。請ふ將軍の爲に之を計らん。今、北土已に安く操をして内憂なかしむるも、能く曠日持久し、來りて疆場を争ひ、又能く我と勝負を船楫に校ぶ可からんや。今、北土未だ平安ならず。加ふるに



瑜字公瑾

馬超、韓遂、猶ほ關西に在り。操が後患を爲す。且つ鞍馬を捨て、舟楫に依り、吳越と衡を争ふ。本、中國の長する所に非ず。今また盛寒にして馬に藁草なし。中國の士衆を驅りて、遠く江湖の間を渉る。水土に習はずして必

ず疾病を生せん。此の數四の者は兵を用ふるの患なり。而して操皆冒して之を行ふ。將軍の操を禽にする、正に今日に在り。瑜請ふ精兵三萬人を得て進んで夏口に住まり、必ず將軍の爲に之を破らん。」

權曰「老賊漢を廢して自立せんと欲す。徒に二袁、呂布、劉表と我とを忌むのみ。今、數雄已に滅びて、我れ獨り存す。我れ老賊と勢ひ兩立せず。君が當に擊つべしと言ふは甚だ我が意に合へり。此れ天、君を以て我に授くるなり」

孫權の戰意は今や全く決せり。即ち劍を抜き、案を斫つて曰く「諸將吏敢て又操を迎ふべしといふものあらば、此の案と同じかるべし」と。辭氣共に凜烈たり。

會の散じて其の夜、周瑜は又權に見えて曰く「諸人徒に操が書を見て水歩八十萬といひ、各々恐懼して、復其の虚實を料らず。即ち此の議を開く。甚だ謂はれなき也。今實を以て之を料るに、彼が率ゆる所の中國人は、十五六萬に過ぎざるべく、且つ已に久しく疲れたり。得る所の劉表が兵も亦七八萬を限るべく、而かも猶ほ孤疑を懷けり。夫れ疫病の卒を以て狐疑の衆を御す。兵數多しと雖も未だ畏るゝに足らざるなり。瑜、精兵五萬を得ば自ら之を制するに足らん。願はくは將軍、心を勞せらるゝこと勿れ」と。

孫權瑜が背を撫して曰く「卿が言此に至る。甚だ我が心と合へり。子布(張昭の字)文表(秦松の字)諸人各々妻子を顧みて私慮を挾持す。深く望む所を失へり。獨り卿

と子敬(魯肅の字)と我と同じきのみ。此れ天、卿等二人を以て我を賛くるなり。五萬の兵は俄かに合ひ難し。已に三萬人を選びて、船糧戰具ともに辨せり。卿は子敬、程公と先づ發すべし。我れ當に續ぎて人衆を發し、多く資糧を載せ、卿の後援たるべし。卿能く之を辨すれば必ず勝を得べし。若し意の如くならずんば還り來れ。我れ孟德(曹操の字)と之を決すべし」と。即ち周瑜、程普を以て左右督と爲し、兵に將として、孟德と力を併せ、操を迎へて戰はしむ。魯肅は參軍校尉に任せられて方略に賛畫することゝなりぬ。

劉玄徳は、當時樊口に在り。孔明をして吳に使せしめたるも、其の結果は如何あるべきか。殆ど心痛に堪へざるものあり。日々、邏吏を出して、權が軍を候望せしめたり。既にして瑜の船來るあり。邏吏馳せて之を玄徳に告ぐ。玄徳喜び、人を遣はして之を慰勞せしむ。瑜曰く「軍任あり。委署するを得ず。若し能く威を屈して來見せらるゝあらば、誠に其の望む所に副はん」と。玄徳乃ち單舸に乗じ、往きて瑜を見る。曰く「今、曹公を拒ぐは深く計を得たり。戰卒幾許ありや」

瑜曰く「三萬人」

玄徳曰く「恨むらくは少し」

瑜曰く「是れ自ら用ふるに足れり。豫州(玄徳)たゞ瑜が之を破るを見よ」

玄徳、更に魯肅等呼びて會語せんとす。瑜曰く「命を受けては妄りに委署するを得ず。若し子敬を見んと欲すれば、別に之を訪はるべし」と。

玄徳深く愧ぢて且つ喜ぶ。嗚呼周郎は眞に江東の英俊なり。軍規嚴然として犯すべからざるものあり。玄徳の愧づるは自ら軍中の作法を失したるを愧づるなり。而して其の喜ぶは、周瑜が軍の整々たる、必ず操と相當るべきを喜ぶなり。孔明も亦周瑜、魯肅等と共に來りて、再び玄徳のもとに歸れり。

周瑜、玄徳と兵を合せ、進みて赤壁に至り、操が軍と相遇し、こゝに一大決戦を試むることとなりぬ。

(四) 曹孟徳槩を横へて歌ふ

赤壁の戦は三國史上の關鍵なり。當時曹操の勢を察するに正に天下を併呑

するに足れり。關西の馬氏は勇あれども遠慮なく、漢中の張魯、蜀の劉璋の徒の如きは、皆是れ碌々たるもの、魏兵一度加はらば自ら倒れんのみ。されば、操が忠を爲すものは、荊州に玄徳あり。江東に孫氏あるのみ。而も權は其の兄孫策の言の如く、たゞ能く江東を據有すべき守成の主なり。加ふるに年僅に二十有六。未だ深く恐るゝに足らざるなり。其の最も憂ふべき玄徳は英雄の資ありと雖も、機を見ること敏ならず。猶ほ浪々として荊州の食客たり。今にして之を圖る、固より難からざるなり。故に操の南下するや、荊州風を望んで降り、玄徳倉皇として敗れ走る。彼れ黃口の孫權又何をか能くせん。謀臣張昭が徒の如きも、因循姑息にして進取の銳氣あることなし。操の慧敏なる皆善く之を知れり。眼中固より吳なきなり。天下誰か敢て乃公の武に抗するものあらん。大江船を浮べ、酒を舉げ、槩を横たへて歌ふ。曰く

對酒當歌

人生幾何

譬如朝露

去日無多

慨當以慷

憂思難忘

赤壁の戦(上)

何以解憂 惟有杜康
 青青子衿 悠悠我心
 呦呦鹿鳴 食野之萍
 我有嘉賓 鼓瑟吹笙
 皎々如月 何時可輟
 憂從中來 不可斷絕
 越陌度阡 枉用相存
 契濶談讌 心念舊恩
 月明星稀 烏鵲南飛
 遠樹三匝 無枝可依
 山不厭高 水不厭深
 周公吐哺 天下歸心

人生の果なきを歎じ、酒に託して胸中を語る。周公吐哺、天下歸心の二句を以て全篇を收結したる操が心中の得意掩ふべからざるものあり。時は建安十三年

の冬にして水清く風冷やかなり。酒未だ醒めざるに周郎來る。

曹操は誤れり。彼れ能く張昭を知るも、未だ深く周瑜を知らず。玄德あるを知るも孔明あるを知らざるなり。而して我が武略に傲り、輕々しく勢に乗せんとす。故に謀臣賈詡諫めて曰く、「公昔し袁公を破り、今江南を收めて、威名遠く聞え、兵勢盛んなり。若し舊楚の饒かなるに因りて、以て吏士を饗し、百姓を撫安せば、江東は衆を勞せずして定まるべし」と。是れ誠に萬全の策なりき。然るに操は之を用ゐずして、孫劉二氏を侮り、遂に赤壁の敗を來たして、既に成りたるが如き統一の大事を破りたり。

東坡が魏武帝論に曰く
 孫權、劉備、又以て一隅に區々たり。其の兵を用ゐる勝を制すること、固より以て曹氏に敵するに足らず。然れども天下分裂に終り、魏の世を訖りて一にする能はず。蓋し嘗て試に之を論ず。魏武は事を料るに長じて人を料るに長せず。是故に重く發して其と功を喪ふ所あり。輕しく爲して敗に至る所あり、云々。

といひ更に進んで曰く
故に夫の魏武は重く劉備に發して其の功を喪ひ軽く孫權に爲して敗るゝに
至れりと。

夫れ或は然らん。然かも猶ほ盡さるる所あり。請ふ之を言はん。曾て浮浪の
食客を英雄として認めたる曹操の如何で劉玄徳を知らざらん。其の短其の長
皆能く之を知れり。故に急進すること一日一夜にして三百里に及びたるなり。
操また何ぞ孫權を知らざらん。權が守成の主にして中原争衡の材にあらざる
こと亦能く之を知れり。故に一封の書を送りて以て吳人の膽を寒からしめた
るなり。若し此の際に當りて孔明魯肅周瑜なくば權の操に降りしこと疑な
るべし。たゞ當時未だ多く世に知られざる孔明魯肅等の有るありて意氣壯烈
彼の赤壁の大活劇を演出せんことは操の明と雖も猶ほ之を知ること能はざり
しや必せり。勝敗の機實に茲に在るか。

赤壁の戦に關係したる重なる人々の年齢を列記すれば凡そ左の如し。

曹操 五十四

- 玄徳 四十八
- 孫權 二十六
- 孔明 二十八
- 周瑜 三十四
- 魯肅 三十七
- 張昭 五十三

曹操と玄徳とは思慮正に圓熟の境に在り。周魯の二子は共に三十を超えて四
十に至らず。元氣の旺盛なること知るべきなり。而して孔明と孫權とは年廿
を超えて未だ三十に達せず。年少氣鋭壯烈なる意氣の横溢するものあるを見
る。赤壁の大事が主として最年少なる二人の契合によりて決せられたるは甚
だ快とすべきものあり。

孔明曾て隆中の草廬に在りて三分の策を定め方略既に決する所ありしも未
だ之を實行すべき機を得ざりき。偶々曹操南下の事ありしは是れ一大危機に
して又一大好機なり。孔明が將相の材を以て進んで説客の任に當りたるは單

に事の急なりしが故のみにあらざるなり。殊に去年廬を出でて、今年此の難局に當る。盤根錯節に遇ひ、禍を轉じて能く福となし得るや否や、丈夫宜しく奮ふべきなり。平生の抱負と才略とを試むべき好箇の活舞臺は眼前に展開せられたり。孔明は自ら壇上の主人公として立たざるべからず。恨むらくは玄德の兵力乏しくして、獨力操と相當るに足らざるが故に、已むなく黒頭巾を被り、縲糸を手にして背面の指導者となれり。是れ實に已むことを得ざりしを以てなり。而して其の吳に入るや、先づ權を激せしめて、然る後に勝敗の機を説き、將來の利害を論じ、遂に權をして其の戰意を決せしむるを得たり。權は本より英明の資あり。片々たる説客の談論に動かさるべきにあらず。されど孔明が威儀自ら莊重にして、高雅胸中大節を持って、識略卓越なるに遇ひ、權は之に動され、之に聽き之に敬服したりしなり。然らずんば大事を決すること、如何で彼が如くなるを得ん。故に發明に曰く

赤壁の勝は、吳人其の功を専有す。綱目乃ち瑜、肅等備と迎へ撃ちて之を破ると書す。何ぞや。蓋し曹操東下の時に當り、吳人震懼し、謀りて操を迎へんこ

欲す。周瑜、魯肅、謀を内に定むと雖も、昭烈(玄德)孔明、左右、外に感發するにあらずれば、則ち亦未だ必ずしも功を成さざるなり云々。

真に然り。赤壁の大事は孔明實に之が主導者なり。請ふ更に其の戰況と結果とに就きて語らん。

史山按、正史に據れば、吳に入りたる諸葛孔明は唯一度孫權を説きたるのみにて、他に何事を爲したりとも見えず。然れども此の如き天下の大事を眼前に控えて孔明が茫然日を消すとあるべからず。必ずや裏面に於ては魯肅に説き、周瑜を勵まし、力の限りを盡されたるなるべし。惜しい哉、正史に傳ふる所なし。唯演義三國志によれば、此の際に於ける孔明の活動を明らかに見るを得べし。演義は正史にあらざるが故に之を歴史的に採用する能はざるは勿論なりと雖も、却て事の真相が此の如きものに於て窺はるゝことなきにしもあらず。正史と併せ讀みて考ふる時は頗る興味を覺ゆるものなり。殊に演義三國志は支那小説中五大奇書の一にして、作者の識見手腕ともに凡ならず。能く正史の言ひ得ざる所を詳にしたる如きものなれば、輕んず

第五章 赤壁の戦(下)

(一) 天下の大事は此の如くに決せられたり

周瑜兵を率ゐて操が軍と赤壁に相遇ふ。此の山は今の湖北武昌府の嘉魚縣に在り。江水山下をめぐりて過ぐ。建安十三年冬十月のことなれば落木蕭條として風轉々冷やかなり。兩軍先づ相交りて操が軍利あらず。退きて江の北岸に次す。周瑜は其の南岸に在り。目に餘る大軍なれば吳軍勇なりと雖も、之に勝つこと實に容易ならざるものあり。部將黃蓋進み出で、曰く「今、寇は大軍にして、我れ寡兵なり。久しく相持すること難し。操の軍は船艦を連ね首尾相接したりと聞く。燒きて之を破るべきなり」と。

周瑜亦大に其の議を賛して、先づ蒙衝鬪艦數十艘に、薪草を積み膏油を其のうちに灌ぎ、裏むに帷幕を以てし、上に牙旗を建つ。用意既に成りて、先づ書を曹操に送りて降を請ふ。走舸を備へ、大船を繋ぎ、火船を擁して進む。

操が兵は皆頭を延べて觀望し、吳將黃蓋の降るを見る。蓋船を放ちて敵船と相接し、一時に火を發す。偶、東南の風猛烈に吹き起りしかば、火は忽にして操が船に及び見る。之を燒き盡して岸上の營舎に延燒す。火焰天に漲つて、大江の水血に似たり。操が軍は人馬或は燒かれ、或は溺れて死するもの數へ難し。周瑜輕銳を率ゐ、雷鼓して突撃す。操が軍大に敗れて收拾すべからず。操亦狼狽して華容道より走る。路は嶮にして泥濘甚だしく、加ふるに烈風の地を捲きて起るあり。兵士、草を負ひ、道を埋めて僅に之を過ぐを得たり。死者また甚だ多し。劉玄德、周瑜水陸共に兵を進め、操を追ふて南郡に至る。

操は征南將軍曹仁と、横野將軍徐晃とを留めて江陵城を守らしめ、折衝將軍樂進には襄陽を委ね、擊もらされし兵を率ゐて急ぎ許都に還り、以て後圖を爲せり。敗殘の狀誠に憐むべきものあり。一代の奸雄曹公も心纒に驕りて忽ち此の失敗あり。勢ひ天下を統一すべくして、而かも三分割據に終る。惜しむべきなり。周瑜は數萬の兵を率ゐて、曹仁と江を隔て、相對し、末だ戦はず。部將甘寧先

づ進んで夷陵を取り、其の城に入る。既にして曹仁、兵を遣はし甘寧を圍む。寧大に之に苦しみ、援を周瑜に求む。周瑜自ら進みて甘寧を救ひ、大に曹仁が兵を夷陵に破り、馬三百匹を獲たり。是より周瑜は江北に屯して曹仁と相拒ぎ、孫權も勢に乗じて自ら兵を出し、合肥の城を圍みたり。然れども合肥は魏の南境第一の要害なれば、權終に克つこと能はずして已めり。

(二) 立德、荊州の四郡を徇ふ

吳人が此の如く活動しつゝある間に、立德、孔明は何事を爲したるか。曹操既に敗れて立德は、千歳の好機を得たり。固より茫然として日を消すべきにあらざるなり。先づ劉琦(劉表の子)を表して荊州の刺史となして、聊か故人に酬る、更に兵を率ゐて南四郡を徇へたり。武陵太守金旋、長沙太守韓玄、桂陽太守趙範、靈陽太守劉度等皆降伏して、四郡は忽ち立德の手中に歸したり。乃ち孔明を以て軍師中郎將となし、零陽、桂陽、長沙三郡を督し、其の賦税を調して以て軍費に充てしむることゝなりぬ。是に於て立德の根據漸く成れり。

此の如くにして建安十三年は終を告げ、同十四年の春には、孫權合肥の圍を解きて還りぬ。而して周瑜と曹仁と相持することは殆ど歳餘に及びしが、此の年十二月曹仁、城を棄て、走りしかば、周瑜は南郡の太守となりて江陵に屯し、程普は江夏太守として沙羨に治し、呂範は彭澤太守、呂蒙は尋陽の令となり、以て荊楚の地を鎮撫せり。是れ一には曹操を防ぎ、又一には劉立德を抑ゆるものなりき。たましく、荊州刺史劉琦病によりて卒せしかば、孫權は立德を表して荊州牧たらしめたり。然れども周瑜は常に立德を以て梟雄なりとし、之が勢力を抑壓すること、に於て周到の用意を拂ひたり。故に唯江の南岸四郡の地を給して之を守らしめ、敢て他方面に其の力を伸ぶるを許さざりき。

立德は油口に本營を建て、公安と改名して、暫らく此地に在り。勢ひ漸く振ふ。是を以て孫權は其の妹を立德に妻はせ、二家の和親を堅からしめて、以て曹操と相當らんとするに至れり。立德また之を諾して孫夫人を娶りぬ。夫人は才捷にして剛猛なること諸兄の風あり。其の侍婢百餘人、皆刀を執りて侍立せしかば、立德は其の室に至る毎に心常に凜々たりきといふ。

玄德孔明は固より荆州に在りて晏然たるべきに非ず。常に眼を巴蜀の地に放つと雖も未だ其の機を得ずして、建安十四年も亦暮たり。而して荆州の士民は玄德の下に歸附するもの日に益々多かりき。玄德は領土狹少にして其の衆を容るゝに足らざりしかば、自ら京に至りて、孫權と對顔し、荆州全部を都督せんことを請へり。周瑜之を聞き上疏して曰く

劉備は梟雄の姿を以て關羽、張飛、熊虎の將あり。必ず久しく屈して人の用を爲すものにあらず。愚、大計を謂はん。宜しく備を徒して吳に置き、之が爲に盛に宮室を築き、其の美女玩好を多くし、以て其の耳目を娛ましめ、此の二人を分ちて各々一方に置き、瑜が如きものをして、挟んで與に攻戰するを得せしめば、大事定むべきなり。今猥りに土地を割き、以て之に資業し、此の三人を聚めて、俱に疆場に在らしめば、恐らくは蛟龍雲雨を得て、終に池中のものにあらざらるべし。云々

曾て魯肅は玄德を以て梟雄なりといひ、今又周瑜も之を梟雄なりとして恐るゝこと深し。江東諸名士の玄德を見ることは略々一致したる所あり。呂範も孫

權に説きて、玄德を吳に抑留せんことを警告したりき。

孫權も亦玄德の行動に注意することを怠るものにあらず。荆州の民の歸附するもの甚だ多きを見て、孫權は實に玄德を恐れたり。然れども一面よりして察すれば、曹操の北方に踞して虎視眈々たるあり。故に孫劉二氏は争はんとして争ふべからざる時機に在るなり。孫權遂に荆州を與ふるを許さず。又強ひて之を吳に抑留することなかりき。

玄德は希望を果す能はずして、公安に歸り、日を経て周瑜、呂範等の秘策を聞き、歎じて曰く「天下智謀の士、見る所略々同じ。時に孔明、我を諫めて往くこと莫れといへり。其の意また此を慮りたるなり。我れ方さに危急、往かざるを得ず。此れ誠に險塗。殆ど周瑜の手を免れざらんとす」と。

(三) 周瑜死して魯肅代る

周瑜の江陵にある間は、玄德、孔明また荆州に於て殆ど事の爲すべきものなし。唯私かに蜀に入るの謀を畫して、其の機の熟するを待つのみなりき。而して周

瑜また之を熟知し得たるや否や、自ら蜀を取るの計を立て、權に説きて曰く「今、曹操新たに敗れて憂ひ腹心に在り。未だ將軍と兵を連ねて相争ふこと能はざるなり。請ふ奮威(奮威將軍)孫瑜(孫瑜)なり」と共に進んで蜀を取り、張魯を并せ、奮威を留めて其の地を固守せしめ、馬超(西涼)と援を結び、瑜は還りて將軍と襄陽に據り、以て操に蹙らば、北方圖るべきなり」と。權また之を許せしかば、瑜は江陵に歸り、行装を爲して巴丘に至り、途にして病む。自ら其の起たざるを悟り、權に上書して曰く、
瑜、凡才を以て、昔し討逆殊特の遇を受け、委するに腹心を以てせらる。遂に榮任を荷ひ、兵馬を統御す中、略人生死あり、脩短は命なり。誠に惜むに足らず。但恨むらくは、微志未だ展べず。復、敎命を奉せざるのみ。方今曹公、北に在り。疆場未だ静かならず。劉備の寄寓するは、虎を養ふに似たるあり。天下の事、未だ終始を知らず。此れ朝士、盱眙の秋。至尊垂慮の日なり。魯肅忠烈事に臨んで、苟もせず。以て瑜に代るべし。人の將に死せんとする、其の言や善し。儻し或は探る可んば、瑜死すとも朽ちらず。
と。遂に卒す。(建安十一年)年卅六なり。權素服哀を擧げ、流涕して曰く「公瑾(瑜)の王

佐の資あり。今忽にして短命。我れ何くにか頼らん」と。

周瑜は江東の俊傑なり。其の人と爲り、英氣風發、最も武略に長ず。赤壁の一戦を以て、天下の耳目を驚かし、以後は務めて玄德を抑へ、其の壮志を振ふの餘地なからしむ。周郎また偉なりといふべし。

孫權魯肅を以て奮武技尉となし、瑜に代はりて兵を領せしむ。肅は吳の諸士中、玄德、孔明と最も交り深きものなり。さればにや、孫權に勸め、荆州を玄德に委ねて、共に、曹操を防がんとするの策を立てたり。權、之に従ふ。是に於て、玄德は初めて荆州を領し、聊か其の驥足を伸ぶるを得たり。事の魏に聞えたる時、曹操は書を作りつゝありしが、我にもあらず、筆を地に落したりといふ。玄德が未だ一寸の地を得ること能はずして、四方に流寓したる時に於て、すら天下の英雄を以て許したるは、曹操也。今之が荆州を得たるを聞く。筆を落したる何ぞ怪しむに足らん。

荆州の貸借云々に付きては、別に説あり。後段を参照せられよ。

玄德、荆州に在りて、新に士を得ると少なからず。就中、馬良、兄弟及び龐統の如

きは其の尤なるものなり。馬良字は季常襄陽宜城の人なり。兄弟五人並に才名あり。郷里諺を爲して曰く「馬氏五常白眉最も良し」と良は眉に白毛あり。其の弟諱と共に才略非凡にして深く孔明の信任を得たり。龐統字は士元襄陽の人なり。龐徳公之を稱して鳳雛といへり。少時樸鈍にして未だ之を知るものなし。唯潁川の司馬徽清雅にして人を知るの明あり。統往きて之を見る。徽は樹上に在りて桑を採り統は樹下に座して共に語る。晝よりして夜に至る。徽甚だ之を異とし統を稱して「南州士之冠冕」といへり。是よりして漸く世に知られたり。南郡の太守たりし周瑜の卒せし時統は其の喪を送りて吳に至る。吳人既に其の名を聞きたりしかば陸績顧劭全琮等皆統と語りて深く交を結びたりき。玄德の荊州を領するや統を以て先づ未陽の令となせり。統縣に在りて政を顧みざりしかば遂に官を免せられぬ。魯肅玄德に書を遣りて曰く「龐士元は百里の才にあらざるなり。治中別駕の任に處らしめば始めて當に其の驥足を展ぶべきのみ。」

と。孔明も亦大に統の才を稱せしかば玄德稍悟る所あり。統を招きて語り、大に其の才略を稱して遂に治中從事となし親待すること孔明に次ぎたり。後には之を軍師中郎將と爲して帷幄に參せしむることゝなりぬ。

龐統玄德に説きて曰く「荊州は荒殘し人物殫盡せり。而して東には吳孫北には曹氏あり。鼎足の計以て志を得難し。今益州は國富み民彊し。戸口百萬四部の兵馬出づる所必ず寶貨を具す。外に求むるなきなり。今權りに借りて以て大事を定むべし」と。

孔明嘗て草廬を出でんとする時荆益を跨有して天下を三分するの策を立てたりき。而して今又龐統のいふ所此の如し。蓋し達人の見る所大差なきなり。玄德も亦眼を益州(蜀也)に注ぐを怠らざりき。程なく機熟し蜀の險路は此の大耳翁を迎へて開かれたり。

第六章 天下三分

(一) 蜀の張松法正等玄徳に心を寄す

孔明が三分割據の目的地たる益州は山河四塞東荆吳に連り南蠻に接し北は漢中より直に長安に至るべく誠に一箇の天府なり。初め劉焉益州牧となり劉璋其の職を繼げり。璋は性溫柔にして威略なし。政令漸く亂れ人民亦之を恨む。惜しい哉天下形勝の地は關弱なる一官人の手に管轄せられたり。泰平の御代に在りては關君も尙ほ其の位置を保つべし。三國の亂世に於ては劉璋の益州を領することは殆んど天の許さざる所なり。劉にあらざれば孫孫にあらざれば曹必ず此の地を取らん。是れ實に免るべからざる勢ひなり。

玄徳荆州に在りて孔明と共に益州に注目するを怠らざりき。直に兵を出して之を征するも亦未だ難からざるなり。然れども信義を以て天下に標榜するもの固より無名の師を起すべからず。殊に劉璋は同族なり。玄徳に於て忍び

ざる所あり。故に蜀を取るの難きは之を攻むるの難きにあらずして信義を天下に失ふことの難きにあり。孔明輔佐の任にありて最も苦慮せし所實に茲に在り。されど徒らに遷延し躊躇せば此の天府の地を擧げて他人の手中に歸せしめざるべからず。若し蜀にして魏或は吳の手に落つるあらむか玄徳は殆ど永遠に其の立脚地を求むること能はざるに至るべし。故に孔明は玄徳が忍ぶ能はざるの情を知ると雖も蜀に入るの方略に就きては既に充分なる決心と成算とを有したり。是れ荆州を得て後に然るにあらず。實に草廬を出づるの志なりき。而して今や其の時來れり。

建安十三年曹操が南荆州に下りて一旦此の地を領有するや益州牧劉璋は別駕張松を遣はして曹操に敬意を致さしむ。松は人と爲り短小にして放蕩風采揚らず。然れども識達にして精果。蓋し蜀中の一奇才なり。當時曹操は劉璋を降し玄徳を走らし天下の統一將に成らんとして得意の絶頂に在りたればにや松を遇して甚だ之を侮れり。松怨み且つ憤りて蜀に歸り劉璋に勸めて操と絶たしめ却て劉玄徳と結びて操と相抗敵せしむるに至れり。

習鑿齒論じて曰く

昔し齊桓一たび其の功に矜りて、叛くもの九國あり。曹操暫らく自ら驕伐して天下三分す。皆之を數十年の内に勤めて、而して之を俯仰の頃に棄つ。豈に惜しからずや。

蓋し張松は劉璋の闇弱なる事を共にするに足らざるを知り、蜀を擧げて曹操に與へんとするの心底ありたるなり。操驕りて之を失す。亦惜しむべきなり。

張松の友に法正といふものあり。字は孝直、右扶風の人なり。建安の初、天下飢ゑたる折、同郡の孟達と共に蜀に入り、劉璋に仕へて新都令となり、後軍議校尉となる。然れども大に任用せらるゝに至らず。才器を抱いて悒々たり。張松、荆州より還り、璋に勤めて立德と相結託せしむ。璋其の言に従ひ、使者たるべきものを求む。張松乃ち法正を擧ぐ。璋も亦之を然りとし、法正に命じて往かしむ。正、一旦之を辭し、然る後已むを得ざるものゝ如くにして往く。既にして蜀に歸り、立德の雄略あるを説き、張松と共に謀りて之を奉戴せんとす。而して未だ機縁あらざるなり。

建安十六年、曹操鍾繇を遣はして漢中に向はしめ、將に張魯を圖らんとす。張魯は所謂米賊にして、本より大志あるものに非ず。地は峻なりと雖も、人既に愚なり。曹操の兵一度加はらば、朽ちたるを挫くにも似たらんか。若し漢中にして曹操の手に歸せんか。蜀は其の外廓を奪はれたるに等し。是れ智者を俟つて知る所にあらざるなり。張松之を機とし、璋に説きて曰く「曹公の兵は天下に敵なし。若し張魯の資によりて以て蜀土を取らば、誰か能く之を禦がん。劉豫州(立德)は使君の宗室にして、曹公の深讎なり。善く兵を用ふ。若し之をして張魯を討たしめば、魯必ず破れん。魯破るれば則ち益州強し。曹公來ると雖も、能く爲すなきなり。今州の諸將、龐義、李異等、皆功を恃みて驕豪、外意有らんと欲す。劉豫州を得ざれば、則ち敵其の外を攻め、民其の内を攻めん。必敗の道なり」と。主簿黃權諫めて曰く「劉左將軍(立德)驍名あり。今之を招かんか。臣下として之を遇すれば、其の意に満たず。賓客を以て之を遇すれば、一國二君を容れず。客に泰山の安きあれば、主に累卵の危きあり。境を閉ぢて以て時の清むを待つ

に若かざるなり」と。

璋聽かず。權を斥けて廣漢の長と爲す。從事王累も亦自ら州の門に倒懸して以て極諫す。璋皆聽かず。遂に法正をして玄德を迎へしむることゝなしぬ。法正來りて玄德に見え先づ劉璋の意を通じて後陰に策を献じて曰く「明將軍の英才を以て劉牧の懦弱に乗ず。張松は州の股肱なり。以て内に響應すべし。然る後益州の殷富を資し天府の險阻に馮り是を以て業を成さば猶ほ掌を反すが如くなるべし」と。

玄德疑ふて未だ決せず。龐統説きて曰く「益州は戸口百萬。土沃財富。資して以て大業成すべきなり」

玄德曰く「今吾と水火たるものを指せば曹操なり。操は急を以てし吾は寛を以てす。操は暴を以てし吾は仁を以てす。操は誦を以てし吾は忠を以てす。毎に操と反す。事乃ち成るべきのみ。今小利を以て信義を天下に失はば奈何」龐統答へて曰く「亂離の時固より一道の能く定むる所にあらざるなり。且つ弱を兼ね味を攻め逆に取りて順に守るは古人の貴ぶ所。若し事定まるの後封

するに大國を以てせば何ぞ信に負かん。今日取らざれば終に人の利とならんのみ」と。

玄德また然りと爲し遂に蜀に入ることゝなりぬ。惟ふに龐統の言は孔明の言はんと欲する所を能く言ひ得たるものなり。故に孔明は唯黙して龐統の言を贊助したるに過ぎざりしなるべし。

(二) 玄德蜀に入る

建安十六年の冬玄德は兵數萬に將として蜀に入り龐統を伴ひて軍師となし。黄忠魏延等の諸將を具せられたり。而して孔明は荊州の都督として關羽張飛趙雲等の諸將と共に茲に留まれり。夫れ荊州は根據の地なり。たとひ蜀に於て功を成す能はざるも退きて此の地を守らば以て天下の一勢力たるを得べし。蜀の事未だ知るべからざるに當りて孔明が荊州の守備を嚴にしたる固より當然の事といふべきなり。

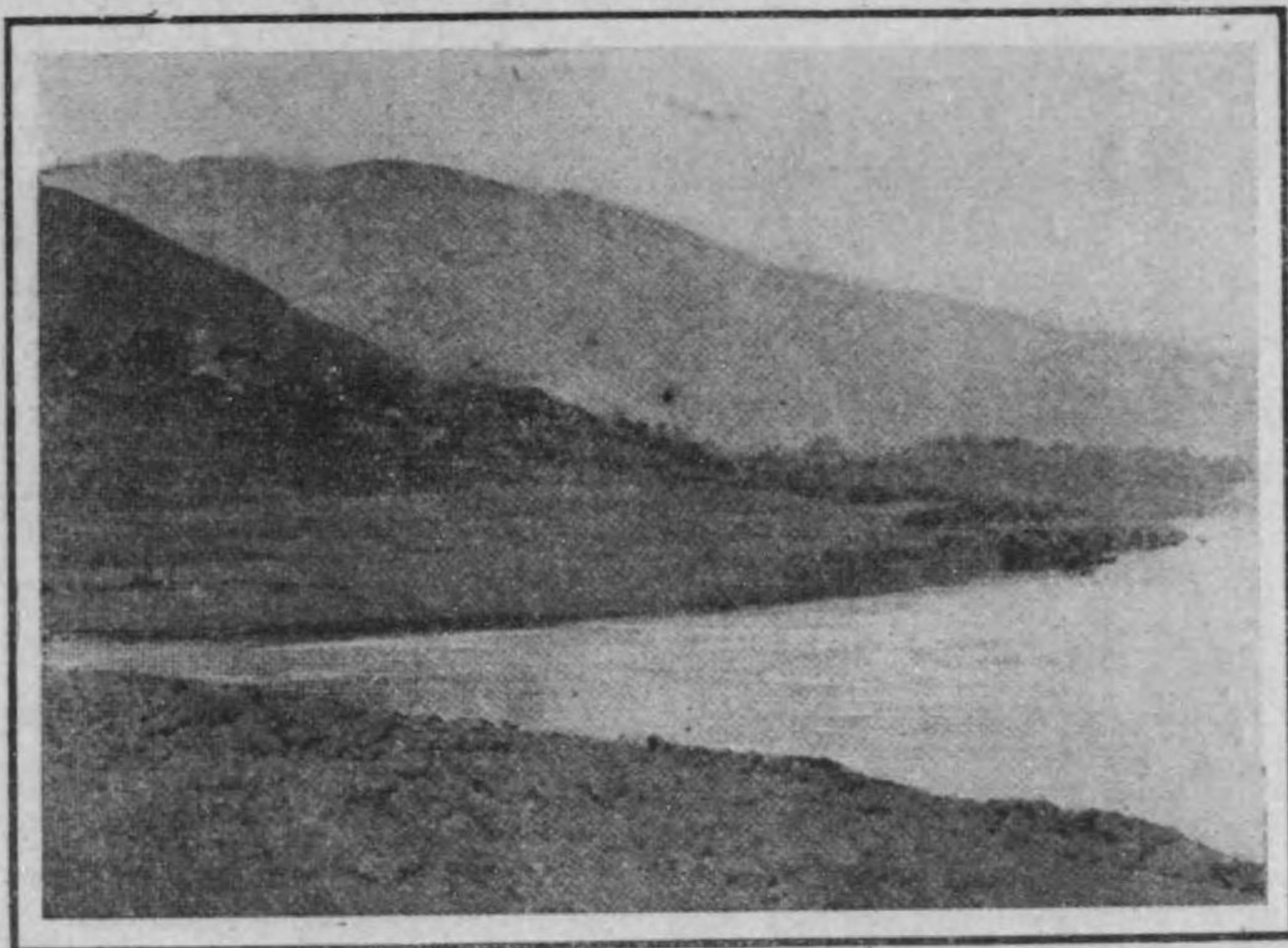
玄德江を溯りて蜀の境に入る。劉璋が稅政に苦しめられたる人民は歡呼し

て之を迎へ、贈遺のもの巨億を以て計ふ。玄德、巴郡に至る。巴郡の太守嚴顏胸を打つて歎じて曰く「此れ所謂獨り窮山に坐し、虎を放ちて自ら衛るものなり」と。巴郡の江州を發して玄德は墊江水により涪に至る。此の時劉璋は歩騎三萬を率ゐる車乘、慢慕、美を盡して精光日に耀き、來りて玄德と相會す。張松は密旨を法正に傳へ、玄德に勸めて、會見の席上に璋を襲はしめんとす。玄德曰く「此の事倉卒に爲すべからず」と。

龐統曰く「今、此會によりて便ち之を執らるれば、將軍兵を用ふるの勞なく、坐ながらにして一州定むべきなり」と。

玄德曰く「初めて他國に入りて、恩信未だ著はれず。是れ不可なり」と。終に法正の言をも、龐統の策をも用ゐざりき。策士の策する所は辛辣にして往々情誼を没却するも、玄德は飽くまで寛厚の長者なり。

劉璋は玄德と歡飲すると百餘日に互り、遂に大に其の兵を増し、厚く資給を加へ、以て漢中の張魯を伐たしめ、又白水軍を督せしめたり。是に於て玄德は兵數三萬を加へ、車甲器械も亦甚だ完備せり。既にして璋は其の都城成都に還り、玄



（す號と山龍臥所しせ營屯の明孔は山の方後）府 慶

徳は北して葭萌に至る。然れども未だ張魯を討たずして、先づ恩徳を施し、以て民心を收攬したり。

建安十六年は勿々にして暮れ行きぬ。翌十七年正月には曹操に詔ありて入朝趨らず、劍履殿に上ること、蕭何の故事の如くならしむ。彼が專横想ひ見るべきなり。同年秋、孫權は秣陵に都して、名を建業と改め、濡須塢を立て、以て曹操を防ぎ、傲然として江東に雄視す。獨り玄德は蜀に入り、葭萌を守りて未だ何事をも爲し得たるなし。丈夫豈に感慨無からんや。龐統乃ち策を勸

めて曰く「陰に精兵を選び、晝夜道を兼ね、直ちに成都を襲はば、璋は既に武ならず、また預備あるなし。大軍俄に至らば一舉して事定むべし。此れ上計なり。楊懷高沛は璋の名將なり。各々強兵を擁して白水關頭を拒守す。聞くならく、數々書を發して璋を諫め、將軍をして荊州に還らしめんとす。今、荊州に急あり、之を救はんとするを説き、結束して歸意を示さば、二子將軍の去るを喜び、必ず輕騎にして來見すべし。將軍直に此の二將を執へ進んで其の兵を併せ、乃ち成都に向ふ。此れ中計なり。退きて白帝に還り、荊州を連引し、徐ろに之を圖る。之れ下計なり。若し沈吟決せざれば、將に大困を致さんとす。久しうすべからず」と。玄徳其の中計を用ゐんとす。

偶々曹操の孫權を攻むることあり。權、玄徳に救を求む。玄徳依りて璋に書を贈りて曰く、

孫氏は本我と唇齒たり。而して關羽が兵弱し。今往きて救はずんば曹操必ず荊州を取り、轉じて州界を侵さん。其の憂は張魯よりも甚だし。魯は自守の賊なり。慮るに足らずと。

依りて萬兵及び資糧を増さんことを乞へり。

今、魏武帝紀(曹操)を按ずるに、建安十七年十月、孫權を伐ち、同十八年正月、濡須口に進軍したる事實あり。然れども吳主傳(孫權)に權、之を拒ぐこと月餘、曹公、權の軍の整肅なるを見て退く云々の記事ありて、未だ劉玄徳に救を求めたること見えぬ。權書を曹操に與へて、春水まさに生ず。公宜しく速に去るべしといひ、別紙に、足下死せざれば、我れ安するを得ずと認めたり。以て權が意氣の旺盛なるを見るべし。さればにや、御批通鑑の評に「是れ蓋し備が口を籍りて劉璋に兵を増すを請ふの詞なり」と斷せられたり。左もありぬべきことなり。劉璋が部下の諸士にして事を見るの明あるものは、皆玄徳を恐れて、之を蜀より逐はんと欲せざるなし。而して璋も亦今に至り、心中疑懼の念あるを免れず。依りて玄徳の請求に對しては、兵四千を許し、餘は皆其の半ばを給したるのみなり。

玄徳激怒して曰く、吾れ益州の爲に強敵(張魯)を征し、師徒勞瘁す。而して財を積み賞を吝まば、何を以てか士大夫をして戰に死せしめんや』
時に張松も亦書を玄徳と法正とに與へて曰く、

今や大事立つに垂として、如何ぞ之を釋て去らんやと。松が兄は廣漢の太守張肅なり。松が密計を知りて、禍の己れに及ぶを恐れ、其の謀を發ししかば、璋は驚き且つ怒りて直に松を斬り、關を守る諸將を戒めて、守備を嚴にし、且つ玄徳と文書を通ずることを得ざらしめたり。玄徳之を聞きて更に大に怒る。二劉は終に戦はざるべからざる運命を有するなり。

(三) 二劉相争ふに至る

玄徳先づ白水軍の將楊懷高沛を召し責むるに無禮を以てして之を斬り、兵を進めて直に關頭に至り、白水軍を併せ、更に進んで涪城に據れり。龐統が所謂中計は此の如くにして其の實行の緒に就けり。玄徳蜀に入りてより、茲に至る滿一年なり。

益州の從事にして鄭度といふものあり。劉玄徳が兵を擧ぐるを聞き、劉璋に説きて曰く「左將軍(玄徳)懸軍我を襲ふ。兵萬に滿たず。士衆未だ附かず。軍に輜重なし。野穀を以て兵糧に充てんとす。今之に對する計を立つるに、先づ巴

西梓潼の民を驅りて悉く之を涪水以西に入れ、其の倉廩野穀を焼き、然る後、壘を深くして靜に敵を待つに如くなし。彼れ來りて戦を請ふも許すことなければ、久しくして糧食給せず。百日を過ぎずして將に自ら走らんとす。走るに乗じて之を討たば、必ず敵を擒にすべきなり」と。

劉璋曰く「吾れ敵を拒ぎて以て民を安んずるを聞く。未だ民を動かして以て敵を避くるを聞かざるなり」と。鄭度を斥けて其の計を用ゐざりき。

玄徳が兵の弱點は、鄭度之を指摘して、其の急所を道破したり。玄徳聞きて之を惡み、如何すべきかを法正に問ふ。正曰く「璋は用ふる能はざるべし。憂ふる無きなり」と。後、果して其の言の用ゐられざりしを聞き、初めて心を安んじたり。

劉璋は劉瑣、冷苞、張任、鄧賢、吳懿等の諸將をして玄徳を拒がしめ、たれども皆敗れ、退きて縣竹を保つ。吳懿は遂に玄徳に降れり。璋敗報を得て更に李嚴、費觀の二將を遣はして縣竹の軍を督せしめたるに、嚴と觀とは又相共に玄徳に降れり。

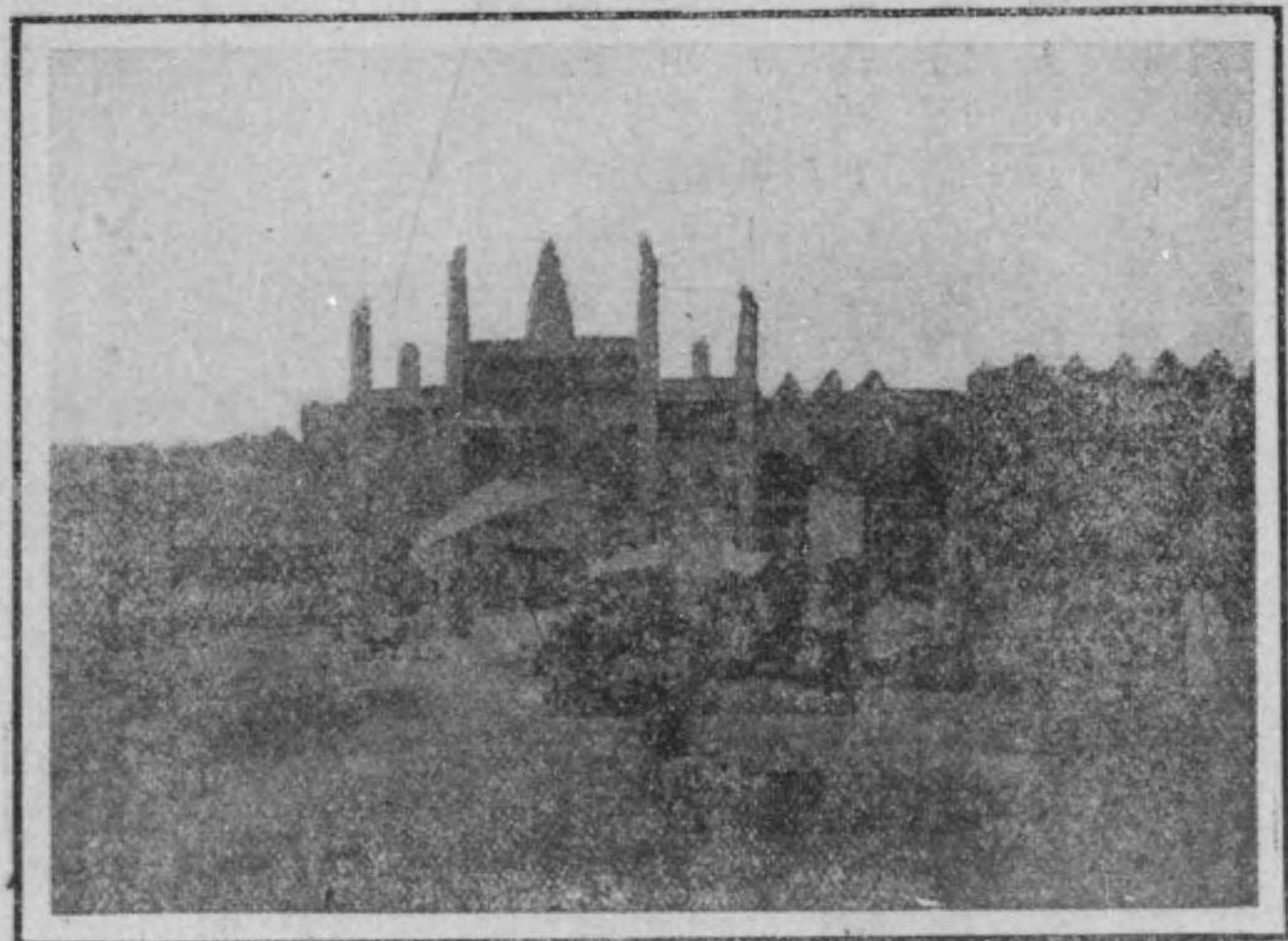
されば玄徳が軍は兵氣益々振ひ、諸將を分遣して屬縣を下す。草の風に靡く

に似たり。敵將劉瓚張任は璋の子循と共に退きて雒城を保つ。玄德勢に乗じ進んで之を圍む。敵の勇將張任出で、雁橋に戦ひしが亦敗れて死す。然れども雒城は險要の地勢を占めれば、城堅くして抜けざりき。

(四) 孔明蜀に入る。

今や三分割據の計は既に其の七八分を成し得て、僅に雒城と成都とを殘すのみなり。孔明は此の事業を大成すべき責任を有するものなれば、關羽を留めて荆州を守らしめ、張飛、趙雲の諸將を率ゐ、流れを沂りて蜀に入る。是れ將に死せんとする蜀に、孔明自ら最後の刃を加へんとするものなり。

張飛先づ江州に至り巴郡太守嚴顏を攻め、破りて之を擒にす。飛、顏を呵して曰く「大軍既に至る。何ぞ降らざる。」顏曰く「卿等無狀にして我州を侵奪す。我州には斷頭將軍ありて降將軍無し」と。飛益々怒り左右に命じ之を斬らしむ。顏容色變せず自若として曰く「頭を斬らんとすれば、直に斬れ。怒ること勿れ」と。飛、之を壯なりとし、釋して賓客となす。而して趙雲は外水より江陽、犍爲を定め



成都舊皇城の南門

張飛は更に巴西、德陽を略して次第に成都に逼らんとす。

雒城の圍み殆ど一年ならんとし、龐統は流矢に中りて死したり。年卅有六。大事を前にして謀臣を失ふ、玄德の心中知るべきなり。統や年尙ほ壯、蜀を定むるの謀主として未だ大に其の才略を發揮するに至らず。惜しむべしとなす。陳壽評して曰く「之を魏臣に擬すれば、統は其れ荀彧の仲叔か」と。或は然らん。龐統已に死して孔明未だ來らず。此間法正獨り謀主たり。書を劉璋に與へて大勢を論じ、降伏を勸む。

曰く

明將軍土地日に削られ、百姓日に困しむ。中略空爾相守るも猶ほ相堪へず。今張益徳が數萬の衆已に巴東を定めて犍爲の界に入り、分れて資中、徳陽を平らげ、三道並び侵す。將た何を以て之を禦がん。中略左將軍兵を擧げてより以來、舊心依々として、實に薄意無し。愚以爲らく變化を圖りて、以て尊門を保つべし。

璋答へず。幾程もなくして雒城陥り、玄德は進んで成都を圍みたり。孔明は張飛、趙雲等と共に來り會して、兵氣振々たり。

時に涼州の勇將馬超といふものあり。曾て曹操と戦ひ、一旦大に之を破りて武名天下に轟きしも、後遂に操の爲に破られ、走りて漢中の張魯に歸せしが、魯は闇弱にして與に事を謀るに足らざるを以て、密書を玄德に致して降を請ふ。玄德大に喜びて曰く「我れ益州を得たり」と。人を出して之を迎へしむ。超兵に將として直に成都に至り、其の城北に陣す。城中之を聞きて震怖せり。從事中郎簡雍機に乗じて城中に入り、璋に説きて降を進む。時に城中尙ほ精兵三萬あり。

穀帛一年を支ふるに足る。吏民皆死戦せんと欲す。璋曰く「父子州に在ること二十餘年、恩徳の以て百姓に加ふるなし。百姓攻戦三年、草野に肌膚するものは璋が故を以てなり、何の心か能く安んせん」と。遂に城を開き、簡雍と與を同じうして出で降る。諸臣流涕せざるなし。玄德即ち璋を公安に還し、盡く其の財物を歸して、仍ほ振威將軍の印綬を佩せしめたり。

(五) 蜀土玄德の手中に歸す

今や益州は盡く玄德の手中に歸したり。即ち成都に入り、酒を置きて大に士卒を饗し、蜀の城中の金銀を取つて將士に分與し、更に大に功を論じ賞を行ふ。諸將の任官概ね左の如し。

諸葛亮 軍師將軍

董和 掌軍中郎將

馬超 平西將軍

法正 蜀郡太守、揚武將軍

天下三分

黃忠	討虜將軍
糜竺	安漢將軍
簡雍	昭德將軍
孫乾	秉忠將軍
黃權	偏將軍
許靖	左將軍
龐義	司馬
李嚴	犍爲太守
費觀	巴郡太守
伊籍	從事中郎
劉巴	西曹掾
彭承	益州治中從事

此等の處置は固より孔明の玄德と相議して定むる所なるべし。孔明時に年三十四草廬對策に所謂三分據有のことは是に至りて略其の形式を爲すを得た

り。然れども益州を取るの一事は後世の論議を免れざるものあり。蘇東坡曰く

之を取るに仁義を以てし、之を守るに仁義を以てするものは周なり。之を取るに詐力を以てし、之を守るに詐力を以てするのは秦なり。秦の取る所以を以て之を取り、周の守る所以を以て之れを以て守るものは漢なり。仁義詐力雜用して以て天下を取るは、此れ孔明の失ふ所以なり。且つ夫れ一不義を行ひ、一不辜を殺して天下を得るも、爲さざる所あり。而して後天下の忠臣義士、之れが用を爲すを樂しむ。劉表の喪、昭烈荊州に在り。孔明其の孤を襲殺せんと欲す。昭烈忍びざるなり。其の後、劉璋禮を以て之を逆ふ。蜀に至り數月ならずして其の吭を扼し、其背を拊つて其の國を奪ふ。其の曹操と異なるもの幾んど希なり。曹操の敵せざるは天下共に知る所なり。兵を言へば操の多きに若かず。地を言へば操の廣きに若かず。戰を言へば操の能に若かず。而して一の之に勝るものあるは、區々の忠信なり。孔明劉璋を遷して、既に天下忠臣義士の望を失ふ。乃ち始めて兵を治め振旅して、仁義の師を爲し、東向

長驅して天下の響應を欲す。蓋し亦難しといふべし云々。
之を駁する葉平巖は曰く

昭烈の劉璋を取るは正に義たる所以なり。董卓の亂に方り、雄豪競逐す。猶ほ皆討賊尊漢を以て名と爲す。劉焉(璋の父)陰に異志を懷き、間に乘じて益州を據有し、假然として不臣の心あり。璋は孽息を以て暗弱、また王土を盜む。

昭烈方に義兵に仗りて群盜を攘ひ、以て漢室を復す。此をしも誅せずんば、漢室何ぞ興すべけんや、故に昭烈の舉は、上は以て漢帝の憤りを據へ、下は以て劉焉の奸を誅す。厥の功大なり。何ぞ義に負くことあらん。

此の他、王鳳洲も亦蜀を取らざれば漢を興す能はざる所以を論じて、不義にあらざることを辯じたり。論議既に盡きたるものゝ如くなれども、更に吾人の見る所を述べん。

曾て孔明の草廬を出づるや、一は則ち玄德の知遇に感じ、一は則ち大義を天下に唱へんとせしのみ。玄德を佐けて漢室を興復するを以て志と爲す。先づ荆州を取り、更に益州を略して四海を三分せんことを明言したるに、玄德大に喜びて魚の水を得たるが如しと爲せり。其の大方針は此の時既に定められて、一歩も動かざるなり。荆州は地形勝にして主庸劣。操も之を窺ひ、權も之を圖る。

荆州如何で久しく保たんや。曹操の大舉南侵するに當り、襄陽を取りて以て、之を拒がんとしたるは、寧ろ機宜に適したる處置なり。而して玄德の之を爲すに忍びざりしは仁なり。幸にして赤壁の戰に勝ちたればこそ、再び荆州に歸るを得たれ、若し敗れたらんには、天下曹操に歸して、玄德は遂に其の立脚の地を得る能はず、孔明出廬の志、亦空しからん。玄德は本來一寸の地をだも有せざるものなり。而して漢室の舊業を復興せんとすれば、必ず何人かの領地を取らざるべからず。是れ私の爲にあらず、是れ漢室興復の爲なり。取るべきの機に當りて之を取る、何の不可なることかあらん。若し一小事を忍ぶ能はずして大事を失はば、是れ智といふべきか、徳といふべきか。吾人は其の可なるを知らざるなり。つらく、益州のことを按ずるに理また正に此の如くなるべし。

彼の群雄爭衡の世に當り、君臣にもあらず、故舊にもあらぬ劉璋、暗愚にして弊政百出、操に取らるべく然らざれば、權に併せらるべき劉璋を攻めて、玄德、孔明が

其の地を收めたるに於て、何の詐力、何の不義かあらん。建安十二年、既に益州據有を明言して、其の十九年に之を取る。敢て人を欺かず。又自ら欺かざるなり。漢室の爲に其の信義を貫けるのみ。試に見よ、曹操の專横は一日にあらず。漢帝は有れども無きが如し。若し益州の地を舉げて操の手中に委ね、以て其の勢を加ふるあらば、玄德五十年の苦辛は終に水泡に歸せんのみ。殊に劉璋は漢室に忠なるものに非ず。之を倒すも義に於て何かあらん。此れをしも猶ほ非とすれば、玄德は深山幽谷のうちに世を避くべきのみ。孔明亦何ぞ敢て草廬を出づるを要せんや。

蘇子は孔明、劉璋を遷して、既に天下義士の望を失ひたりといふも、不幸にして今其の事實を認むこと能はざるなり。玄德の成都に入るや、黄權を偏將軍と爲し、劉巴を西曹掾、許靖を左將軍となせり。黄は嘗て玄德を迎ふるの非を劉璋に極諫し、且つ璋の降るまで孤城を固守したるものなり。殊に劉巴は玄德と宿怨あり。然れども忽ち之を忘れたる如くにして、顯位に置けり。其の他、吳懿、費觀は皆璋の姻親なるも、敢て障壁を設くることなく、材に任じ、賢を舉げて、其の器能

を盡したり。是に依りて前日の弊政一朝にして革たまり、國內大に安きを得たり。是れ固より玄德が寛厚の資性によるといへども、孔明が輔導宜しきにあらずんば、如何で此の如くなるに至らん。猶ほ一適例あり。初め玄德は蔣琬を以て廣都の長となせしに、衆事治せず、又時に沈醉せしかば、大に怒りて罪戮を加へんとせり。孔明請ふて曰く、蔣琬は社稷の器、百里の才にあらざるなり。其の政を爲すは民を安ずるを以て本となす。修飾を以て先となさざるなり。願はくば主公重ねて之を察せよ」と玄德此の言に悟りて琬を赦せり。琬は後遂に蜀の大政を掌るに至りしものなり。孔明が玄德を輔佐するの道、凡そ此の如し。義士何を以てか望を失はん。蘇子の言誤れりといふべし。

第七章 荊州と漢中

(一) 孫と劉と相嫉視す

玄德が劉璋を遷し蜀を收めたるに於て、天下の義士は望を失ふ所なし。唯望

を失ひ、怨を抱くに至りたるは曹操と孫權となり。
 曾て玄徳の荊州に在るや周瑜、甘寧等數々蜀を取ることを孫權に勧めたり。
 權乃ち使を玄徳に遣はし來りて曰く「劉璋は武ならず。自ら守る能はず。若し
 曹操をして蜀を得せしめば、則ち荊州危し。今先づ攻めて璋を取り、次に張魯を
 取り、南方を一統せんと欲す。十操ありと難も憂ふる所なきなり」と。
 玄徳答へて曰く「益州は民富みて地險なり。劉璋弱なりと雖も以て自ら守る
 に足れり。今、師を蜀漢に暴らし、萬里に轉運して、戦ひ克ち、攻取して、擧げて利を
 失はざらしめんとす。此れ孫吳の難しとする所なり。議者曹操が利を赤壁に
 失ふを見て謂ふ、其の力屈して復遠念なしと。今、操天下を三分して已に其の二
 を有つ。馬を滄海に飲ひ、兵を吳會に觀さんと欲す。何ぞ肯て此を守り坐なが
 ら老を須たんや。而して同盟、故なきに自ら相攻め、樞を操に借し、敵をして其の
 隙に乗せしむ。長計にあらざるなり。且つ備は璋と託して宗室たり。冀くは
 威靈によりて以て漢朝を匡さん。今、璋罪を左右に得たり。備獨り悚懼す。敢
 て聞する所にあらざるも願はくば寬貸を加へよ」と。

玄徳は建安十二年、孔明と相遇ふてより、夙く既に蜀を取るの志あり。而して
 今權に答ふる所此の如し。蓋し英雄能く人を欺くものか。孫權また能く之れ
 を知る。たとひ權の之れ知らざるも、吳の謀臣はよく之れを知りたるべし。玄
 徳の言ふ所を聽かざるも
 の々の如く、權は孫瑜を將
 とし、水軍を率ゐて夏口に
 住まらしむ。周瑜之が謀
 主として蜀に入らんとす
 るなり。若し蜀にして孫
 權の攻略する所とならん
 か、玄徳が將來は闇黒裡に
 葬り去らるべし。是れ智者を俟つて知る所にあらざるなり。玄徳は斷乎とし
 て其の決心を示したり。孫瑜の兵の過ぐるを許さずして曰く「汝蜀を取らんと
 欲すれば、吾れ當に被髮して山に入るべし。信を天下に失はざるなり」と。



關羽字雲長

關羽は江陵に張飛は秭歸に屯し孔明は南郡に據り、玄德は自ら孱陵に在り。

軍容嚴として犯すべからず。孫權は餘儀なく孫瑜を召還して已めり。

孫劉の二氏は益州攻略のことに關して既に此の如き交渉を有したりき。故

に玄德が蜀に入りて劉璋を攻むるを聞くや、孫權怒つて曰く「猾虜詐を挾むこと

此の如し」と。二氏の反目は已むべからざるの勢ひなり。

關羽荆州に留まりて江陵を守る。玄德既に益州を得るに及びて、權は諸葛瑾

を使者として荆州を求めたり。玄德許さずして曰く「吾れ方さに涼州を圖る。

涼州定まらば、盡く荆州を與へん」と。權之を聞きて曰く「此れ假りて返さず虚辭

を以て歳を引かんと欲するなり」と。玆に初めて荆州を貸すの説あり。

孫權は長沙桂陽零陵の三郡(共に荆州の地)に長吏を置きたるに、關羽悉く之を放逐し

たり。權大に怒り、呂蒙に兵二萬を與へて三郡を取らしむ。玄德之を聞き自ら

公安(荆州)に至り、關羽をして三郡を争はしむ。孫權も進んで陸口に屯し、諸軍を

統べたり。

魯肅は萬人に將として益陽に屯せしが、關羽と相見て事を議せんとし、各々兵

馬を百歩の外に駐めて相會す。肅羽を責むるに、三郡を返さざるを以てす。羽

曰く「烏林の役(赤壁戰の一部)左將軍身行間に在り。力を戮せて敵を破る。豈に徒に勞

して一塊の土なきを得んや。而るを足下來りて地を取らんとするか。」

肅曰く「然らず。始め豫州(主)と長坂に見えたる時、豫州の兵は一校に當ら

ず。計窮し慮極まりて、志勢摧け遠竄せんと欲せらる。主上(孫權)豫州の身の處

する所なきを慤れみ、土地士民の力を愛ます。庇蔭する所ありて以て其の患を

濟はしむ。而して豫州獨り情を飾り、德を愆(おぼ)まる。今既に手を西州に籍り(益州)

事、又荆州の土を取らんと欲す。此れ蓋し凡夫も行ふに忍びざる所なり。況ん

や人の主たるものに於ておや。」

羽答へず。辭窮したるか。將た斯かる事件が言辭の間に即決すべからざる

を知りて然るか。羽は才辯の人に非ず。恐らくは多言却て誤を生せんことを

恐れて黙したるものならん。

偶々曹操が將に漢中を攻めんとするの報あり。玄德之を憂ひ使を遣はして

和を孫權に求めしむ。權も亦諸葛瑾を使者として之に答へ、遂に湘水を以て界

となし、長沙江夏桂陽以東は權に屬し、南郡零陵武陵以西は玄徳に屬することとなりて、和議定まり、二氏の好みを復するを得たり。(建安二十二年)

諸葛瑾字は子瑜、孔明が兄なり。使命を奉じて蜀に入るや、兄弟唯公會に於て相見るのみ。退きて私會なし。人其公正なるに服せざるなかりき。瑾は年少にして吳に入り、年を経て次第に重用せらる。未だ大才大識略の稱すべきものあるを見ざれども、權に仕ふること忠實、事を處する公直なるに於て、誠に孔明が兄たるに慚ぢざるものなり。

(二) 曹と劉と漢中を争ふ

孫劉二氏の荆州を争ふや、機を見るに敏なる曹操は直ちに發して漢中を征し、張魯を驅逐して其の地を領したり。魯は一旦巴中に遁れしが、後遂に操に降れり。時に丞相主簿司馬懿(字は仲達)操に説きて曰く、「劉備詐力を以て劉璋を虜にするも、蜀人未だ附かず。而して遠く江陵を争ふ。此の機失ふべからざるなり。今漢中に克ちて益州震動す。兵を進めて之に臨まば、勢ひ必ず瓦解せん。聖人

も時に違ふ能はず。亦時を失ふべからざるなり」と。

操曰く、「人は足るなきを苦しむ。既に臚を得て復蜀を望まんや。」

劉曄も亦進み出で、曰く「劉備は人傑なり。度ありて遅し。蜀を得て日淺し。蜀人未だ恃まざるなり。今漢中を破つて蜀人震恐す。其の勢ひ自ら傾かん。公の神明を以て其の傾けるを壓す。克たざるなきなり。若し少しく之を緩ふせば、諸葛亮治國に明らかにして相たり。關羽張飛、勇三軍に冠たり。而して將と爲る。蜀の民既に定まり、嶮に據つて要を守らば、則ち犯すべからず。今にして取らずんば、必ず後憂を爲さん」と。

操遂に用ゐず。夏侯淵張郃徐晃等を留めて漢中を守らしめ、自ら兵を班へせり。時に建安二十年なり。

夫れ漢中は蜀の咽喉なり。曹操が電馳して之を取りたるは、則ち新に蜀に入りたる玄徳の頭上に先づ一痛棒を加へたるものなり。曾て張魯の巴中に走るや、黄權玄徳に説きて曰く「若し漢中を失はば、則ち三巴(巴東巴西)振はず。此れ蜀の股臂を割くなり」と。玄徳之を然りとし、權を以て護軍と爲し、諸將を率ゐて張

魯を迎へしめんとせしが、魯既に操に降りたるを以て果さざりき。時に魏將張郃は命を受けて三巴を徇へ、進んで宕渠に軍す。玄徳張飛に命じて之を拒がしめ、撃つて大に郃を破る。郃走りて南鄭に還れり。曹操之を聞き、頻りに兵を増して漢中の守備を嚴ならしめたり。要するに漢中は曹劉必争の地なり、是れ曹は蜀を抑へんが爲め、劉は蜀の領有を確實ならしめんが爲めなり。

法正玄徳に説きて曰く「曹操一舉にして張魯を降し漢中を定む。此の勢によつて以て巴蜀を圖らす。夏侯淵張郃を留めて屯守せしめ、身は遽に北還す。此れ其の智の及ばざるに非ずして、力の足らざるなり。必ず内憂の偪らんとするものあるが故のみ。今淵と郃との才略を計るに、國の將帥たるに堪へず。衆を擧げて進討すれば、必ず之に克つべし。之に克つの日、農を廣くし、穀を積み以て隙を窺はし、上は以て寇敵を傾覆して、王室を尊獎すべく、中は以て雍涼を蠶食し、境土を廣拓すべく、下は以て要害を固守し持久の計を爲すべし。是れ蓋し天の我に與ふるところ、時失ふべからざるなり」と。此の言蜀の爲に謀りて、頗る機宜に適したるものなり。玄徳之に従ひ、孔明も之に同意したり。

（三）玄徳漢中を

取る

建安二十二年の冬、玄徳は諸將を率ゐて兵を漢中に進めたり。操も亦都護將軍曹洪を遣はし、淵等と力を協せて之を拒がしむ。

翌二十三年玄徳は陽平關に屯して夏侯淵張郃徐晃等と相拒ぎしが、兵力乏しきを以て急書して益州の兵を發す。時に孔明は蕭何の任に當りて、成都に留まりしが、出兵の可否を以て、從事楊洪に問ふ。洪曰く「漢中は益州の咽喉なり。存亡の機會なり。若し漢



荊州と漢中

中なければ則ち蜀無し。此れ家門の禍ひなり。兵を發すること何の疑かあらん』と。事忽ち決す。

孔明何ぞ漢中の利害を知らざらん。又何ぞ獨斷兵を發するの權なきに苦しまんや。唯末だ蜀に入りて日猶ほ淺きを以て、殊更に洪に問ふて事を決したるものなるべく、以て其の慎重荷もせざるの用意を見るべきなり。且つ其の人材を擧ぐるに急なるや、直に洪を以て蜀郡の太守となし、又洪が推擧したる何祗といふものをも廣漢の太守に任せしかば、益州の志士皆悦服して、其の用を爲すを樂しむに至れり。

孔明は此の如き用意を以て成都に留守す。玄德固より内に憂ふる所なきなり。此の年九月、曹操自ら長安に來り、漢中の魏軍を督勵せしが、定軍山の戦には蜀の驍將黃忠、敵將夏侯淵を破つて之を斬り、魏軍の膽を寒からしめたり。よりにて曹操も亦長安を出で、漢中に入り、玄德と相持す。玄德曰く「曹公來ると雖も能く爲すなきなり。我れ必ず漢川を有たんと」。嶮を守りて鋒を交へず。魏軍は兵士の散亡するもの多かりしかば、操は遂に漢中を放棄して兵を退ぞけ、玄德

全く此地を得たり。

昔し高祖は此處に起りて天下を統一せり。漢中は漢家に取りて吉祥の地なり。依りて建安廿四年秋七月、玄德は自ら漢中王と稱し、壇場を沔陽に設けて即位の禮を行ひ、子劉禪を王太子と爲し、魏延を鎮遠將軍に任じて漢中太守を兼ねしめたり。而して後成都に還り、又大に諸將の官職を進む。凡そ左の如し。

許靖	太傅
法正	尙書令
關羽	前將軍
張飛	右將軍
馬超	左將軍
黃忠	後將軍

此の他猶ほ位を進むるもの多し。

益州據有のことは、茲に完成せられたり。玄德、孔明が事業の一段落を得たりといふべし。今試に三國の人口を比較すれば

魏 三千二百萬口

吳 五百五十萬口(荆州猶ほ關羽の手に在り。算せず。)

蜀 一千一百萬口(荆州を領し未だ交州を得ず)

是れ後漢書郡國志によりて、其の大數を打算したるものなり。吳は最小にして魏は最大蜀吳を合するも猶ほ魏に及ばざること遠し。故に二國の聯合は自然の勢ひなり。地の廣狹につきていへば、魏吳蜀相次ぐべし。益州は地域大ならざるも戸口繁く、且つ頗る殷富なりし所以のものは久しく中國の兵亂にかゝらざりしが故なり。即ち一州と雖も亦勢を爲すに足れり。所謂三分の策に於て玄徳孔明が得たるところは其の實質此の如きものにてありしなり。然れども三分割據は勿論玄徳孔明最終の目的に非ず。本來漢賊は兩立すべからず。蜀吳を連ねて魏を倒し漢業を興復するこそ其の本志なれ。

第八章 美髯公の末後

(一) 呂蒙謀主として荆州を圖る

漢中の曹劉二氏に於けるが如く、荆州は孫劉二氏必争の地なり。曾て玄徳の蜀に入るや、孫權は「猾虜詐を挟むこと此の如し」と罵りて遂に兵馬相見ゆるに至りしが、一旦平和に歸したるは既に前章に於て之を述べたるが如し。然れども其の平和は實に一時の休戦なりき。

建安二十四年、魯肅死し、呂蒙之に代はりて陸口に屯するや、常に思へらく、關羽もとより驍雄にして兼併の心あり。且つ吳の國の上流に居る。其の勢ひ久しうし難しと。密に孫權に語りて曰く「羽は君臣共に其の詐力を矜り所在反覆す。腹心を以て待つべからざるなり。今、羽が未だ東向せざる所以のものは至尊聖明にして、蒙等尙ほ存するを以てなり。今強壯の時に於て之を圖らずして、一旦僵仆せんか。又力をのべんとするも其れ得べけんや」と。

權曰「今先づ除州を取りて、然る後羽を取らんと欲す、如何」
蒙曰「今日、除州を取らば、操は後旬必ず來りて争はん。七八萬人を以て之を守ると雖も、猶ほ當に憂を懐くべし。羽を取りて全く長江に據るに如かず。形勢益々張りて守り易きなり」

權其の言に従ひ、呂蒙と共に關羽を滅ぼして荆州を取るの策を講ずるを怠らざりき。權また曾て使を羽に遣はして其の子の爲に婚を求めたるに、羽使者を罵しりて之を許さず。權大に之を怒りたることあり。今や呂蒙を謀主として羽を取るの計をめぐらすに汲々たり。荆州危しといふべきなり。而して時機遂に來れり。

(二) 關羽大に兵を中原に出す

建安二十四年秋、玄徳が漢中王の位に即くと殆んど同時に關羽は大舉して北征の師を起したり。糜芳に江陵、傅士仁に公安を守らしめて、羽自ら兵を進め、先づ樊城を攻めたり。城は魏將曹仁が守る所にして、左將軍于禁、立義將軍龐徳と

の馬超は別に樊北に屯したり。偶々大霖雨ありて漢水溢れ平地水深きこと數丈に及びしかば、于禁等七軍皆没したり。禁は諸將と共に高きに登りて水を避け



蒙 呂

羽は大船に乗じて之を攻む。禁等窮迫して皆降りたれども、龐徳獨り堤上に在りて力戰、半日矢盡きて短兵相接す。徳戰つて益々怒り、氣加はりて愈々壯なり。羽また之を攻むること急にして、吏士盡く降伏せしかば、徳は船に乗じて曹仁が營に至らんとせしが、般覆りて遂に羽の爲に捕はれたり。羽曰く「卿が兄は漢中に在り。我れ卿を以て將と爲さんと欲す。早く降らすして何をかせん」と。徳罵しりて曰

く「堅子何ぞ降をいふや、魏王帶甲百萬、威天下に振ふ。汝劉備は庸才のみ、豈に

能く敵せんや。我れ寧ろ國家の鬼となるも、賊の將たらず」と。羽怒りて之を斬り、急に曹仁が樊城に逼る。

樊城は要害無雙なれども、水溢れて城の沒せざるもの僅に數板二尺也なり。曹仁辛ふじて之を守る。荊州の刺史胡修、南郡の太守傅方みな羽に降りたるのみならず、陸渾の孫狼等また亂を爲して羽に應せしかば、美髯公の武威中國を震蕩せしめたり。

曹操大に恐れ許都を徙して羽の銳鋒を避けんと議するに至れり。司馬懿、蔣濟等操に説きて曰く「劉備、孫權外は親しくして内は疎なり。關羽が志を得るは必ず權の願はざる所ならん。人をして權に勸め羽の背後を襲はしめ、江南を割きて以て權を封ずといはしめば、樊城の圍み自ら解くべきなり」と。操大に喜びて其の言に従ふ。

三 吳人關羽の背後を襲ふ

司馬懿の言は真に蜀吳の關係を道破し得たるものなり。羽が兵を出して樊

城を攻むるや、呂蒙上書して曰く「羽、樊城を討ちて多く備兵を留む。必ず蒙が其の後を圖るを恐るゝが故なり。蒙常に病あり。乞ふ士衆を分ち、建業に還り病を治すといはん。羽之を聞かば、必ず備兵を撤し、盡く襄陽に赴かん。然る時大軍江に浮びて晝夜馳せ上り、其の空虚を襲はば、則ち南郡下すべく、羽擒とすべきなり」と。乃ち病篤しと稱し、建業に歸る。

呂蒙下りて蕪湖に至る。陸遜、蒙に謂つて曰く「關羽、境を接す。如何ぞ遠く下る。」蒙曰く「我れ疾篤し」遜曰く「羽、其の驍氣に矜り、人を凌轢す。始めて大功ありて意驕り志逸す。但し北進を務めて未だ我に疑ふ所なし。若し病ありと聞かば、益々備へ無からん。今其の不意に出づれば、自ら擒制すべきなり。下りて至尊に見えなば、宜しく計をめぐらし給へ」蒙曰く「羽、素より勇猛にして敵すべからず、且つ既に荊州に據りて恩信大に行はる。加ふるに今大功を樹て、勢ひ益々盛んなれば、未だ容易に之を圖ること能はざるなり」と。

呂蒙建業に至る。孫權問ふて曰く「誰か卿に代はらしむるものぞ」蒙對へて曰く「陸遜意思深長にして、才重きを負ふに堪へたり」。權乃ち陸遜を召して偏將

軍右都督に任じ、蒙に代りて陸口に屯せしむ。

陸遜書を關羽に送りて、盛に其の功を歎美し、深く自ら謙抑せしかば、羽は意大に安く、次第に兵を撤して之を樊城に集めたり。此の如くにして、吳人の陰謀は次第々々は成熟したり。

孫權遂に呂蒙を大督として關羽を襲はしむ。羽は樊城を攻むれども未だ抜くこと能はず。魏將徐晃等新に來りて樊城を救ひ、羽と戰ふ。時に羽は吳人が荆州を襲はんとする企てある由を聞き、心大に惑ひ、遂に圍を撤して退く。

呂蒙は尋陽に至りて、盡く其の精兵を舟中に伏せ、白衣のものに櫓を操らしめ、商賈の服を作さしめて晝夜兼行し、荆州に入る。江陵の守將糜芳、公安の守將傅士仁、みな羽が常に己れを輕んずるを憤りしが、呂蒙書を送りて之を招くに及び、傅士仁先づ降り、糜芳亦次で降りぬ。蒙は江陵に入りて、魏將于禁を釋放し、關羽及び將士の家族を得たれども、之を慰撫して害を加ふる所なく、軍令肅然たり。幾程もなく孫權自ら江陵に入りて諸將を督したり。

關羽は南郡既に敗れたるを聞き、退きて守る所なきを以て、西して麥城に入る。

然れども將士多くは散亡して、勢ひ支ふべからず。餘儀なく城を棄て、走る。從兵僅に十餘騎なり。孫權は朱然、潘璋に命じて關羽が走路を斷たしめ、遂に羽及び其の子平を章郷に捕へて之を斬りぬ。嗚呼運命の轉變は掌を反すよりも速かに人情の險なるは山河の險なるにも勝れり。耿々たる赤心、赫々たる武威、馬を荆州に立て、天下を睥睨し、能く奸雄の膽をして寒からしめたる美髯將軍の末路亦憐れむべきに非ずや。

(四) 荆を貸したりといふは非なり

建安十四年以來、凡そ十年に互りて、孫劉二氏が葛藤の源をなしたる荆州は、是に於て吳人の手に歸し、同時に深仇たりし曹孫二氏は、一變して好を通ずるに至りぬ。離合彼此は亂世の常なり。深く怪しむに足らずと雖も、吳人は何の名ありて荆州を襲ひたるか。彼等は言ふ。荆州もと我の玄德に貸すところ而して、玄德之を返へさず。是れ關羽を襲ふ所以なりと。然れども此の言の非なることは趙翼の筆によりて遺憾なく辯析せられたり。曰く

荆州を借すの説は、吳人事後の論より出づ。當日の情事にあらざるなり。中略
夫れ借すとは、本我が所有の物にして、之を人に假與するなり。荆州は本劉表
の地にして、孫氏の故物にあらず。操が南下の時に當りて、孫氏が江東の六郡
方さに自ら保つ能はざるを恐る。諸將皆權に勸めて操を迎へしむ。權獨り
願はず。會々備が諸葛亮を遣はし來りて好を結ぶあり。權遂に備によりて
操を拒がんと欲す。其の時唯操に敵するを求むるのみ。未だ敢て荆州を得
るを冀はざるなり。亮の權に説くや、權即ち曰く、劉豫州にあらずんば操に敵
すべきものなしと。乃ち周瑜程普等を遣はし亮に隨つて備に至らしめ力を
併せて操を拒ぐ。是れ且つ備を以て操を拒ぐの主となし、己れは従たらんと欲
するなり。亮又曰く、將軍能く豫州と心を同じくして操を破らば、則ち荆吳の
勢ひ強くして鼎足の形ち成らんと。是れ此の時早く三分の説あり。權に乞
ひ荆州を取つて之を借るに非るなり。
赤壁の戰、瑜、備と共に操を破る。華容の役、備獨り操を追ふ。其の後曹仁を南
郡に圍むや、備も亦自ら行間に在り。未だ嘗て獨り吳の力に出で、備は坐な

がらに其の成を享けたるにあらざるなり。曹を破るの後、備京に至りて權を
見る。權妹を以て之に妻はす。瑜密に疏して、備を京に留めんと請ふ。權納
れず。以爲らく正に英雄を延撃すべしと。是れ權が備の荆州に在りて以て
屏蔽を爲さざるを恐れたるなり。操が走りて華容の嶮に出づるや、喜んで諸
將に謂つて曰く、劉備は吾が儔なり。但計を得る少しく晚きのみと。是れ操
が指數する所の者は、惟れ備にして、未だ嘗て權に及ばざるなり。程昱魏に在
り。備が吳に入るを聞く。論者多く、以爲らく、權必ず備を殺さんと。昱曰く、
曹公天下に敵なし。權當る能はざるなり。備、英名あり、權必ず之を資して以
て我を禦がんと。是れ魏の人も亦唯備を指數して、未だ嘗て權に及ばざるな
り。

即ち兵力を以て論せんに、亮初めて權に見えて曰く、今、戰士還るもの及び關羽
が精甲共に萬人、劉琦の戰士亦萬人に下らず。而して權が遣はす所の周瑜等
の水軍亦三萬人に過ぎず。則ち備に十倍するにあらざるなり。且つ此の時
劉表の長子琦、尙ほ江夏に在り。曹を破るの後、備即ち琦を表して、荆州の刺史

となす。權未だ嘗て異詞あらず。荆州はもと琦の地たるを以てなり。時に又南四郡を征す。武陵長沙桂陽零陵皆降る。琦の死するや群下備を推して荆州牧と爲す。備即ち亮をして零陵桂陽長沙の三郡を督せしめ、其の租賦を收めて以て軍實に供せしむ。又關羽を以て襄陽太守、盪寇將軍と爲して江北に駐せしめ、張飛を宣都太守、征虜將軍と爲して南郡に在らしめ、趙雲を偏將軍と爲して桂陽太守を領せしめ、將を遣はして分駐す。惟れ備の指揮する所に於て初めより孫氏に關白せず。本孫の地にあらざるを以てなり。故に備は必ずしも權に白さず。權も亦來りて備を沮まざるなり。其の後三分の勢己に定まるに及びて、吳人赤壁の役は實に吳の兵力を藉るを追思し、遂に荆州は應に吳の有たるべきを謂ふ。而して備之に據る。始めて荆州を借すの説あり。抑々思ふに力を合せて操を拒ぐや固より權に資するなり。權もまた備に資するあらずや。權是の時但自ら危亡を救ふ。豈に早く荆州を取るの志あらんや。羽は魯肅に對へていへり。曰く、烏林の役、左將軍寢ねて介を脱せず。

力を戮せて曹を破る。豈に徒勞一塊の土なきを得んやと。此れ不易の論なり。其の後吳蜀三郡争ひ旋つて即ち和を議し、湘水を以て界とし、長沙江夏桂陽と分ちて吳に屬せしめ、南郡零陵武陵を蜀に屬せしめたり。最も平允なり。而るに吳の君臣羽の北伐を伺ひ、荆州を襲ふて之れを有し、反つて一に荆州を借すの説を捏造して以て其の得べき所を取りたるを見す。此れ則ち吳の君臣の狡詞詭説にして、荆州を借すの名遂に流傳して今に至り、并せて一談を爲し、牢として破るべからず。轉々其の曲の蜀に在るものゝ如し。此れ耳食の論なり。(史記)

趙翼の言は誠に痛切明快にして、世の謬論を打破し去るに足れり。荆州を借すの説は、吳人の捏造に出でたること疑ひなきなり。權や資性英果なるも、與に王道を談すべきの人にあらず。其の器實に一地方の覇たるに過ぎざるなり。彼れ或る時陸遜と、ともに周瑜魯肅呂蒙の人物を評して曰く「瑜は雄烈にして膽略を兼ね、遂に孟德(曹操)を破りて、荆州を開拓す。遼焉として儔ひ寡し。肅は瑜に

り。後孟德荆州を降し、勢ひに乗じて東に向ふや、群臣多く之を迎へんとす。肅即ち之を駁し、孤に勸めて急に周瑜を呼び遂に操を逆撃せしむ。此れ二快なり。後、吾に勸めて玄德に地を借すは是れ其の一短、而かも其の二長を損するに足らず。故に孤、其の短を忘れて其の長を貴び、常に之を鄧禹に比するなり。呂蒙少なる時、孤謂ふ劇易を辭せず、果敢にして膽あるのみと。身長大なるに及びて、學問開益し、籌略奇至す。周瑜に次ぐべし。たゞ言議英發の之に及ばざるのみ。關羽を取るを圖るは、肅に勝れり。肅曾て孤に答へて曰く、帝王の起るは驅徐あり。羽は忌むに足らず」と。これ肅が内に辨すること能はずして、外大言を爲すのみ。孤また之を恕して、苟も責めざるなり。然れども其の軍を作すや、屯營失はず、令行はれ、禁止み。部界廢負なく、路遺ちたるを拾ふなし。其の法亦美なりといふべし」と。

此の言以て權が志を見るに足る。思ふに瑜と蒙とは其材武以て覇者を佐くるに適すべく、肅獨り大略に通ず。以て王者を佐くべきか。彼の覇たるべき權に説くに王道を以てしたり。政と兵とを整備し、大義によりて動かば、帝王の業

成るべし。關羽忌むに足らずといふ。王者を佐くるは此の如くにして可なり。然れども權を佐くるには不可なり。軍を作すに號令嚴明、部界に廢負なく、路遺ちたるを拾はざるは王者の師なり。然れども覇者は戰つて敵を破り、兵を殺し陣を陥るゝにあらざれば功と爲さざるなり。權が關羽を圖るは呂蒙魯肅よりも勝れりといひしは之が爲なり。王者は不義に動かす。覇者は唯事功に急なり。權が蒙を以て籌略奇至すと稱贊する所以亦茲にあり。其の策略義、不義、正、不正は問ふ所にあらず。見よ蒙が羽を圖るを、自ら病と稱して羽を欺き、其の兵は商賈の如くにして荆州に入り、襲ふて羽の部將を降したり。人は蒙の功を以て大なりといふ。而して其の大瑕を殘せるを知らざるなり。何ぞや。他なし。吳は天下義士の同情を失して、唯魏の謀臣の嘲笑を買ひ得たるに過ぎざるなり。張溥論じて曰く

呂蒙一鼓して戰ひ克つ。權に於ては未だ忠ならざるにあらず。惜むらくは其れ未だ大義を明らかにせざるなり。

又曰く

權の父兄、世々漢に忠なり。今蜀を連れて操を拒ぎ、師を令して夷を翦つは、獨り方伯の義のみにあらず、亦先君の志なり。權、魏の離間を信じ、蒙は佐くるに詐譎を以てす。荆州に克つと雖も、反つて魏の篡を成せり。云々
 言稍々極端なるが如きも、一面の事理を道破し得たるものなり。權が彼の土地と、彼の兵力とを以てして、三國の舞臺上常に客位に立てる、亦所以なきにあらざるなり。

(五) 荆州を失ふの罪何くに歸するか

吳人を責むることは暫く措かん。吾人は何故に玄德孔明が關羽の後援をなさざりしかを怪しむ。荆州を失ひたるは、羽の罪にあらずして寧ろ玄德孔明の過にあらざるか。王鳳洲曰く、

關羽の荆州を失ふや、以て羽の失となす。余以爲らく羽の失に非ず。而して昭烈(玄德)の失なり。昭烈の失は羽に委して以て操と角せしめ、之が後援を爲さざるに在り。其の吳に備へざるは之に次ぐ。(綱鑑)

羽が七八月の交に兵を起して、十二月に亡ぶるに至るまで、玄德孔明敢て其の後援を爲さず。當時蜀の事情を察するに、北方漢中のこと漸く定まりて、玄德王位に登りたる際なれば、羽の後繼を爲し難きにもあらざるべし。而して其の之を爲さざりしは何の故ぞ。羽と操とを角せしめて其の必勝を期したるか。少くとも羽の危きを悟らざりしか。吳人の心を信じて疑はざりしか。孫權が蜀を猜忌するの深きを知らざりしか。是れ皆非なり。たとひ玄德は茫乎として時宜に適するの處置を誤ることありとしても、能く彼を知り、己を知り、廟算神妙、未だ嘗て遺失なき孔明に於て、羽を救ふの道を講せざりしは、其の何故なるかを知らるに苦しむ所なり。恐らくは玄德孔明が自ら羽を援けて中原を争ふこと能はざるのみならず、張飛、趙雲等に精兵を興へて吳に備ふるすらも爲し難きの事情有りたるならんか。吾人は幾度か書を繙き、幾度か之を思へども、未だ其の事情を見出すこと能はざるを悲しむ。若し此の事情なくして、羽を敵に委せしならば、荆州の失は羽の罪にあらず。玄德の罪にもあらず。孔明實に其の責を負はざるべからず。所謂智者も千慮にして一失したるものか否か。

孔明の志は荆益を連ねて然る後に中原を略し、漢業を復興するに在り。然るに荆州を有する時は未だ蜀を得ること確實ならず。漸く蜀の定まる時は、既に荆州を失ふ。是れ實に非常の損失なり。かるが故に、後年大舉して魏を伐つに當り、蜀の東方の要路は既に閉ぢられしを以て、荆州より直に中原に突出して魏の都城に通り、一大快戦を試むるを得ず。唯長安を望んで北出するの他に道なきに至りたるなり。惜むべしと爲す。

第九章 正閏論

(一) 曹丕漢室を篡ふ

關羽を滅ぼしたる呂蒙は未だ封を受くるに及ばずして同月に病死したり(建安二十四年)。年四十有二。孫權之を哀痛すること最も深く、爲に守冢三百家を置きたり。而して曹操も亦僅に月を踰えて(建安廿五年一月)洛陽に病死す。年六十有六なり。操や策略横縦實に三國の活劇時代に於ける主動者たるに慚ぢず。玄徳畢世の

好敵手にして、且つ眞知已なりき。今其の歿するに及びて、天下轉々寂寥たるを覺ゆ。陳壽は之を評して曰く

漢末天下大に亂れ、雄豪並び起る。而して袁紹四州に虎視し、強盛敵無し。太祖籌を連らし、謀を演べて、宇内を鞭撻し、申商の方術を摯り、韓白の奇策を該ね、官は方に材に授け、各其の器に因る。情を矯め、算に任じて、舊惡を念はず。終に能く皇機を統御し、克く洪蒙を成すものは、惟れ其の明略最も優れたればなり。抑、非常の人、超世の傑と謂ふべし。

又魏書に曰く、

太祖(曹操)自ら海内を統御し、群醜を芟夷し、其の軍を行り師を用ふる、おほよそ孫吳の法に作る。而して事に因りて奇を設け、敵を誘き勝を制すること、變化神の如し。自ら兵書十餘萬言(所謂孟德新書)を作る。諸將征伐には皆新書を以て事に従ふ。(中略)虜と對陣して意思安閑、戦を欲せざるが如し。然れども機を決し、勝に乗するに及びては、氣勢盈溢す。故に戦ふ毎に必ず克つ。軍に幸勝なし。人を知りて能く察す。(中略)雅性節儉、華麗を好まず。云々。

操の長所を殆ど過度に列記せられたり。然れども曹瞞傳に據れば「太祖人となし、佻易にして威重なし。倡優側に在り。常に日を以て夕べに達す。(中略)人と談論するや、戲弄言誦して、盡く隠す所なし。歡悦大笑するに及びては、頭を以て杯案の中に投し、肴膳皆巾幘を沾汗するに至る。其の輕易此の如し」といひ、更に「法を持すること峻刻諸將計畫ありて、己れに出づるものに勝るあれば隨て法を以て之を誅す。故人舊怨また皆餘す無し」といへり。思ふに前後の兩者を併せ察して奸雄の面目を知るべきなり。

曹操薨じて其の子の丕位を繼ぎ丞相魏王たり。建安廿五年十月、曹丕遂に漢の帝位を篡す。此の年黃初と改元したり。

今漢室の亡びたるは、何人も更に驚く所なかるべし。董卓より以來、漢室は其實に於て既に已に亡びたりし也。曹丕は即ち獻帝を廢して殘骸を葬りしのみ。

(二) 玄徳漢帝の位に登る

曹丕篡奪の報の蜀に達するや、玄徳之が爲に喪を發し、諡して孝感皇帝といふ。

時に劉豹、向舉、張裔、黃權等の諸士、上書して符瑞を言ひ、漢中王の帝を稱することをお勧め。玄徳許さず。孔明曰く、

昔し吳漢、耿弇等初めて世祖(光武帝)を勸めて皇位に即かしむ。世祖辭讓すること前後數四なり。耿純進んで曰く、天下の英雄、喁々として望むところあるを冀ふ。如し議に従はずんば、士大夫各歸りて主を求む、公に従ふものなかるべしと。世祖、純が言の深く至れるを感じ、遂に之を然諾す。今曹氏漢を篡ひ、曹氏、主を無にす。大王は劉氏の苗族にして、世を紹ぎて起る。今帝位に即くは其の宜しきなり。士大夫、大王に隨つて久しく勤苦するは、亦尺寸の功を望まんと欲すること、純が言の如くなるのみ。

と。玄徳其の理に服して、即位の意を決したり。然るに前部司馬費詩は上書して曰く、

殿下曹操父子が主に偪り、位を篡するを以ての故に、乃ち萬里に羈旅し、士衆を糾合し、以て賊を討たんとす。今、大敵未だ克たずして、先づ自ら立てば、恐らくは人心疑惑せん。昔し高祖、楚と約し、先づ秦を破るものは、之に王たらしめん

と。咸陽を屠り、子嬰を獲るに及び、猶ほ推讓を懷ふ。況んや今殿下未だ門庭を出でずして、即ち自立せんと欲するか。愚臣誠に殿下の爲に取らざるなりと。玄徳悦ばず。費詩を左遷して、部永昌從事と爲し、建安廿六年四月遂に帝位に登り、大赦して、章武と改元し、諸葛孔明を以て丞相と爲し、許靖を司徒となせり。思ふに當時の天下は固より漢の天下なり。曹操勢に乗じて天子を脅制し、國母を弑殺し、横暴を極め、其の子丕に至りて遂に帝位を篡ふ。此の際に當り玄徳が漢室の裔として、帝位に登り、其の系統を維持せんとするは、固より時宜に適したる處置なり。名正して言順ふとは是をこそいふべけれ。異論を挾むを許さざるなり。

(三) 正閏論の大要

玄徳帝位に登りて、魏と相對立せしかば、後世正閏の論起るありて、諸家の辯難攻撃甚だし。司馬溫公は曰く、

天の烝民を生ずる、其の勢ひ自ら治する能はず。必ず相共に君を戴いて以て

之を治む。苟も能く暴を禁じ、害を除き、以て其生を保全し、善を賞し、惡を罰し、亂に至らざらしむ。斯れ之を君といふべし。(史山按、支那の所謂君王とは此の如く目すべし。)是を以て三代の前、海内の諸侯何ぞ雷に萬國のみならんや。民人社稷を有するもの、通じて之を君と謂ふ。萬國を合して之に君たり。法度を立て、號令を班ち、天下敢て違ふものなき、乃ち之れを王と謂ふ。王徳既に衰へ、強大の國能く諸侯を帥む、以て天子を尊ぶもの、則ち之を霸といふ。故に古へより天下無道、諸侯力争し、或は曠世王者なきもの、固より亦多し。秦書を焚き、儒を坑にし、漢興りて學者始めて五徳生勝を推し、秦を以て閏位と爲す。木火の間に在り。霸にして王たらず。是に於て正閏の論興れり。漢室顛覆して三國鼎峙し、晋氏馭を失して五胡雲擾するに及び、宋魏以降は南北分治して各國史有り。互に相排黜す。南は北を謂つて索虜となし、北は南を謂つて島夷となす。朱氏唐に代りて四方幅裂し、朱邪(李存)汗に入る。之を窮新(有窮は夏を、新は漢を)に比す。運歴年紀皆棄て、數へず。此れ皆私己の偏辭、大公の通論にあらざる也。臣愚誠に以て前代の正閏を議るに足らずといへども、竊に以爲ら

く、苟くも九州を合して一統を爲さしむる能はざれば、皆天子の名ありて其の實なき者なり。華夏仁暴大小強弱或は時に同じからずと雖も、要するに皆古への列國と異なるなし。豈に獨り一國を尊獎して之を正統といひ、而して其餘は皆僭僞と爲すことを得んや。若し上より相授受するものを以て正と爲さんか。則ち陳氏何の授くる所ぞ。拓跋氏何の受くる所ぞ。若し中夏に居るものを以て正と爲さんか、則ち劉石慕容苻姚赫連(以上皆五胡の内)得る所の土は皆五帝三王の舊都なり。若し道德あるものを以て正と爲さんか。則ち蕞爾の國必ず令主有り、三代の季豈に僻王なからんや。是を以て正閔の論、古より今に及びて、未だ能く其の義に通じ、確然として移奪すべからざるものあらず。臣の今述る所は、止だ國家の興衰を叙し、生民の休戚を著はし、觀者をして自ら其善惡得失を擇び、以て勸戒と爲さしめんと欲するのみ。春秋褒貶の法を立て亂世を撥ひて諸を正に反へすがごときものにあらず。正閔の際に敢て知る所にあらざる也。但其の功業の實に據りていへば、周秦漢晉隋唐皆嘗て九州を混し、祚を後に傳へたり。子孫微弱にして播遷すと雖も、猶ほ祖宗の業を

承けて紹復の望あり。四方之と衡を争ふもの皆其の故臣なり。故に全く天子の制を用ゐて以て之に臨む。其餘は地醜にして德齊し、能く相壹にするなく、名號異らず本君臣にあらざるものは、皆列國の制を以て之を處す。彼此均敵、抑揚する所なし。庶幾くは事實を誣ひず、至公に近からん。然れども天下離析の際、歲月日以て事の先後を識さざるべからず。漢は魏に傳へて晋之を承け、晋は宋に傳へて、以て陳に至る。而して隋之を取る。唐は梁に傳へて、以て周に至り、而して大宋之を承く。故に魏、宋、齊、梁、陳、後梁、後唐、後晋、後漢、後周の年號を取りて、以て諸國のことを記せざるを得ず。此を尊んで彼を卑しめ、正閔の辨あるにあらざるなり。昭烈の漢に於ける中山靖王の後といふと雖も、而かも族屬疎遠にして、其の世數名位を記する能はず。亦猶ほ宋高祖が楚の元王の後と稱し、南唐の烈祖が吳王恪の後と稱するが如し。是非辨じ難し。故に敢て光武及び晋元帝を以て比となし、漢氏の遺統を紹ぐを得せしめざるなり。(通鑑卷六十九)

温公は先づ帝王の意義より説き起して、正閔論の起源に及び更に正閔の標準の

立ち難き所以を論じ史を記する上に於いて年月の必要上、漢、魏、晋相傳の事實により暫く魏の年號を用ふること及び昭烈を以て漢を受くるものと見做さるの意見を述べられたるなり。一篇の文辭、首尾整然として一糸紊れず。堂々たる一大文章なり。殊に「春秋褒貶の法を立て、亂世を撥ひ、法を正に反へさんとするにあらず」といはれたるは、朱子が綱目を編して、直に春秋の後繼を爲さんとするに比して、頗る對照の妙ありとす。而して之を駁する胡致堂は曰く、司馬氏は昭烈が中山靖王に於けるは、族屬疎遠にして、其の世數名位を記する能はず、是非辨じ難しとして、遂に之を抑え、漢統を紹ぐを得せしめず。則ち未だ其の去取の意を知らざるなり。諸葛公、草廬傾蓋の時、即ち玄德を稱して帝室の胃と爲す。豈に馮虛無據にしていはんや（中略）。漢の昭烈を抑退し、少しも假借せず。孔明北伐に於ても、又入寇を以て之を書す。亦獨り何ぞや。尹起莘は曰く、

陳壽三國を志してより、全く天子の制を以て、魏に予へ、列國を以て漢を待つ。故に通鑑は之に因り、魏を以て年を紀す。綱目に至りて始めて昭烈を以て獻

帝の後を承け、漢の遺統を紹がしめ、春秋の義を取りて以て天下に示す。萬世の正論なり。

按ずるに支那の所謂帝王なるものは、其の道德或ひは其の武力を以て能く天下を統一したるもの、稱呼なり。秦も可なり。漢も可なり。いづれも皆正統の天子たるべし。古來革命頻々として行はれ、王統の轉變殆ど數へ難し。故に天下は強ち周の天下にもあらず。秦或は漢の天下にもあざるなり。されば國內分裂して、王といひ帝といふもの、數國相對立せる時、何を標準としてか正閏を辨せん。是れ實に溫公の言の如く、確然たる議論の立ち難き所以なり。而かも猶ほ正閏の論あるは多少の理由あり。請ふ之を語らん。

古へは堯舜に譲り、舜禹に譲りて、盛徳を天に薦めたり。是れ恐らくは漢族の理想なるべし。然れども人文漸く開け、社會の秩序亦次第に整ふに及びては、子として親に孝に、臣として君に忠ならざるべからず。是れ即ち社會の秩序を維持する所以なり。禹王の子啓よりして、天子世襲の風の行はるゝに至りたる亦之が爲めなり。爾來漢族の胸中には二種の矛盾せる思想を生じて、往々事實の

上に發現する所なり。例へば暴君を討つて民を安んじ、天下を平かならしむるは、一大美舉なり。紂を討ちたる武王の聖を以て稱せらるゝ所以なり。『臣として君を伐つ、忠といふべきか』此の一言を以て武王を諫めたる伯夷、叔齊も亦聖人なり。儒家は此二種の思想は矛盾ならずと辯ずるも、恐らくは曲論なるべし。秩序の上より見れば臣として君を伐つは破壊者なり。故に年を経るに従つて武王の行動よりも、伯夷の思想は其の勢力を加へたり。見よ、周の天下は有名無實にして（春秋時代）猶ほ五百年（全體では）を保ち得たるにあらずや。周公が禮を定め樂を制したるは上下の秩序を正し、且つ周室の血統を永遠に維持せんとしたるに外ならず。斯の如き教訓の次第に深く人心に感染するや、革命的なる漢族の胸中にも血統を重んずるの念の自ら湧き出づるあり。周の臣は周に忠に、漢の臣は漢に忠ならざる可らず。漢室は王莽の爲に一旦奪はると雖も、劉秀（光武）同族の代表者として名望を收め、漢室を復興するを得たり。血統の重きをなせる好箇の實例なり。漢末に至り、天下大に亂れて群雄の四方に角逐するや、諸葛亮が曹に仕へず、孫に属せず、荊州の食客たる劉備を佐けて、天下に大義を唱へた

るも亦同一の旨趣に出づ。随つて曹も帝、劉も帝として相對立せんに、孰れが正統の天子なるかは、自ら生すべき問題なり。曹を正統なりとするは、革命的なる本來の思想なり。劉を正統とするは、伯夷以來次第に養成せられたる崇忠崇血統の思想なり。二個の思想が三國正閏問題に於て發露し、衝突せるものなり。温公は前者を代表し（少しく妥當を）朱子は後者を代表す。正閏論の意義大略此の如し。吾人は進歩したる社會に於ては、秩序の整備を要求し、臣下の忠節を要求し、王者の血統の重んずべきことを要求す。故に三國正閏を定むるの要ありとすれば蜀を以て正統の天子なりと斷するものなり。

第十章 秭歸の敗軍

（一） 玄徳大に吳を征す

魏の明帝或時、群臣に問ふに、劉備が關羽の爲に報復の師を出すべきや否を以てす。人々皆曰く、『蜀は小國にして名將は唯羽あるのみ。羽死し軍破れて國內

憂懼す。また出づるに由なし」と。獨り侍中劉曄曰く「蜀は狹弱なりと雖も、備の謀は威武を以て自ら強ならしめんと欲す。勢ひ必ず兵を用ゐて以て餘りあるを示さん。且つ關羽は備と義に於て君臣たるも恩に於ては父子の如し。羽死して爲に軍を興し敵に報ゆること能はずば、終始の分に於て足らず」と。

會て曹操を防がんが爲め、堅く同盟したる孫劉二氏が、關羽襲殺のことよりして相敵視するに至りたるは、魏よりして之を見る。頗る興味ある問題なりとす。蜀は地偏僻にして國家の基礎未だ堅からずといへども、智士劉曄の如きは必ず玄徳が復讐の兵を擧ぐべきことを豫言したりき。

果して玄徳は兵を起して吳に報ゆべきや否や。是れ蜀に取りては一大事なりとす。單に感情を以て動くべからず。又唯利害の打算にのみよりて決すべからざるなり。玄徳は關羽を悼むること深く、同時に吳人の反覆を憤ること甚だしく、直に兵を擧げて孫權を撃たんとす。趙雲諫めて曰く「國賊は曹操なり。孫權に非ず。若し先づ魏を滅ぼさば則ち權自ら服せん。今操は身斃ると雖も、其の子丕篡立す、當に衆心に因りて早く漢中を圖り、河渭の上流に居して以て

凶逆を討つべし。關東の義士必ず糧をつゝ、馬に策うちて以て王師を迎ふべし。魏を後にして先づ吳と戰ふは不可なり。兵勢一度交はらば、卒に解くべからず。策の上なるものにあらざるなり」と。

其の他群臣諫むるもの甚だ多し。玄徳皆聽かず。廣漢の處士秦宓は天時必ず不利なるを陳べて、出兵の非を言ひ爲に罰せられて獄に下されたり。玄徳の意志確固として變すべからず。遂に自ら兵を率ゐて吳を伐つこととなりぬ。而して孔明は之を諫むることなくして已めり。世人多く之を奇しむ。

思ふに趙雲の言は、大勢を明らかにし、大策を斷するものなり。而して玄徳聽かず。孔明諫めず。是れ何の故ぞ。張溥曰く、

三人（玄徳、關羽、張飛）は出入同じく、義を擧ぐる同じく、死亡も亦同じ。君臣父子の誼斯に極れり。急難相救ふ。人力を以て争ふべきにあらざるなり。意ふに諸葛亮の言はざる亦是が爲なり。云々。

單に利害を以ていへば趙雲の言大に善しと雖も、情誼に於ては實に堪ゆべからざる所あり。且つ吳人前日の好を捨て義に背き關羽を襲殺したるに、猶ほ唯々

として通好するあらば、玄徳何の面目ありてか、天下に見えん。成敗は他日の論なり。吳の罪は問はざるべからず。孔明の諫めざりし所以亦こゝに在るか。玄徳兵を擧ぐるに際し、張飛をして閬中より江州に來り會せしむ。發するに臨みて飛は其の部將張達、范疆の爲に殺されたり。二人は首を携へて吳に走りぬ。玄徳は飛が營都督より上表あるを聞きて曰く「噫、飛死せり」と。飛は雄壯威猛、關羽に次ぐ。魏の謀臣程昱等、皆羽飛を稱して「萬人之敵」と爲せり。羽は善く卒伍を遇して士大夫に驕り、飛は君子を愛敬して、小人を恤まず。故に玄徳常に之を戒めて曰はく「卿は刑殺既に過ぎたり。日々健兒を鞭ちて左右に在らしむ。是れ禍を取るの道なり」と。飛なほ改めず。遂に部下の手に殺さる。關羽が復讐の爲に師を出すに當り、又張飛を失ふ。玄徳の心中如何。

(二) 吳の陸遜玄徳を破る

章武元年秋七月、玄徳自ら諸軍を督して吳に入り、孔明は成都に留守す。孫權使を遣はし來りて和を請ふ。許さずして兵を進めたり。權は鎮西將軍陸遜を

以て大都督となし、朱然、潘璋、宋謙、韓當、徐盛等の諸將を率ゐる兵五萬を以て之を拒ぐ。

吳の將李異、劉阿等、巫及び柝歸に陣せしが、蜀の將吳班、馮習攻めて吳軍を破り、玄徳の總軍四萬、柝歸に進みたり。

孫權頗る懼るゝ色あり。八月、使を魏に遣はし、臣と稱し、辭を卑くして書を上りぬ。劉曄曰く「權や故なくして降を求む。必ず内に急ならん。權さきに關羽を襲殺す。劉備必ず大に師を興して之を伐たん。外に強寇ありて衆の心安からず。又中國(魏)の往きて其の隙に乗ずるを恐る。故に地を委して降を求め、一には以て中國の兵を却け、二には中國の援を借り、以て其の兵を強くし、敵人を疑はしめんとするのみ。天下を三分して、中國は十に其の八を有す。吳、蜀各々一州を保つ。山を阻み、水に依り、急あれば相救ふ。此れ諸國の利なり。今還つて自ら相攻むるは、天之を亡ぼすなり。宜しく大に師を興し、直ちに江を渡りて吳を襲ふべし。蜀は其の外を攻め、我は其の内を襲ふ。吳の亡ぶること旬月を出でず。吳亡ぶれば、則ち蜀孤なり。若し吳の半ばを割きて蜀に與ふるも、蜀固よ

り久しく存する能はず。況んや、蜀は其の外を得、我は其の内を得るをや。文帝曰く「人、臣と稱して降る。之を伐たば天下來らんとするもの、心を疑はしむるなり」。遂に吳の降を受け、權を拜して吳王と爲せり。彼の劉曄の明敏なる驚くべきものあり。孫權の情偽を觀破して利害を陳ること之を掌に指すが如し。其の言若し用ゐられなば、吳は立ろに滅びなんとす。危しといふべきなり。二つの小者の相争ふは一つの大者に乘すべきの隙を與ふるものなり。而して事の起源は實に呂蒙が荊州の小局部に執着して、信を忘れ義に背き小功を成すに急なりしに起因す。「關羽を圖るは、呂蒙魯肅よりも勝れり」といひたる孫權の言は、其の大本を誤れるを見るべきなり。

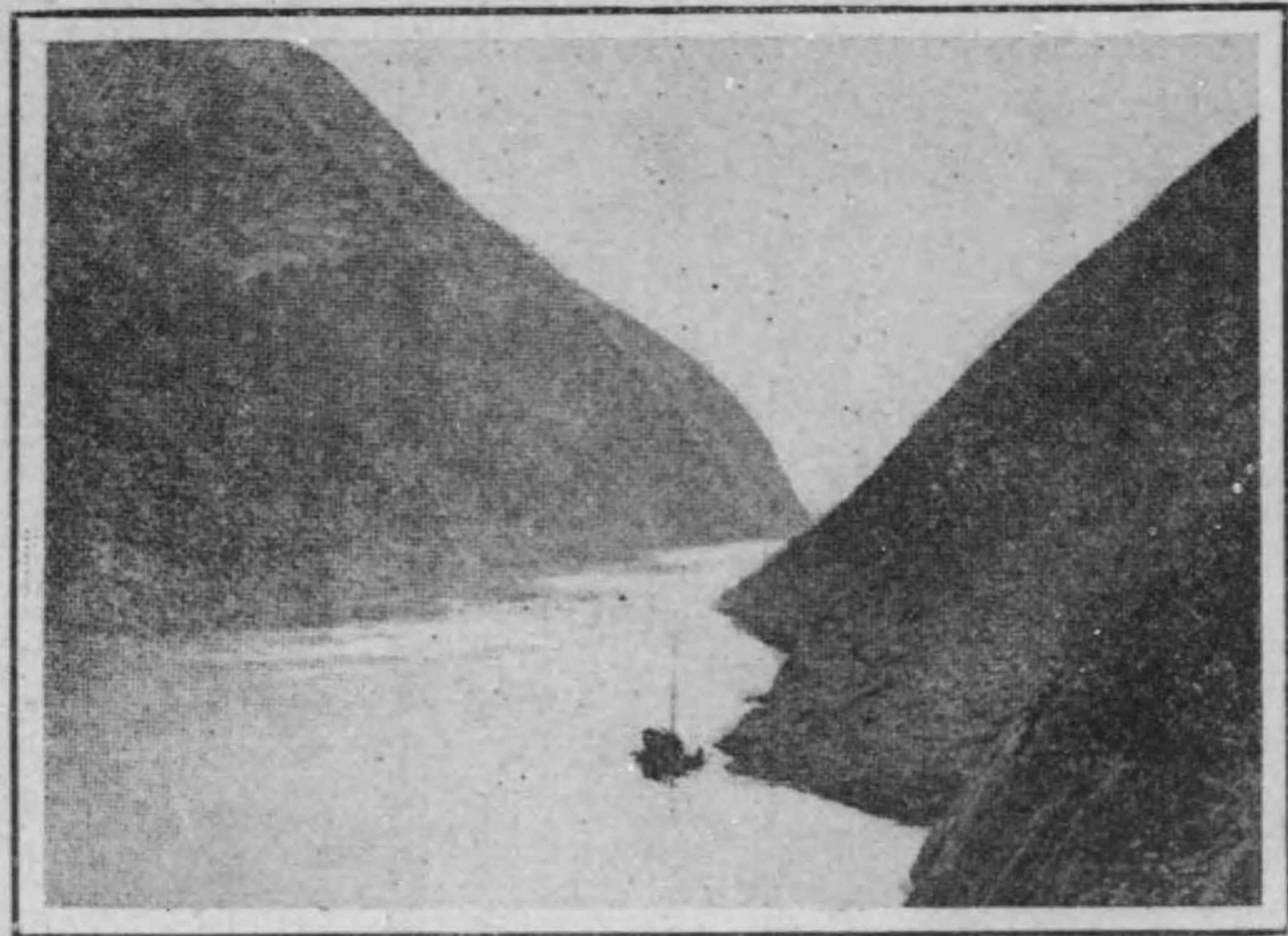
玄徳は秭歸よりして更に進んで吳を伐たんとす。黃權諫めて曰く「吳人は戰に勇なり。而して水軍は流れに沿ひ進むこと易く、退くこと難し。臣請ふ先驅を爲して以て敵に當らん。陛下は宜しく後鎮たるべし」と。玄徳聽かず。黃權を以て鎮北將軍と爲し、江北の諸軍を督せしめ、自ら諸將を率ゐて江南より山に縁り嶺を截ち、夷道の猯亭に軍す。吳の諸將皆之を撃たんとす。陸遜曰く「備軍

を擧げて東下す。銳氣始めて盛んなり。且つ高きに乘じて嶮を守る。俄に攻むること難し。之を攻めて聊か勝つことあるも猶ほ盡く克ち難し。若し不利あらば、我が大勢を損ず。是れ小事にあらざるなり。今は唯、將士を獎勵し廣く方略を施し以て其の變を觀ん。此の間は是れ平原曠野、恐らくは顛沛交逐の憂あるべし。今、山に縁りて軍を行る。勢ひ展ふるを得ず。自ら木石の間に疲れん。我は徐ろに其の敵を制せんのみ」諸將は陸遜が深意を解せず。彼を以て畏れたりと爲して之を憤りぬ。

玄徳は巫峽建平より夷陵の界に至るまで、營を連ねて數十屯を立て、馮習を以て大督と爲し、張南を以て前部督と爲し、以て吳軍を壓迫せんとす。然れども章武二年正月より六月に至るまで更に決する所なし。玄徳、試に吳班をして數千人を率ゐて平地に營を立てしむ。吳の諸將は皆之を撃たんと逸りしが、陸遜は計あるを恐れて動かざりき。玄徳は事の行はれざるを見て、豫て伏せ置きたる八千の伏兵を谷中より撤去したり。

陸遜は時に年四十思慮漸く熟して意氣また壯なり。閏六月遜、計を決して蜀

の軍を撃たんとす。諸將皆曰く「備を攻むるは當に初にあるべし。今は乃ち四五百里に入れしめ、相守りて七八ヶ月を経たり。其の諸要害、みな既に固守す。之を撃たば必ず利無からん」と。遜曰く「備は是れ猾虜、經歷に富めり。其の軍の始めて集るや、思慮精專、未だ犯すべからず。今、住まりて既に久しく、戦ひ功なし。兵疲れ氣沮む。敵を撃つは今日に在り」と。乃ち先づ一營を攻めしむ。利あらず。諸將皆曰く「空しく兵を殺すのみ」と。遜曰く「否、我已に之を破るの術を曉れり」乃ち命じて各兵に一把茅を持せしめ、火を以て敵營を攻め、先づ其一を陥れて勝勢成る。よりにて諸軍を一時に進めて敵營に突撃し、張南、馮習等を斬つて、其の四十餘營を破る。蜀の將杜路、劉寧等皆降る。玄徳は山に登り兵を連ねて守りしが、陸遜諸軍を驅りて之を攻むること疾風の如し。蜀の軍、土崩瓦解し死するもの萬餘人なり。玄徳夜に乗じて遁れ、僅に白帝城に入るを得たり。其の舟船器械、水歩軍資一時にして略々盡き、尸骸江を蔽ふて流る。敗形慘憺たり。玄徳大に慚悲して曰く「吾れ乃ち陸遜の折辱する所と爲る。豈に天に非ずや」と。苦悶の情想、ひ見るべきなり。



巫山映

此の役、蜀の將軍傅彤、殿軍たり。兵皆死して彤は意氣益、烈し。吳人之に諭して降れといふ。彤罵しりて曰く「吳狗、安んぞ漢將軍にして降るものあらんや」と。遂に之に死す。又従事祭酒程畿は江を泝つて退きしが、人々皆曰く「宜しく輕行すべし」畿曰く「我れ軍に在りて、敵の爲に走るを習はざるなり」と。亦之に死す。二將の壯烈、僅に蜀軍の譽れを留めたるのみ。

秭歸の敗軍は玄徳晩年の一大失策なり。是れ一には將に將たるべきものが兵に將たりし故なり。又

二つには、孔明成都に留守して、龐統ほうとう法正ほうせい既に空しく、良參謀りょうさんぼうなきに加へて、又良將軍の従ふものなかりし故なり。玄德は天下の英雄なるも、兵を率ゐて勝敗を兩陣の間に決するは、固より其の長ずる所にあらず。遠く兵を出して敵國に入る。利は速戰に在り。然るに玄德の軍を行る、緩慢くわんまんにして、疾風迅雷しやくふうじんらいの氣に乏し。營を結んで自から守るが如きは、主客の勢を顛倒したるの觀あり。魏の文帝、蜀の兵が柵を立て營を連ぬること七百餘里なるを聞き、群臣ぐんしんに謂つて曰く、「備や兵を曉らず。豈に七百里に營して以て敵を拒ぐものあらんや。原隰嶮岨げんしつけんじんを包ねて軍を爲すものは、敵の爲に擒とせらるべし。此れ兵忌なり。孫權の上事、今至らん」と。果して七日にして吳漢を破るの書至れり。文帝の敏才亦悔るべからざるものありといふべし。

孔明は尙書令しやうしょけい法正ほうせいと好尙同かうじやうどうじからずと雖も、公義を以て相重んじたり。常に正が智術を稱せしが、玄德吳を伐ちて敗るゝに當り、法正既に卒せしかば乃ち嘆して曰く「孝直かうぢく（正の字）若し在らば、必ず能く主上の東行をといめん。就きて東行せしむれば必ず傾危せじ」と。魏吳に人材の彬々たるありて、蜀には則ち缺乏けつぱふす。

孔明たとひ如何の智略ありとも一身を二分三分すること能はず。遂に陸遜をして名を爲さしめたり。

陸遜字は伯言はくげん、吳郡の人なり。年廿一にして初めて孫權に仕へて久しく世に知られざりしが、呂蒙の推薦によりて稍々重きを爲せり。玄德の蜀に入るや、孫權遜を拔擢して大都督と爲す、老將其の部下に屬するもの多くは遜に服せず。遜劍を按じて曰く「劉備は天下に名ありて、曹操の憚る所なり。今來りて疆界に在り。此れ強敵なり。諸君並に國恩を荷ふ。當に相輯睦して共に此の敵を破り、以て國家に報ゆべきなり。而るに相順はざるは何ぞや。僕書生なりと雖も、命を主上に受く。軍令常あり。犯すべからざるなり」と。諸將なほ服せざりしが大に玄德を破るに及びて、初めて其の才略を認めたり。孫權之を聞きて曰く「公は何を以て、其の初め節度に違ふ者を啓せざりしか」遜答へて曰く「此の諸將或は腹心となすべく、或は爪牙となすべく、或は是れ功臣、皆國家有用の材なり。臣竊に相如かうじゆん寇恂相下の義を慕ふて國事を濟せり」と。權大に笑つて、善しと稱す。遜は思慮周密にして、奉公の志厚く、唯兵を用ふるに長じたるのみならず、

亦理を見ることに於て頗る明かなるものあり。陳壽評して曰く「遜や忠誠懇至、國を憂ひて身を忘るゝに及ぶ。社稷の臣たるにちかし」と。思ふに周瑜以後の第一人ならんか。

玄徳、白帝城に在り。徐盛、潘璋等、競つて上表し、城を攻めて備を擒にせんと請ふ。孫權之を遜に問ふ。遜答へて曰く「曹丕、大に士衆を合し、我國を助けて備を討つと言ふも實は姦心あり。謹んで計を決し、軍を班へさん」と。吳兵は遂に白帝城に逼らずして退きたり。

第十一章 白帝城

(一) 魏吳の關係如何

玄徳敗走して白帝城(永安)に入り、敢て成都に還らず。孔明及び其の他の諸士と相見るを慚ぢたるならんか。且つ吳に報ゆるの志なきにあらずと雖も、是れ容易に行ふべからざることなり。空しく此處に留まりて年を越えたり。而

して此の間に魏吳の關係は又一變せり。

魏文帝は孫權の心中を疑ふこと已ます。遂に浩周といへるものをして、質子を吳に徴せしむるに至れり。權聽かず。文帝大に怒り、章武二年(魏の初三年)九月、征東大將軍曹休、大將軍曹仁、同曹真、其の他張遼、臧覇、夏侯尚、張郃、徐晃の諸名將をして、途を分ちて大舉南征せしめ、明帝自ら之が後に繼げり。孫權辭を卑しくして和を請ふ。文帝許さず。許昌より南征して、郢州を復し、權は江に臨んで之を拒守せり。

魏の大舉南征するに當りて、蜀また兵を出さば如何。孫權之を憂ひ、太中大夫鄭泉といへるものをして蜀に使せしむ。固より舊交を復せんとするのみ。蜀よりも太中大夫宗璋を遣りて之に報る。吳蜀また通するに至りぬ。つらく、吳の行動を察するに、魏と争ふ時は蜀に通じ、蜀と争ふ時は魏に降り、浪に任せて來去す。魏には天下統一の望あり。蜀には漢業復興の志あり。故に國是定まりて、歩武整然たり。然れども、吳には此の望なく、此の志なし。唯魏蜀兩國の間に處して、或は東し、或は西し、一時を糊塗して、江南一帯を保たんとするのみ。猛將

勇卒多しと雖も、國としての行動の動もすれば卑屈に陥るものあるは、是れ保守の二字を脱却せざるが爲めなり。吳人は終に能く爲すなきものか。

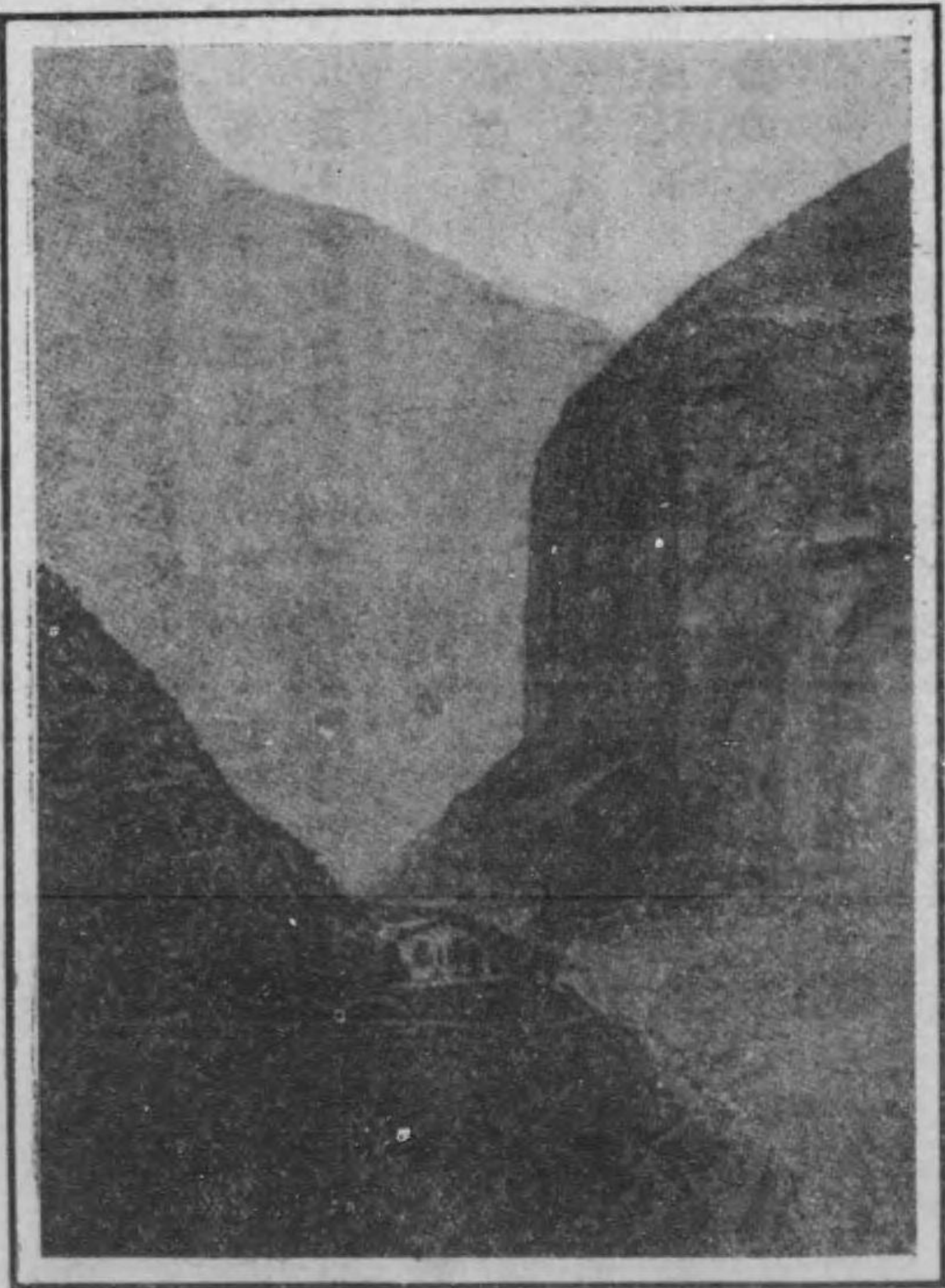
玄德、魏の大舉南侵するを聞き、書を陸遜に送りて曰く、「賊（魏軍）今は已に江漢に在り。吾れ將に復東しせんとす。將軍其れ能く然否をいふや」と。遜答へて曰く、「たい恐らくは軍新たに敗れて創痍未だ復せず。始めて通親を求む。暫らく當に自ら補ふべし。未だ兵を窮むるに暇あらざるのみ。若し推算せずして遠く來らんとすれば、命を逃るゝ所なし」と。遜の報答は頗る其の要領を得たり。玄德何ぞ敢て動かん。唯遜を擲擲して一時の快を取れるのみ。實は自ら病みつつありたるなり。

(二) 玄德國を擧げて孔明に託す

玄德は稀歸に敗れてより、白帝城裡閭々の情に堪へず。遂に病を爲す。章武三年に至りて病勢漸く篤し。孔明を召して後事を託せんとす。二月孔明白帝城に至る。玄德乃ち孔明に命じて太子を輔けしめ、李巖（命書）を以て副たらしむ。

病革りて復起つべからず。玄德孔明に語りて曰く「君が才は曹丕に十倍せり。必ず能く國を安んじ、大事を定めん。

若し嗣子輔くべくば之を輔けよ。如し其れ不才ならば君自ら之を取れ」と。孔明涕泣して曰く「臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を致し、之に繼ぐに死を以てせざらんや」と。



(つ爲と城帝白を岸對)梯 良 孟 州 夔

玄德また詔を作りて太子に與へて曰く「人は五十にして、天と稱せず。吾れ年

已に六十有餘何の恨む所かあらん。たゞ卿が兄弟を以て念と爲すのみ。之を勉めよ、悪は小なるを以て之を爲す勿れ。善は小なるを以て爲さざる勿れ。惟れ賢を惟れ徳とせよ。以て人を服すべし。汝が父は徳薄くして傲ふに足らず。汝丞相(孔明)と事に従ひ、之に事ふること父の如くせよ」と。

夏四月、玄德遂に崩す。年六十有三なり。諡して昭烈といふ。
孔明、喪を奉じて成都に還り、李嚴を以て中都護と爲して永安(白帝)に留鎮せしめたり。

五月、太子禪位を承けて立つ。年僅に十七なり。之を後主と稱す。

白帝城、孤を託するの一事は、實に千古の大悲劇なり。美談なり。草廬三顧の情を追懐し來りて、白帝城、託孤の心に及ぶ時は、無限の感慨、禁じ得ざるものあり。此の情、此の心、唯能く玄德の大なる所以なり。孔明が鞠躬盡力、死を以て繼がんとする亦之が爲めなり。一度相遇ふてより、肝胆相照し、至誠一貫す。古より君臣の相得ること、此の如きは儔ひ無しといふべし。

陳壽曰く、

先主(玄德)は、弘毅寛厚にして人を知り、士を待つ。蓋し高祖の風あり。英雄の器なり。國を擧げて孤を諸葛亮に託するに及びて、而かも心神二つなし。誠に君臣の至公、古今の感軌なりと。

君臣の至公、古今の感軌之を白帝城に於いて見るを得たり。然れども玄德を以て、單に高祖の遺風ありといは、人或は之に惑はん。是れ寛厚にして人を知り、士を待つに於ていふのみ。韓信、英布、彭越を除き、蕭何を獄に下し、樊噲を斬らんとしたるに至りては、玄德と相比すべからず。殊に漢家の長久を圖りては、悉く異姓の諸侯を除き、劉氏にあらざれば王たること能はずと、盟約せしめたり。之を「若し不才ならば、君自ら之を取れ」といひたる玄德の心事に比すれば、雲泥萬里の差ありといふべし。高祖は宏量なるが如くにして、火の如き忌心あり。玄德は才鋒脱出して、間々抑ゆべからざるものあるも、其の情は春の如くにして、霽霧たり。功の大なるは高祖に如かず。情の美なるは玄德を勝れりとす。玄德の孔明に於けるが如きは、高祖に於ては之を見るべからざるなり。

人は又孔明を以て張良に比せんとするもあり。是れ其の智略に於ていふの

み。良が高祖に仕へたるは、韓を復興せんがため其の猜忌心に富むを知りて仕へたるなり。事成らば退かんとして仕へたるなり。良は其の才略宏遠にして、其の心事また高潔なるも、本より三顧の情に感じたるにあらず。成敗を度外にして一身を玄徳に捧げたる孔明に比すれば、君臣の至誠同日にして談すべからざるものあり。

胡致堂曰く、

玄徳襟度夷曠にして磊磊落落々々、孔明と君臣師友の契を兼ね。三代以還未だ其の比を見ざるなり。

事の美なるは功成りて初めて美なるにあらず。事の醜なるは功成らずして後に醜なるにあらざるなり。心事即ち是れ美醜。孔明は三分割據を爲し得たるに過ぎず。然れども其の至誠は美なり。其の大節は美なり。孔明の尊ばるゝ所以實に茲に在り。玄徳とならびて史上の雙壁たり。而して今や白帝城裡其の一を失ふ。玄徳は漢室興復の大責任を孔明の肩に残して去りたるなり。

第十二章 施政

(一) 施政の用意如何

後主劉禪は年猶ほ若くして資性また闇弱大事に當るの器にあらざるなり。政治軍務悉く孔明の雙肩にかゝれり。嗚呼此の庸劣なる天子を戴きて内は政綱を張り、魏吳の強敵を控へて、外は軍威を振ひ、以て漢室興復の大事を遂げざるべからず。玄徳崩後に於ける孔明の責任の重大にして、地位の至難なる誠に想ひ見るべきにあらずや。

孔明即ち教を發して群下に與へて曰く、

夫れ參署は集思を集め、忠益を廣む。若し小嫌を遠ざけ相違覆するを難せば曠く闕損せん。違覆して而して中を得るは、敵讎を棄て、珠玉を獲るが如し。然れども人心盡す能はざるを苦しむ。たゞ徐元直(庶)これに處して惑はず。

又董幼宰(和)參署七年事至らざるあれば、十反に至るも來りて相啓告す。苟も

元直の十一、幼宰の勤渠國家に忠あるを慕は、則ち亮の過を少うすべし。孔明又曰く、

昔し初めて州平(崔)と交り、屢得失を聞く。後元直と交り、勤めて啓誨せらる。前には幼宰に參して言毎に則ち盡し、後には事に偉度(胡)に従ひて、數々諫止あり。資性鄙暗にして悉く納るゝ能はずと雖も、然れども此の四子と終始好合す。亦以て其の直言を疑はざるを明らかにするに足れりと。

これ等の言によりて、吾人は先づ孔明が幼主を佐けて政に當るの用意を見るべきなり。即ち小嫌を遠ざけず、違覆を難せず。審に得失を察して、其の中正を得んことを期したり。廣く直言を納れ、深く自ら慎む。これ施政者の用意として最も尊ぶべきものにあらずや。若し之に反して愛憎の念を逞くし、己れに忤ふものを斥けんか。何を以てか人材を羅致すべき。たゞに阿附佞媚の徒を親愛して忠直の言を忌みたらんには何を以てか事の公平を得ん。時に乘じて權要に立つものは、深く自ら謙抑するも、猶ほ專擅の譏を免れざらんとす。況してや這般の用意なく、唯權勢を示して我意を恣にせんか、何を以てか政の平清を得

ん。人は權勢に屈從するも、決して心服するものにあらず。壓抑と反抗とは同一物の表裏を謂ふのみ。驕るものゝ滅ぶるは理に於ては見易きことなり。然れども自ら其の位置に在りて能く之を行ひ得るもの果して幾人かある。世には些細の地位と權勢とを得て、早や既に傲然たるもの多し。孔明の言は此等の人々に與ふべき一大訓辭なり。而して孔明が自ら政に當るの態度如何。

(二) 施政の態度如何

孔明嘗て自ら簿書を校す。主簿楊顛之を諫めて曰く「治を爲すに體あり。上下相侵すべからず。請ふ明公の爲に家を作すものを以て之を譬へん。今、人あり。奴に耕稼を執らしめ、婢に炊爨を典らしめ、雞に司晨を主らしめ、犬に吠盜を主らしめ、牛に重載を負はしめ、馬に遠路を涉らしむ。私業曠きことなく、求むる所皆足り、雍容枕を高くして飲食せんのみ。一旦盡く身を以て其の役を親らせんと欲し、また付任せず。其の體力を勞して此の碎務を爲す。形疲れ、神困しみて、終に一も成るなし。豈に其の智の奴婢雞狗に如かざらんや。家主たるの

法を失へばなり。是故に古人稱す。坐して道を論ずる、之を三公と謂ひ、作りて之を行ふ、之を士大夫と謂ふ。故に丙吉は道に横はる死人を問はずして、牛喘を憂ひ、陳平は敢て錢穀の數を知らずして、自ら主者ありといへり。彼れ誠に位分の體に達す。今、明公の治を爲す、乃ち自ら簿書を校して流汗終日。亦勞せずや」と。孔明深く之を謝す。

政を爲すに固より體あり。百般の政務、各々主司ありて、丞相之を綜理し、たゞ能く器能を盡さしめば、紀綱自ら張るべし。然れども、こは常人に於て將た常時に於て言ふべきなり。三國對立の當時、關羽の主を奉じ、強敵をひかへ、一身にして國家の重任を負へる孔明は、此の如くにして、悠々たること能はざるなり。陳平は策略に富み、口辯を以て一時を利するを得意とするものなれども、未だ至誠を以て許すべからざるものあり。孔明固より此の如くなるべからず。白帝城裡、孤を託せられてより、既に已に鞠躬盡力、死を以て之に繼がんことを決心したり。されば自ら偷安に流れんとするを惡むこと、蛇蝎の如く、一身萬事に當りて、其の心力の堪へ得る限りを盡したり。楊順が所謂治を爲すの體、固より能く之

を知りて、而して猶ほ終日簿書を校するに至る。嗚呼、此の至誠、是れ孔明の眞面目なり。生命なり。又其の大なる所以なり。獨り群下の器能を盡さしむるのみならず、自ら小心翼翼々々として政に當る。楊順は其の勞を傷みて、即ち此の言を敢てしたるものなり。情に於ては察すべしと雖も、孔明遂に其の言に従はず。精勵刻苦して死に至るまで渝らざりき。僅に臺閣に上りて、夙く既に偷安の氣を生じ、誠意を以て國事を憂ふるを忘却せんとする大官諸士、己れの責任をば人に假託し、人の名譽をば己れに奪取し、恬として慚づるなき顯貴の諸士、少しく省みて可なり。

（三）施政の方針如何

孔明が施政の用意と、其の政に當るの態度とは、既に之を述べたり。而して其の施政の大方針は如何。今、建安十九年に溯りて孔明の自ら言ふ所を聞かん。孔明、玄德を輔けて蜀を治むるに、頗る嚴峻を尙び、人の怨嗟するもの多し。法正、孔明に語りて曰く、「昔し高祖、關に入り、法三章を約し、秦民能く徳を知れり。今、

君威力を假りて、一州を據有し、初めて其の國を有し、未だ惠撫を垂れず。且つ客主の義宜しく相降下すべし。願はくは刑を緩うし、禁を弛め、以て其の望を慰せん」と。

孔明は之に答へて左の如くいへり。

「君は其の一を知りて、未だ其の二を知らず。秦は無道を以てし、政苛にして民怨む。匹夫大呼して天下土崩す。高祖之に因りて弘濟を以てすべし。劉璋は暗弱焉より以來、累世の恩あり。文法羈縻し、互に相承奉して徳政舉らず。威刑肅します。蜀士の人士、專横にして自恣、君臣の道、漸く以て陵替す。之を寵するに位を以てす。位極まれば則ち賤し。之に順ふに恩を以てす。恩極まれば則ち慢る。弊を致す所以、實に此に由れり。吾れ今之を威するに法を以てす。法行はるれば則ち恩を知る。之を限るに爵を以てす。爵加はれば則ち榮を知る。榮恩ならび濟りて上下節あり。治を爲すの要、斯に於てか著れん」と。

孔明が施政の大方針は此の如く明言せられたり。郭冲は曰く、

亮刑法峻急にして、百姓を刻剝す。君子小人より皆怨嘆を懷く云々。
裴松之之を難じて曰く、

亮刑法峻急にして、百姓を刻剝すと。未だ善政にして刻剝を以て稱すべきものあるを聞かずと。

孔明の政治何ぞ百姓を刻剝せん。是れ松之の言の如し。辯ずるを俟たざる也。然れども孔明の施政の峻峻にして、申韓商鞅諸子、即ち所謂法家の學を參取して以て治を爲したるは疑ふべからざるものゝ如し。蓋し寛嚴相濟ふの意なり。試に益州當時の情勢を見んか。其の地西方に僻在して久しく中國の兵亂に關せず。閹弱なる太守の弊政の下に、國民舉つて優柔に流れたり。孔明之を振起せざるべからず。玄德は資性寛厚にして、情に於て忍びざる所あり。所謂寛は水の如く溺死するものを多からしむ。殊に之を當時の益州に施さば弊に重ぬるに弊を以てするものなり。孔明輔相の任に當り、其の溺死者を救はんとならば、則ち火の如き嚴を以てせざるべからず。蜀人は皆眠れり。直に之を提げて、衡を中原に争はんとするは、羊を驅りて虎を攻むるに異らず。故に先づ其の情

眠を攪破し、其の元氣を振興せしめて、始めて用ふべきのみ。法の嚴なるは、此の際に施すべき最良の劇薬に非ずや。孔明、一度蜀に入りて、蜀人は悉く覺醒せられたり。鞭撻せられたり。其の餘りに急なるに驚きて、一時怨言多し。然れども幾許ならずして、怨嗟の聲は仰慕の情と爲れり。

其の心殘忍にして、驕暴、其の政苛酷ならば、民いづれか怨まざらん。其の情偏僻にして、放恣、たゞ法を行ふにのみ急峻ならば、民の怨孰れの日か解けん。然れども己れを持すること恭儉にして、能く民を愛し、能く人を用ゐ、能く秩序を正し、法を行ふこと嚴正に、爵は其の人に非れば幸せず。罪は親なるを以て免さず。大公至正を以て事を裁するあらば、人何を以て之を怨みん。孔明が行ふ所實に此の如し。蜀人服せざらんと欲するも得べからざるなり。

陳壽曰く、

諸葛亮の相國たるや、百姓を撫し、儀軌を示し、官職を約し、權制に従ひ、誠心を開き、公道を布く。忠を盡し、時を益するものは、讎と雖も必らず賞し、法を犯して怠慢なるものは、親と雖も必ず罰す。罪に服し、情を輸すものは、重しと雖も必

ず釋し、游辭巧飾するものは、輕しと雖も必ず戮す。善は微なれども賞せざるなく、惡は織なれども貶せざるなし。庶事精練にして、物其の本を理む。名に循ひて實を責め、虚偽を齒ひせず。終に邦域の内に於て、みな畏れて之を愛し、刑政峻なりと雖も、怨者なし。其の心を用ふることに平らかにして、勸戒明らかなるを以てなり。治を識るの良才、管蕭の亞匹といふべし。

此の言能く孔明が治政の要を説き得たるものといふべし。然れば孔明の政治は、單に所謂法家の政治にあらず。儒家の心事を以て、法家の形式を行ひたるものなり。

所謂無爲にして治すべき世は去りて既に遠し。世の漸く進むに伴ひて、三章の法、また之を治すべきに非ず。上古の民質朴にして、未だ法を設くるの要なき時は、寬嚴其の人の心のまゝなるべしと雖も、既に法を設くるに至りては、之れを行ふこと嚴正ならざるべからず。若し法を枉ぐることに寸なれば、國の傾くこと尺なるべし。法は其の本來の意義に於て、所謂寬を許さざるなり。孔明の見る

所、また此の如くにてありしなるべし。

第十三章 南蠻征伐

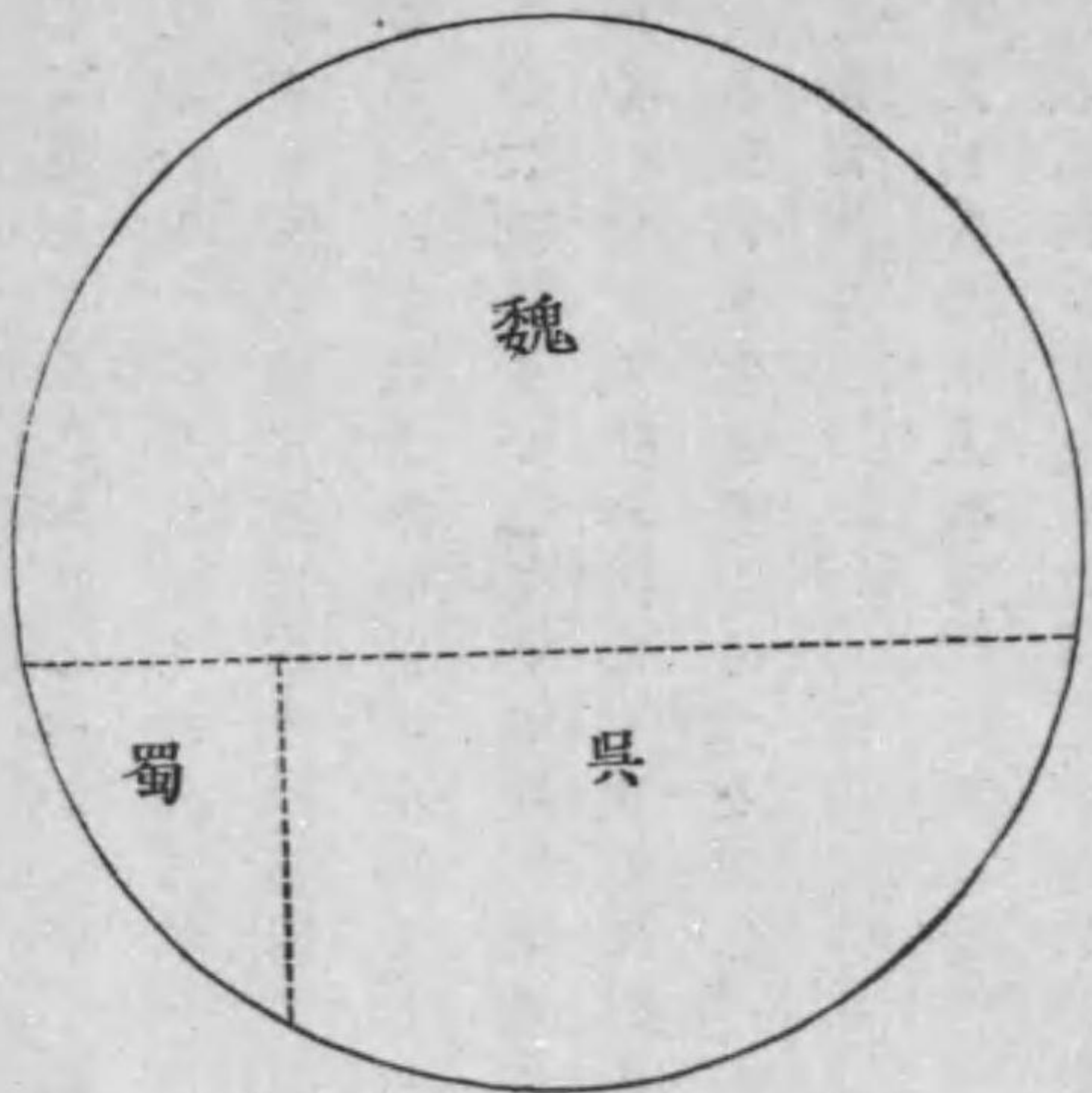
(一) 先づ吳と連和す

玄徳崩じて、民心稍々動く色あり。益州郡の雍闓といふもの先づ反して、太守正昂を殺し、又太守張裔を執へて之れを吳に與へしかば、吳は雍闓を以て永昌の太守と爲せり。時に益州郡の人にして、猛獲といふものあり。武勇を以て著はる。雍闓、孟獲に命じて諸夷を煽動せしめしかば、諸夷多く之に従ふて、勢ひ益々振ふ。牂柯の太守朱襄、越雋の夷王高定等皆叛きて、闓に應じたり。今の四川省の南部より雲南省に至る地の蠻族は、容易に蜀漢の政に服せざるものなり。之を壓服せんには、威武を用ふるの他に道なしと雖も、孔明は新に大喪に遭ひたる際なれば、之を慰撫して兵を用ゐず。内は農を務め、穀を貯へ南方の靈關を閉ぢて民を休息せしめ、以て之を用ふべきの機を待てり。而して其の所謂「機」なるも

のは先づ吳と連和して後に來るべきものなり。

蜀吳を連ねて魏に當らんとするは、草廬を出でんとして夙く已に定められたる大方針なりき。偶々關羽のことによりて、二國怨を結ぶに至りぬ。此の事たるや、固より吳人の背義に基因すと雖も、蜀は魏と戦はざるべからざる運命を有するに當り、加へて吳人をも之を敵とするに至らば、最新にして最微なる蜀は到

底北征の目的を達すること能はざるなり。今、假りに三國の勢力を比較せば上圖の如くなるべし。



天下を兩分して、其北方の一半は魏已に之を領して、土地最も廣く、人材また最も多し。南方は其の三分を吳に、其の二分を蜀に分ち取れり。地の廣さに就て

いへば魏は六、吳は三、蜀は一ほどの比例なるべし。殊に支那の勢力は北方に在り。是れ四千幾百年の歴史の明らかに證明する所なり。魏の勢力が常に吳、蜀の二國を壓して餘りある如く見ゆるは之が爲めなり。

吳は三國の中位に在るも守成に甘んじ江南を保つに汲々たり。蜀は最小にして而して進取せざるべからず。即ち最も困難なる地位に在り。中者と小者と相合して、僅に大者と相當るに足る。蜀が小怨を捨て、吳と連和せざるべからざる所以實に茲に在り。美髯將軍の怨と、大耳翁の憤りとを忘れたるにあらざるも、孔明は大事の前の小事として之を忍びたるなり。

時に鄧芝といふものあり。孔明に語りて曰く「今、至上幼弱にして初めて位に即く。宜しく使を遣はし、重ねて吳と好を温むべし」と。

孔明曰く「我れ久しく之を思ふ。未だ其の人を得ざりしのみ。今日初めて之を得たり」

芝曰く「其の人誰ぞ」

孔明曰く「即ち君なり」と。遂に鄧芝を以て吳に使ひせしむることとなりぬ。

建興元年冬十月、鄧芝吳に使す。時に孫權は未だ全く魏と絶たずして頗る狐疑を抱けり。芝を見るを好まざるものゝ如くなりしかば、鄧芝上表して、見えんことを請ふ。曰く「臣、今來るは亦吳の爲にせんと欲す。たゞ蜀の爲にするにあらざるなり」と。

孫權遂に鄧芝を延見せり。權曰く「我れ誠に蜀と和親せんことを願ふ。然れども蜀主幼弱、國小にして勢ひ偏り、魏の乘する所となりて、自ら保全する能はざるを恐るゝのみ」と。

芝對へて曰く「吳、蜀二國、四州の地あり。大王は命世の英諸葛亮、また一時の傑なり。蜀に重險の固めあり。吳に三江の阻あり。此の二長を合して、共に唇齒たらば、進んで天下を兼并すべく、退ぞきて鼎足して立つべし。此れ理の自然なり。大王今若し質を魏に委ぬれば、魏必ず上は大王の入朝を望み、下は太子の内侍を求めん。若し命に従はざれば、則ち辭を奉じ、叛を討たん。蜀も亦流れに順ふて可を見て進む。此の如くんば、江南の地、また大王の有にあらざるなり」と。

吳王權默然たること稍々久しくして曰く「君が言是なり」と。遂に全く魏と絶

ちて蜀と連和するに至りぬ。

曾て玄徳の在世中、一旦吳と好を通じたるもの、如くなるも兩國の好情固より舊の如くなる能はざりしが、鄧芝吳に使ひするに及びて始めて其の舊交を恢復するを得たり。

建興二年夏、孫權は輔義中郎將張温を使者として蜀に入らしめ、是より吳蜀の信使絶えざるに至りぬ。而して權は後主劉禪及び孔明に書を送る時、必ず先づ之を陸遜に示して其の改定を求めたりといふ。

鄧芝再び吳に使ひしたる時、孫權芝に語りて曰く、「若し天下太平にして二主分治せば亦樂しからずや」

芝對へて曰く、「天に二日なく、地に二王なし。魏を并せたる後の如きは、大王未だ深く天命を知らず。君は各々其の徳を茂くし、臣は各々其の忠を盡し、將抱鼓を提れば則ち戦ひ方に始まらんのみ」

權大に笑つて曰く、「君の誠款は乃ち當に爾かあるべきか」

鄧芝の言は一場の戯れの如くにして、實は然らず。吳と連和するは、魏を伐た

んが爲めなり。魏を伐つは則ち漢業を復し、天下を混一せんが爲めなり。是れ固より玄徳孔明の眞意、誠に鄧芝の言の如くなるべし。

(二) 大に南蠻を征して心戦を試む

今や蜀は吳と連和して、内政また整ひたり。將に大に魏を伐たんとす。然れども南中の地騒擾して定まらず。先づ之を征定して後顧の患を除き去るは大急務なりとす。建興三年春、孔明兵を率ゐて南征の途に上る。馬謖之を送ると數十里なり。孔明曰く、「之を謀て年を経たれども、今や更に良規を恵むべし」と。謖曰く、「南中其の險遠を恃み服せざること久し。今日之を破ると雖も明日また反せんのみ。今、公は將に國を傾けて北伐し、以て強賊を事とせんとす。彼れ官勢の内虚なるを知らば、其の叛また速かならん。若し遺類を殄滅して以て後患を除かば、既に仁者の情に非ず。且つ又倉卒にすべからざるなり。夫れ兵を用ふるの道は、心を攻むるを上と爲し、城を攻むるを下と爲す。心戦を上となし、兵戦を下と爲す。願はくは公、其の心を服せんのみ」と。

善い哉諤の言や。心戦は是れ上、兵戦は是れ下、王者の師は常に徳を先にして勇を後にす。心を攻むるは至難の業にして至大の功あり。孔明が爲す所如何。孔明は自ら越嶲より入りて連戦連勝し、雍闓及び高定を斬り、別將李恢をして益州より入らしめ、又別將馬忠をして牂柯より入らしめ、諸縣の亂民を戡定して再び孔明と相會せしむ。而して南方は全く平定に歸したるものゝ如くなりしも孟獲といへるもの雍闓に代りて其衆を領し抗爭して屈せず。獲もとより武勇ありて夷漢皆之に服したり。孔明戦つて獲を破り之を生擒す。然れども敢て刑戮を加へず。營陣の狀を見せしめて曰く「此の軍如何—

孟獲曰く「先きには虚實を知らず故に敗れたり。今營陣を見る。若し唯此の如くならば即ち勝ち易きのみ」と。

孔明笑つて獲を放ち更に戦はしむ。戦つて七縱七擒す。孔明猶ほ獲をして去らしめんとしたるに獲去らずして曰く「公は天威なり。南人また反かず」と。彼は終に心服したり。

孔明は更に進んで滇池に至れり。是れ今の雲南の地なり。南中悉く平ぎし

かば、孔明は土酋を擧げて以て各地を治せしむ。或人之を危ぶみて孔明を諫むることあり。孔明曰く「若し外人を留めば則ち當に兵を留むべし。兵留まれば則ち食する所なし。易からざること一なり。加ふるに夷新に傷破し、父兄死喪す。外人を留めて兵なくば、必ず禍患を爲さん。易からざること二なり。又夷はしきりに廢殺の罪あり。自ら釁の重きを嫌ふ。若し外人を留めなば、終に相信せじ。易からざること三なり。今吾れ兵を留めず糧を運ばずして綱紀粗々定まり、夷漢粗々安からしめんと欲するが故のみ」と。孔明は其の俊傑孟獲等を收めて以て官屬となし、金銀丹漆、耕牛、戰馬を出さしめて以て軍國の用に供す。時に建興三年の秋なりき。是より孔明の世を終る迄南中また反せざりき。

地理を按ずるに、孔明が征定したる四郡益州、永昌、越嶲、牂柯のうち、牂柯は今日の貴州、永昌は雲南の西南端、緬甸と相接するの地なり。孔明が成都を發して南下したるものとすれば、道途頗る遙遠なりといふべし。而して其の南下の終點ともいふべき滇地は雲南府城の南に在り、一名昆明池といふ。廣輿記によれば周五百餘